
憑かれて疲れて

灰羽紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑かれて疲れて

【Nコード】

N7847P

【作者名】

灰羽紳士

【あらすじ】

謎の少女、桜沢 潤に惹かれ、俺はなんとなく民俗学研究部を訪れる。そこで待っていたのは……

「民俗学研究部へようこそ」そう言われて入った部活は霊に関する揉め事を解決するというどう考えても冗談としか思えないような活動内容だった。そしてその言葉は俺の平和な日常に終わりを告げる終末の角笛となり、想像を遥かに越えたアブない日々の始まりだった。俺は一体、どこで間違えたのだろうか。そんな自問自答を繰り返しながら今日も俺は厄介事に巻き込まれる。

黄昏に憑かれる 其の一（前書き）

以前、投稿していた奴をそのまま写したものです。久々に続き投稿してみようと思ったたら使っていたメールアドレス忘れてしまつて再度、アカウントを取得しました。この冬休みを利用して続編も投稿していこうと思うのでよろしく願いします。

黄昏に憑かれる 其の一

人生とは平凡で起伏がない方が楽だし、結果的それが一番、幸せのはずだ。しかし今、私はこの状況を幸せに感じない。不思議だ。学校生活も私生活も平和そのものだ。順風満帆を絵に描いたよな……。いや、分かっている分かっているも分らないフリしているだけだ。そう、『彼女』だ。学校生活における重要な要素『彼女』。そうだこの何をして満たされない、ぽっかりと開いた穴埋めるにはそれしかない。妄想かも知れない、幻想かもしれないけど『彼女』がいれば、きっとこのしょうもない人生にも艶みたいなものが出てくるはずだ。そうだよっぴりそうなんだ。

とは言っても、欲しいって言うってもらえるならとくに俺も整理券貰っていますって。まず自分の状況を見ろっつー話だよな。女友達は男友達だってほとんどいない。放課後はなんの部活もせずただ図書室の片隅で本を読むそんな男に『彼女』……我ながら寝言だな。そんなしょうもない事を考えながら、今日も俺は一人、図書室で読書に勤しんでいる。

ここは図書室の一番、奥のさらに本棚と壁の袋小路になっている言ってみれば図書室の辺境であり、置いてある本も古典文学の全集やその他諸々のわけの分からない本が押し込められている。

ほとんど誰も来ないため勝手に俺専用の聖域として使わせていただいている。そして今日も放課後、部活をするでもなく、帰宅するでもなくここに來てダラダラと本を読んでいるわけだ。

辺りが暗くなってきたのを感じ、腕時計で六時をちよつとまわっているのを確認する。本を閉じ、溜息をつきつつ立ち上がる。

さて、そろそろ帰るか。本当、俺なにやってんだろうな。

そんな事を考えながら鞆を手にとろうとした時だ、こちらに向かつてくる足音に気が付いた。

この場所に人が来るなんて珍しいな。まあ別に全く人が来ないっ

てわけではないからさほど驚く事でもないが、他人に特に同学年の人間にここに俺がいつもいるという事がバレるのは避けたかった。ただでさえあまりよくない俺のイメージがさらに悪くなるような気がする。まあちやうど帰るところだったし、なんとかさりげなくやり過ぎそう。

俺は鞆を肩にかけ、足音のする方向に歩を進める。足音の大きさから考えて曲がり角でちやうど鉢合わせになりそうだ。

曲がり角で予想通り足音の人物とちやうどすれ違う。その人物は眼鏡をかけ、髪は背中ぐらいまでの長さのどこか涼しげ雰囲気を持つ女子だった。本を数冊、胸の前で両手に抱えている。なんか図書室のよく似合う容姿に思えた。どうでもいいことだけだな。

俺はそのまま、とっとと消えるつもりだったが予想外の事が起きた。そう、すれ違った後ろの女子から声をかけられたのだ。

「こんな所に人がいるなんて珍しいですね」

しかし、俺は特にリアクションは起こさずただ歩く。もしかしたら独り言かもしれないし、それで振り向いて何もなかったらなんか自意識過剰みたいで赤っ恥だしな。とりあえず次の一手を待ってみる。

「よくここには来るんですか？」

よし、その一言を待っていたぜ。

俺は振り向き、わざとらしく辺りを見回し、自分を指さす。

「あつもしかして俺？」

我ながら白々しい。結果的になんか恥ずかしいな。

「他に誰かいますか？」

その子はいきなり顔で軽くため息をつく。

「まあ確かに。ここに来たのはたまたまだけど？ ちょっと探している本があつてね」

「ここいら一帯は古典文学とか英文学の原書しかないよ？ 君の姿はこの図書室で何回か見たことあるけれどそんな本を読んでいるところはおろか持っているところも見えないわよ」

そう言われればここいらには今時の学生が読むわけなさそうな本
しかな

かったな、確か。そしてその理由こそがこの場所を聖域たらしめて
いる理由でもある。

「ああっ……そうだっけ？　なんか急に読みたくなったんだよ。古
典文学が無性に」

「苦しい言い訳ね。安心して別にあなたがそこを自分用の場所とし
て使っている事についてどう言う気はないから」

彼女はこちらに微笑みかけながら言う。

ちっやっぱりバレてたか。しかし考えてみたら注意する以外でこ
んな所に籠もっている人間に話しかける理由などあるのだろうか。
という事は俺は今からいつになにか注意されるのか？

「じゃあ何か俺に用でも？」

「用は特にないんだけどね。去年まで私のいた場所に住みだした新
しい住人は一体、どんな人かな？　と思ってね」
別に住んでいるわけじゃないけどね。

「あんたもここに？」

少し、意外かな。見た感じや物腰からクラスで居場所をなくすよ
うなタイプには見えないけど。

「そう。ここ、いいよね。なんかこの狭さ、特にさっき君がいた行
き止まり。なんか妙に落ち着くのよね。で、最近めっきり来なくな
ってただけど急に恋しくなってるね」

彼女はどこか嬉しそうに喋っている。もしかしたら思わぬ同類の
発見を喜んでいるのだろうか。じゃなければ話しかけてくるはずが
ない。だとすればこれはうまくすれば彼女にお近づきになれる神が
くれたチャンスではないだろうか。それが俺の脳内コンピューター
が出した愚かなる結論だった。

とにかく落ち着け！　落ち着くんだ。ここは冷静に対応するんだ。
ここは恋の入り口としてはかなり入りやすい雰囲気だ。ここで気の
利いたセリフのひとつでも言えばこのチャンスポール、ホームラン

に出来るはずだ。

「確かに、ここはなんか周囲の世界から隔絶されたような感じがありますよね」

なんだその中二病、発言はあ！！ 冷静に考えて紡ぎ出されたセリフがそれか。我ながらどういふ思考回路をしてるんだ。

黄昏に憑かれる 其の二

微妙な空気が流れる。彼女は少し、不思議そうな表情をし、首をわずかながら傾けている。

「確かにそこは『墓地』だから感覚の鋭い人ならそういう違和感を覚えるかもね」

「墓場？」

随分、気味の悪い俗称だな。なんか曰くでもあるのだろうか。

「あつ別に変な意味があるわけじゃないよ。そこは本の『墓場』なのよ。かなり古い本とか誰も読まない本、破損した本とかで書庫に入りきらなかった本がそこには押し込められているっていう意味ね。気付かなかった？」

彼女は慌てて訂正する。

そう言われればそうだったかもな。この辺の本に特に興味がなかったため気にしなかったがそうだったのか。

「なるほど……」

と納得したものの、俺にとってそんなのはどうでもいい。俺としてはここから巧く会話を繋げ、とりあえず一緒に帰るところまでもっていききたいところなのだがやはり気の利いた言葉は全く浮かんで来ず。ここからどうしたらいいのかすら分からずにいた。気付いたのが俺には人とのコミュニケーションにおける経験値が絶望的に不足していたのだ。ここまでの人生で最小限にしか人と接して来なかった。その致命的なツケが今、俺の脳内コンピュータを完全にフリーズさせていた。つくづく我ながらダメな奴だな。

「では俺はこれで……」

俺は場に流れる妙な空気に耐えられず、とりあえずこの場からの逃亡を本能的に選択。

帰ってどうする！！！どんだけ俺はチキンなんだよ。せめて名前とかクラスを聞くとかやりようはあるだろうにとすぐに後悔ばかりが

頭をよぎる。全く、本当に自分で自分が嫌になる。

しかし今回、運命の神様の前髪は地面に着くほど長かったらしい。再度、背後から彼女の声がした。

「あっちよつと待って。今から帰るんでしょ？ 私も一緒にいいかな？ 私もちょうど帰るところだったから」

「ん？ 別に構わないけど」

俺は相変わらずの素っ気なく返事をする。クールなふりをしているが内心かなりテンパっている。

自分の人生、今もしかしたら確変に入っているのかもしれない。

そんな勘違いをしまいそうなほど同時に俺は舞い上がっていた。

「よかった。自己紹介がまだだったね。私は三条 見坂。よろしく」
ちよつと恥ずかしいなと思いつけられる感じがする。よく見るとかなり「グッ」惹きつけられる感じがする。

「樋口 クロエだ。よろしくな」

季節的にはもう初夏といったところだが俺にとってはようやく春が来た。そんな気がした。

俺達は図書室から出るとお互い、今まで読んだ本について語り合った。驚く事に彼女は俺の振る大概の本を読んでいた、大体のあらすじを知っていた。自分では結構、マニアックなチョイスだと思っていたのだが、彼女が読む本の幅が広いのかそれとも本当に好みが一致しているのか、後者なら生まれて初めて運命ってモノを信じたくなるところだ。

彼女と喋りながら校舎を出る。彼女の横顔に初夏の夕日が射す。

うーむ。近くで見れば見る程、彼女の事が不思議と愛おしく思える。それほどに夕日と彼女は似合うのだ。ゲレンデ美人とかよく聞くけど彼女さしずめ『黄昏美人』といったところか。会話の内容そっちのけでついみとれてしまう。あまりジロジロ見るのは失礼だとは思うがなんか妙な中毒性が彼女にはあった。

校門前の階段にさしかかろうとした時、突然、彼女が立ち止まる。俺は数歩先に歩き、彼女が来ない事を認識し、同じく立ち止まる。

「ん？ どうした？」

そう問いかけながら、俺は振り向く。そこには当たり前だがとても嬉しそうに微笑み、たたずんでいる彼女がいた。

「私は今、とても嬉しいの」

そう言いながら彼女はゆっくりとこちらへ歩を進める。

「ニュースでも言っているように現代人は活字離れによって本を読む人が少なくなったわ。そんな現代社会において偶然にも出会った人と読んだ本の内容をお互いが知り、語り合える。これはなかなかないことだと思わない？」

「まあ確かに。俺も読んでいる本がここまで一致する人と会うのは初めてだ。本すら読まねえ人も珍しくないからな」

「でしょ？ しかも私達は今とかつて同じ場所にいた。そして今日の出会い。陳腐な言い回しだけれど運命を感じずにはいられないわ」
恥ずかしくなって、思わず目を逸らしたくなる程、いつの間にか彼女との顔距離は縮まっていた。今にも触れてしまいそうぐらいだ。

「私達、付き合わない？」

瞬間的に頭の芯が熱くなるのを感じた。生まれて初めてされる女子からの告白。かなり興奮し、そして混乱している。

なんだ、このあり得ない展開は。昨日まで友達すらまともいなかった俺に

いきなり彼女？ いやいや、確かにそんな妄想はしてたけどまさか本当に起こるとは……。俺、明日死ぬんじゃないだろうか。

「それは随分と急な話だな。俺達、今日会ったばかりだぞ」

とりあえずここで二つ返事でオッケーするとなんか俺がガツついてるみたいで格好悪いとりあえず一呼吸置こうなどとガキっぽさ丸出しの発想が瞬間的に発現し、反射的に発言する。

「男と女のこういう関係は勢いが大事なの。時を置くとどうしても冷めてしまうものよ。今、私はとてもあなたに興味を持ち、もっと喋りたいし、もっとあなたの事が知りたいと思ったの。それとも極

「口君は私じゃ嫌？」

「いや、全然。むしろ俺なんかでいいの？　って感じの方が強いぐらいだ。なんか申し訳ない気持ちだよ」

「じゃ決まりね。あらためてよろしくね、クロエ君♪」

そう言うと彼女は俺の視界いっぱいになり、今日の一番の笑顔がある。俺は今、生まれて初めて心臓というモノの存在、鼓動している当然の事象を再認識する。緊張のあまり背中にじっとりかいた汗ですら幸福を実感する要素に思えた。

「ねえクロエ君、目をつぶってくれるかな？」

黄昏に憑かれる 其の三

「えっなんで？」

「つき合い始める記念よ。あなたの『初めて』이었다こうと思って」
おいおいなんだこの神展開は夢か幻か？ でなきゃ俺の背後には
恋愛の神様でも降臨しているのか。

「お、おう」

俺はとりあえずその場の流れのまま従い、目を閉ざす。彼女の恋
に関する基本方針が『勢い』だというのならこのまま流れに乗っし
まおうと思ったのだ。恋愛の過程に段階があるとしたら俺は今日
で一氣に何段進んだんだろうか。

おそらく目をつぶればキスをしてもらえると俺は勝手に予想し、
唇に来るであろう未知の感触に期待し興奮する。自分でも今どうい
う思考状態なのかよく分からなかった。

しかし、俺の予想を裏切り、唇に柔らかい接吻は訪れず、代わり
に甘い幻想をうち砕く衝撃が胸を貫く。呼吸は一瞬、全く出来なく
なると共に俺の体が宙に浮く。体勢はちょうど棒高跳びの背面飛び
のような状態で防御ほぼ不可能な体勢だ。後ろには階段、しかも確
か三十段程の高さ、死を瞬間的に意識する。目の前にうつる彼女は
変わらない笑顔。その笑みにはどういう意味があるのだろうか。やっ
ぱり俺はなんか騙されたのだろうか？ そうだよなそんな都合のいい
ことあり得ないよな。死の瞬間とは今までの人生の走馬燈が見える
と聞いていたが全然見えねえな。

そんな事を考えながら俺の体は引力の法則に従って地面に引っ張
られようとしたその瞬間である。凄まじい速度何者かがで三条 見
坂の横をすり抜け俺に向かい右手を伸ばして跳躍する。そして俺の
胸ぐらを乱暴につかみ左手で手すりをつかむ。一瞬、全ての勢いが
相殺され空中で静止する。そのままそいつは力任せに俺を階段の脇
の植木の茂みに投げつけた。

茂みに叩きつけられた衝撃と共に細い木の枝が顔や手に刺さったり、引っかかりたりする痛みが走る。何が起こったのか俺は全く理解出来ず、混乱し、思考も完全に停止し、茫然自失の状態になっていた。

どれくらいたっただろうか……いや実際のところ経過した時間はほんの一、二分だったかもしれない。ただ俺にとっては悠久の時間をたゆたっているような気分だった。

そんな惚けていた俺を鋭い罵声が現実性に連れ戻してくれた。

「おい！ その馬鹿。いつまでぼうっとしているつもり！」

俺は起きあがり、声のする方へ向く。そこには手すりに腰を掛けこちらを睨みつけている女性がいた。制服を着ているのでうちの生徒である事は間違いない。美人というよりは可愛いよりの顔で髪は肩にかかるかどうぐらい、どこか小動物を連想させる少女だった。「こんな所で背面飛びの練習か？ 随分、酔狂なご趣味をお持ちだ」彼女は皮肉めいた笑みを浮かべる。

「いや、違うんだ。さっきまで女といっしょにいて、いい雰囲気だったのに何故か、突き飛ばされて……」

「まああなたにはそう見えただんでしょうね」

「ん？ どういう意味だ」

「こっちの話よ。それより今回の事の経過を簡単に説明してくれないかな？」

彼女はポケットからメモ帳を取り出す。話そのものに興味がありそうなのは物腰と態度でなんとなく分かるが彼女の真意がよく分かっていなかった。

「そんなもの聞いてどうする？」

「ん？ まあ純粹に興味があるだけだが嫌かな？」

「まあな。結局、俺は騙されたわけだろ？ 今、冷静に考えるとかなり浮かっていたようだな俺は。恥ずかしい話だ。話すのはちょっと抵抗があるよ」

その女は茂みに座り込んだ俺を見下ろし、足を組みながら少しあ

きれた表情を浮かべていた。

「そう言わずにさ。別に言いふらそうっていうじゃないんだから。それにだよ君の目の前にいる人物は君の命の恩人だよ。それくらいしてくれたってバチは当たらないだろう?」

それを言われてはグウの音も出ない。仕方なく私は事の一部始終を彼女に説明する。聞いていた彼女は俺が言葉紡ぐたびに表情にあきれの色を濃くしていった。そして話し終わると同時にため息をひとつつく。

「お前、そんなの途中つと言うよりも最初からおかしいって気付けよ。どこの世界に図書室の片隅で引きこもっている人間に興味を持つ奴がいる? 全く……」

彼女は冷たく言い放つ。同感だ。

冷静になった当人でもバカだったと感じているのだ。第三者から見れば尚更俺の行動は愚かしく映ることだろう。

「しかし、あの女……一体」

「さあ、怪異の目的なんてあってないようなものだしね」

ん? 今、こいつ『怪異』って言わなかったか? 俺は同級生の女に殺されかけたと思っていたのだが?

「怪異?」

「ああ、別に気にするな。どうせすぐに信じろっていつでも無理な話だ。ただこの

世界には少なからずそういう『モノ』もいるという事だ」

「いきなりそんな非現実な事言われてもいまいち、ピンとこないな」

「気になるようなら、その女について調べてみればいい。名前くらいは聞いているんだろう? おそらくだが同級生にはおろかこの全校生徒の中にもそんな女は存在しないだろうさ」

随分な自信である。まるで全ての答えを知っているような口ぶりだ。

「あんた、何か知っているのか?」

「さてね。そろそろ私は行くよ。あと、図書室のその場所もう行か

ない方がいいぞ」

その女はそう言いながらゆっくりとした足取りで階段を上がっていく。

頼まれたって行くか。せっかく聖域だったが、こんなケチがついてしまった以上、しばらくあそこには行く気にはなれないだろう。

「あんたの名前、一応教えてもらえるか？」

特に理由があるわけではなかったがなんとなく彼女の名前が知りたくなった。

彼女は階段の最上段で立ち止まると少し考えた後に一言。

「桜沢 潤だ」

桜沢 潤ねえ……

後日談。面倒だとは思ったがやはり決着を見ないのは俺としても気分が悪い

ので三条 見坂について独自に調べてみたがやはりこの学校どこにもそんな人間は存在しなかった。過去にそういう生徒がいたか調べればもしかしたら出てくるかもしれないが俺の情報収集能力がはやくも限界に到達、断念。まあ在校生に存在しないというだけで結果は出たようなものだが。

恋は錯覚だというのなら俺は間違いなくあの瞬間、恋に落ちていた。夕日の光が照らす三条 見坂の姿に。もしかしたら同一の存在に出会えた嬉しさに俺はときめいていた。そして殺されかけるといふ過程を経て、錯覚から覚めたというわけか。恋は錯覚というがいやはや……。

平凡で素晴らしい日常を退屈だと思った矢先の出来事だ。まさかわずか一日の間に恋に落ち、生命の危機に瀕し、自分の世界観が変わるとは驚きだ。分らないものだね、人生。

「とりあえずもう少し歩いてみますか」

私は自室の窓から黄昏を眺めながら静かにそう呟いた。

ただ、そこに辿り着くことの難しさ 其の一

「オーパーツ（場違いなモノ）」そういうモノが少なからずこの世界に存在する事ぐらいは知っていたがテレビや本で見たり、聞いたりする分にはなかなか興味深い話だと思っし、ロマンすら感じる。しかし、実際、自分がそういうモノ出会うとどういうリアクションをしているのか困る。というより異常さがの方が先行してしまい気持ち悪いとさえ思う。

俺は今、学校の廊下で一体の地蔵と対峙していた。

事の始まりは昨日の昼休みまでさかのぼる。

俺は友人と屋上への入り口の階段に腰掛けている。

「桜沢 潤？」

その男はそう言いながら購買で買ったウインナーパンを一口嚙る。彼の名前は牧野 涼、俺の数少ない友人のひとりである。俺とは違い交友関係も広く。それなりにビジュアルもいたためモテると俺のコンプレックスを体現したような奴ではあるがなぜかその腐れ縁は切れずこうしてたまに一緒に飯を食ったり、遊んだりするのは自分でも不思議だ。

「知ってるか？」

「まあある程度はね。何？ そいつがどうかしたか？」

「分かる範囲でいいから、どういう人物か調べてくれないか？」

牧野はパンを食べ終わり、紙パックのコーヒー牛乳を飲み、ニヤニヤとした笑みを浮かべる。

「なんだよ」

「いや、意外だなと思ってね。重度の引き籠もり体質で学校に来ていだけで既に奇跡と謳われるクロエが女性に対して積極的にアプローチをかけようとするなんてね。驚きと同時に感動すらおぼえるな。明日は赤飯でも炊こうか？」

「言い過ぎだ。俺はどんな存在だよ。そこまで酷くない」

少し、怒気を含めて切り返す。がまあ言ってる事の方角性はある程度、正解なのが痛いな色んな意味で。

「まあまあ。もちろん友人としてそれくらいならいくらでも協力させてもらいますよ」

なんか、態度が微妙なような……まあいいか。

「しかし、桜沢 潤とはなかなか渋いチョイスですな」

牧野の『あーそこきたか』という感じを空気と態度でなんとなく分かる。そんな微妙かな。自分的には充分可愛いと思うけどなあ。

「なんだよ、なんか問題でもあるのか？ あつ別にまだ女性として好きとかそういうのじゃないからな。一人物としてどういう奴なのか興味があるだけでまだそういう段階じゃないんだ、マジで。誤解するなよ」

「異性に対するそういう感情は好きと同義だよ、クロエ。」

「ふーん。そういうもんかね」

「そういうもんだよ。あと『あの』桜沢 潤を全く知らないというのめどうかと思うぞ。友人としてもう少し他の人と会話をしたいものだ」

「大きなお世話だよ。それよりそいつ結構、有名人なのか？」

「ある意味な。フレッシュな新一年生の中にダブっている生徒がいれば嫌が応にも目立つだろう？」

「……マジで！！」

うちの学年にそんな奴がいるのか。全然知らなかった……。牧野の言うとおりもう少し人と喋るべきかもしれない。

「マジもなにもうちの学年じゃ割と有名な話だぞ」

「ふーん。しかし、留年とかしたら普通、学校を辞めたりするもんだと思っただけぞ。それは在学してるんだな」

俺の固定概念かもしれない。しかし、ここが落ちこぼれ救済の学校だったらいざ知らずそれなりの公立高校だ。俺だったらいたたまれないし、いろいろと辛そうだと思うが。

「まあ桜沢の場合は別に勉強が出来なくてとかダブったわけじゃないからな。」

「ん？　なんか別の理由が？」

「でなけりゃ、そこまで話題にはならんよ。僕も詳しくは知らないけどね。その辺も含めて調べてみるよ」

「ああ……。頼むよ」

翌日、牧野とはいえ数日はかかるだろうと予想していたのだが次の日の昼休みに同じ場所に呼び出された。どうやら調査し終えたらしい。

「もう調査し終えたのか？　随分早いな」

「まあな。今の時代、色々と便利なモノがあるからな。いい情報源^{ソース}さえ確保しておけばある程度のレベルの情報だったらそれほど勞せず手に入れられるよ」

牧野は得意気に胸を張る。

そんなものだろうか。そのいい情報源^{ソース}が何かは少し気になるところだが今はとりあえずどうでもいいか。大事なのは情報が入手出来たという結果だ。

「でっどんな情報をお望みで？」

「ん？　いちいち聞くのか？　出来れば書面に起こしてくれた方がいいんだけど」

「それはちよつと面倒臭いからパスの方向で。口頭でいいだろ、別に」

まあただで調べてもらったんわけだからそこまでは贅沢か。しかし、それはそれで面倒くさいような気もするが、何を質問すべきなのだろうかと少し考える。まあ聞きたいことは結構あるがなんか微妙な気恥ずかしさみたいな感覚が俺の発言を鈍らせた。

少しの間、両者に沈黙が続く。

「どうした？　気になることがあったから僕に調べさせたんだろ？　何を悩んでいる」

「いや、そうなんだが……そうだ、牧野、俺は桜沢自身の本質的な所を知りたい。そのためにお近づきになりたいわけだけど具体的にどうすればいい？」

「こういう質問だよ。しかしまた随分と遠回しな言い方だな、全く」
牧野は軽く嘲笑すると同時に軽くため息をつく。

「僕の率直な意見を言わせていただくと君は見た目はイマイチだ。学校での評判もパツとしない。仮にそのままストレートに告白しても失敗する可能性が圧倒的に高いだろう」

「喧嘩売ってるのか？　というか何の話だ。お前また誤解したまま話を」

「まあ、聞けよ」

笑みを浮かべながら、俺に左手で制し、話を続ける。

「僕は君とは結構、長いつき合いになる。君の持ち味もそれなりに理解しているつもりだ。それに気付いてもらうには中長期的なスパンで君の顔を見てもらわないといけない。君は噛めば噛むほど味の出るそんな男だからね」

なんか褒められてるんだかてるのかけなされているのか微妙な気分ではあるが多分、後者だろうな。

「しかし、残念な事に君と桜沢さんはクラスが違う。君の素晴らしさをアピールするのは今の接点の少ない状況ではそれすら至難の業だ。そこで僕からの提案というわけだ」

「ん？　なんだ？」

なんか、俺が桜沢　潤をゲットする作戦会議みたいになっている。言っても聞かないだろうからとりあえず話を進める。

「桜沢さんと同じ部活に入るんだよ」

ただ、そこに辿り着くことの難しさ 其の二

「なるほど、同じ部活に所属し、接点を作るということか」

確かに手段としては俺もアリだと思う。しかし、それと同時に様々な疑問が思い浮かぶ。

「その部はこんな中途半端な時期に入部しても問題ないのか？」

「問題ないと思うよ。人数もかなり少ないし、むしろ歓迎されるんじゃない」

もう日差しに夏の熱気を帯び始めているこの時期に問題なく入部出来、留年した人物でも所属出来る……。おそらく文化系だろうが一体、何部なのだろう。

「で、何部だ」

「民俗学研究部。ちなみ所属人数三人」

予想していたよりもはるかにマニアックな部活名に若干、困惑する。

「どういう部活だ？ それ」

「色々、聞いてみたんだが具体的な活動内容まではちょっとわからなくてな。ただあまりいい噂は聞かない部ではあるらしいな。」

ややこしい話だな。確かに初めて桜沢を見た時なんか普通とは違った雰囲気を持っていた。その妙な感じが気になったので調べてもらっているわけだがここまでの情報だと『異端』……そういう単語が頭をよぎる。

「クラスの評判もやっぱあんまりよくないのか？」

「そっちの方は可もなく不可もなくってどこか。成績はそこそこ、人間関係もつかず離れずとある意味、うまく立ち回っていると言える。ただ、去年の同級生からの情報によれば奇行や妄言の類の激しいヤバイ奴との噂も」

なんか嫌な感じだな。今から進もうとしている道が地雷原じゃないだろうか……。それが今の率直な感想だ。まあここでグチグチ考え

てもしょうがない。どっちにしろ何の結果も出ていないのにここで退くわけにはいかない。とりあえずは行ってみるか。引き際は大事だが、それは今ではない。

「了解。じゃあとりあえず今日の放課後にさっそく行ってみる。

部室の場所は？」

「確か、北校舎の一番、はじめの教室だったかな」

「北校舎？ お前がいい噂がないって言った理由が今、分かったよ。そんな所に部室のある部にいいイメージがつくわけがない」

北校舎とは我が校で最も古い建物であり、倉庫や物置などが教室の大半を占める。普通の生徒は用がない限りは滅多に行く事のない場所だ。

校内の治安上、問題ありとされていて定期的に教師が巡回しているらしいが実際にそんなことが行われているかどうかは怪しいものだ。情報に疎い俺の耳にさえその評判の悪さは届いているのだ真偽はさておき余程なのだろうとは思う。まあ当時は個人的にはどうでもいいことだったがまさか関わる羽目になるうとは、わからないものだ。

「なんか聞けば聞く程テンション下がるな。牧野、情報サンキュな。今度なんか奢るよ」

俺はそう言いながら立ち上がると、自分の教室に戻るべく、階段を下り始めた。

背後から手を叩く音が響き、牧野が俺に声をかける。

「あつ悪い。今、思い出したんだけどその件の人物が所属している部な」

「ん？」

「『消えない』部なんだよ」

「どういう意味だ」

「普通さ、部員が少なかったり、いなくなったりするとその部活は廃部になるだろう？ あの部はここ数年、部員がゼロだったのにも関わらず廃部にならず、部そのものだけが数年、存在していた。そ

して去年、桜沢と森 要という人物の二人が入部し、数年ぶりの人の所属する部になったというわけさ。おもしろいだろう？」

「気味悪いよ」

一瞬、目眩がしたような気がした。

終礼が終わり、なんの代わり映えのチャイムの音が校内に響き渡る。聞きたびにどこことなく気怠い気分になるのは俺だけだろうか？ そんな事を考えながら俺は北校舎に向かっている。しかし、いきなり行くのはいいがどうすれば自然な形で入部出来るか、それが問題だ。面識もない人間が突然、入るような部活ではないことは部活の名称からして明らかだ。

今日はとりあえず見学という形をとり、どのような部活をしているか見学する事になっている。まあいきなり入部でもいいが少しでも怪しさを緩和するために段階を挟むことにしたわけだ。部活そのものには特に興味がなかったため、ぶっちゃけ、どうでもいいのだが……どうせ帰宅部で毎日、プラプラしているのだ、これを機会にこの部活動をやってみることは別に悪くはないとは思っている。

二階にある、北校舎への渡り廊下を通り、校舎内へ。

やはりというか人が全くいない。本当にさっきまでいた本校舎と同じ学校なのかと疑問に思ってしまうほど雰囲気は全然違うように感じた。放課後の喧噪が遙か遠くで聞こえるがなぜかそれが遠い違う世界の音に聞こえる。それぐらい静かなのだ。

そういえば俺もこの校舎には一、二回くらいしか来た記憶がない。牧野曰く物置になってしまった教室が確かに多いのだが『特殊』な事に使う教室中にはあるらしい。

その民俗学研究部の部室となっている教室は二階の一番、端にあるらしいのでそこまで歩く。

その教室へと近付いていくにつれて、廊下に石の塊のようなモノが置いてあるのに気付く。距離的には件の教室の一つ手前の教室辺りだろうか。なんだ？

俺は少し、足を早め、その石塊に近付く。

それは地蔵だった。それもかなり古いもののように元々はもつとメリハリがあったであろう形状は長い時間、風雨にさらされたように曖昧な感じになっている。シルエツトで辛うじて地蔵だろうなという認識出来るが近代的な建物の廊下に鎮座するその物体は恐ろしく違和感があった……っというかなでこんなモノがここに？とは思ったもののとりあえずスルー。考えたってそこにあるんだからしょうがない。今は用事の方が優先だ。

そう考えながらその地蔵を視界の端に捉えつつ、通過。部室まではあと数メートルといったところだろうか。

が次の瞬間、視界が暗転。目の前には先程、通った北校舎の入り口に立っていた。

（さっき確かに通ったよな？　どうなってる）

少し混乱状態なりそうだった頭を落ち着けて、考えてみるが何も思い浮かばない。仕方がないのでもう一度、行ってみる事にした。もしかしたら立ったまま白昼夢を見ていた可能性も『絶対』ないとは言いい切れないわけだし、まあないとは思うけど。

小走りですっき通ったであろう廊下を進む。やはり先程と同じように廊下には地蔵が置いてある。不安と好奇心が入り混じった感情の中、さらに加速地蔵の前を通り過ぎるもまたも視界は暗転。俺はまた北校舎の入り口に立っていた。

ただ、そこに辿り着くことの難しさ 其の三

面倒臭い事になった。入部するどうこう以前に目的地に辿り着けなくなってしまった。幸いにも行けないのは民俗学研究部の部室のみで本校舎の方へは戻れるようだ。

気持ち悪いとは思ったがそれでも尚、もう少し挑戦してみたいと思った自分が我ながら不思議だった。

さて、冷静に考えてみる。原因はおそらくあの地蔵だろう。単純な話、あれをどうにかすればいいわけだ。しかし、正体や特性のよくわからないモノに手を出すのは少々リスクだ。地蔵そのものに出すのは最終手段……いや、そうなった場合は諦めるべきだろう。この空間の支配するルール内で部室に辿り着く方法を探すしかないわけだ。

少し、確かめておきたい事もあり、もう一度、あえてループしてみる。

判明した事。校舎の入り口に戻される方法だが視界が暗転した瞬間の時間と校舎の入り口に戻されるまでに約5分の時間の経過があった。つまり地蔵を横切った瞬間、俺は意識を失い、まるで夢遊病者のように来た道に戻り、校舎の入り口に到着すると意識が戻る、というシステムみたいだ。

これはなんとなくだがなんとかかなりそうな気がする。空間転移の類でなかったのは助かる。

少し、次の行動を考えつつ本日4度目の廊下を歩き、地蔵の前に到着。俺は自分の鞆から筆箱を取り出し、そこからさらに消しゴムを一個取り出し、部室側の方向に投げる。

消しゴムは部室の前辺りに落下するとそのまま少し転がり、横滑りしながら静止する。特に何も起こらない。

なるほどやはり自ら移動する手段を持っていない物体に対しては無効なのか。当たり前だけど。消しゴムが校舎の入り口の方へ飛ん

でいくなんていうファンタジー映像も想定していたがさすがにそれはないか。

という事はもしかしたらそれなりのスピードで飛んでくる物体には対応出来ないのでは？ そんな仮説が頭をよぎる。意識の消失点は先程のループの際ジリジリと前進しながらマジックで線を書いたので大体、分かる。

プランとしては超シンプル『全力で部室側に向かって飛^と翔^とべ』だ。なんか自分で考えという思うが頭悪そうな案である。けど現時点ではそれしか思

い浮かばないんだからしょうがない。

俺は鞆を床に置き、充分に助走の距離をとる。

いざ実行するとなるとなんか不安である。ありえるオチとしては跳躍しても関係なく意識をなくし部室の前に到達するもそのまま、また校舎の入り口に戻されるといふパターンが予想できるがまあそこはやってみないと分からない所だ。もしかしたら効果が部室の前までない可能性もあるしな。……な

んとかなるだろう、多分。

少し、間をおき。深呼吸をし、若干の恐怖はあるもののやることを決意。俺は左足で廊下の床を蹴りだし、目標のラインに向けて全力疾走した。目標のラインはもの凄いスピードで近付いてくる。頭に色んな考えが錯綜しつつも俺はラインの少し手前で右足で床を踏み抜かんばかり踏み込み、跳躍。

ヤバい。少し飛びすぎたか？

跳躍した自身の高度を感じ、そう思った刹那、視界はまたも暗転。やはり、ダメか……？

そう思った瞬間、今までと違う事が起きた。

地震？ 体感的に感じた妙な衝撃とともに頭に激痛。視界は暗闇のまま、今までのように視界が開ける事がなく意識はそのまま遠い彼方へ消え去っていったのである。

どれくらいの時間が過ぎたのだろうか。ここは……また校舎の入り

口か？それとも……。頭全体に響く鈍い痛みと朦朧とする意識の中、腰の辺りに軽い衝撃の連続を感じる。

「おい！ 起きろ。こんな場所で寝ないでくれるか」

徐々にはつきりしてくる意識の中、なんとなくだが状況はつかめてきた。どうやら俺は跳躍の途中でまた催眠状態になったらしいのだが幸か不幸か飛び過ぎたせいと急な催眠状態によりまともに着地できず、そのまま勢い余って突き当たりの壁に激突したらしい。衝撃で催眠が解けたのか、気絶した人間は操れないのかとにかく俺はそのまま気絶、現在に至るというわけか。ちなみに腰の辺りに連続して与えられている衝撃は目の前にいる件の人物、桜沢 潤が俺を起こすために蹴っていたようだ。とはいえその扱いはどうなんだろう。一応、怪我人ですぜ？

俺はなんとか上半身だけ起こしつつ、まだ痛みの続くぶつけたであろう前頭部に手をなんとか当てる。彼女は相変わらずまるで俺を見下すように直立不動で立っていた。

「ん？ あんた、確か……」

首を傾け、少し、怪訝そうな顔をしながら彼女はそう呟いた。

「先週、校門前で助けて貰った……」

「あーあのバ……あの時の」

彼女は『ぼん』と手を叩き、明らかに今、思い出しましたという仕草をする。

今、あの『バカ』って言いそうじゃなかったか？ まああの件に關しては自分としても否定しきれないところではあるのだが。

「今日来る、見学者ってあんたの事だったのか。こんな時期にどんな物好きだと思っただけ……なるほどねえ」

桜沢は眼をを少し、細め、少し嫌な感じの笑みを浮かべる。少なくとも俺にはそう見えた。

「なんだよ、なんか文句でも？」

「いや、別に。ただ何が目的なのかなあって思っただけ」

それは聞かれると困るところだ。単純言えば桜沢に対する好奇心

だがそれをここで言うわけにもいかないだろう。

「少し、興味がありまして……じゃダメか？」

桜沢は少し冷たい視線を俺へ向けるとすぐに軽くため息をつき、表情を崩す。

「まあいいわ。目的が何であれ部員の少ない弱小クラブだし、歓迎するよ。えっ」と

「樋口 クロエだ。」

「よろしくな、樋口。じゃあとりあえず部室に」

桜沢はそう言いながら部室の取っ手に手を掛ける。

「ちょっと待ってくれ。その前にひとつ。『アレ』はなんだ？」

そう言いながら俺はこういう状況を作った要因であるあの地蔵を指さした。

「ん？あんた『アレ』が見えるのか？」

なぜか意外そうな表情をこちらに向ける。

「見えるもなにもそこあるじゃないか。お前こそ何を言ってるんだ」

ただ、そこに辿り着くことの難しさ 其の四

「なるほど、あんた、私と同じ『みえる』奴だったのか。いや、先の件で後天的に覚醒したのか？」

桜沢は口元に指を当て、視線をはずしつつなにやら呟いている。

「おい、どういう意味だ。説明してくれ」

「まあ簡単に言えば結界みたいなもんだよ。かなり簡易なモンだけどね」

「冗談……ではなさそうだな」

「そうやって簡単に信じてくれるところをみるとやっぱりループさせられたみたいね。『あれ』は『迷い仏』っていう呪法でまあ素人が使用してもそれなりに効果があるやつ。設定がおおまかになってしまいうのが欠点だけどね」

結界やら呪法やら普通なら絶対信じないような単語を並べられてはいるが現にそういう体験をしてしまったのだから信じるしかない。ちよつと現

実感はないけど。夢ではないか、そんな現実逃避的な思考すら浮かんでくる。

「なんで俺はその結界のフィルタに引っかかったんだ？」

こいつのいうように俺がもしそういう『モノ』がみえる人だとしてこいつも同じように弾かれるのではないだろうか。

「さっきも言ったけど設定がおおまかだからね。『そういう』素養のある人及び『そういう』モノは全部NGで設定しているのよ。やってる活動が活動だけにね。一応の用心ってとこ。憑かれた奴にいきなり来られても困るし」

という事はこのクラブは心霊現象によく関わるということなのだろうか。

「じゃあお前は？」

「玄関の鍵と一緒に。開け方があるってこと。まあそれは後で教え

るわ」

桜沢は頭を掻きながらあきらかに面倒臭そうに答える。

「今日はとりあえず見学でしょ？ 部室で活動内容について詳しく説明するら……」

そう言いながら桜沢は右手で部室の扉を開けつつ、俺の方を向く。左手差し伸べ、微笑みながら一言。

「あらためて、『民俗学研究部』へようこそ」

異境の地もしくは隔絶された空間（幕間） 前編

入った瞬間、俺は自分の目を疑った。いや、決して大袈裟な話ではない。この歳になれば余程の事がない限り驚愕したりはしないのだが、これは驚かざるえない。

部室に入った瞬間に俺に入ってきた情報の全てが考えうる想定事項の斜め上をいっていた。

廊下から見た部室の情景からして、てっきり教室に毛が生えた程度のもを予想していたが目の前に広がるのは六畳の間。しかも奥にあるのはどうも台所っぽい。部室というよりもアパートの一室だ。両脇の壁は置いてある本棚によりほとんど見えず、そこにはなぜか番号のみが書いてある本が隙間なく並んでいる。

そして鼻孔を刺激するこの匂いだ。まるで中華料理屋のような匂いが室内に充満している。奥から明らか、料理をしている音がしているところからそれが原因だろう。

そんな環境の中で部屋のほぼ中央にあるちゃぶ台の上にノートパソコン置きなにか作業をしている女子がひとり。なんなんだ一体……。

立ち尽くす俺。どこから突っ込んで、どう質問すればいいのか、混乱しそうな現場である。

「なに、ぼーっとしているんだ？ とつとと上がれよ。まあ聞きたい事は山程あるだろうがとりあえず自己紹介と部活の説明をした後であんたの質問をまとめて聞いわ。それでいいでしょ？」

後ろにいた桜沢が軽く俺の背中を押しながら言う。

「ああ、分かった」

俺はどこか気のない返事をする。まあとりあえず時間を置いてこの場の雰囲気慣れるのを待つしかあるまい。今、思った事を質問したところでの確な質問は出来ないような気がした。

パソコンに向かっていた女子がこちらに気づき視線をこちらに寄

越す

「潤、随分遅かったわね……そちらは？」

「ああ、後で説明する。樋口、とりあえず上がって適当に座って。水上い！ お茶とあと適当に切り上げて一旦こっちに来てくれない」

「うーっす」

奥の台所から気のない返事が聞こえる。声からして男子のようである。

とりあえず上履きを脱ぎ、上がってノーパソ女の前に座る。桜沢は台所の方へ行き、すぐ人数分の麦茶を持ってきてテーブルの真ん中に置く。もう一人の先程から台所のいた水上という男がほぼ間を置かずに登場両手にはなぜか山盛りのチャーハンののった大皿を持っている。

この匂いはあれが原因か、つーか何作ってるんだよ。ここが何部か忘れてしまいうことになる程、カオスな状況が続いている。

「よーし。全員、揃ったようだし、そろそろ始めますか」

そう惹かれるような笑みを浮かべながら仕切始める桜沢であったが俺の心中は不安でしやうがなかった。

台所から出てきた男はそれぞれの前にガラスのコップを置き、お茶をついでいく。目の前には先程の大盛りチャーハン。一体、誰がこんなに食うんだよ。

先程の桜沢のセリフから今から会議のようなものが始まるようだ。

「本当はすぐにミーティングに入りたいところだったんだけど急遽、新入部員が入ったから今回はこの新入部員に色々、説明するけどいいかな？」

新入部員？ 俺は確か見学としか言っていないはずだが何をいきなり……

そう思い、すぐさま口を挟もうとするとそれより先に対面に座っていたノーパソ女が発言する。

「彼は見学者だと聞いていたけど？ 潤も確か、昨日使えるかどうか

確かめるって言ってたじゃない？」

「うん。そう思ってたんだけど、使えそうだから今、入部させようと私が決めた」

「潤、またあなたそんな勝手に」

ノーパソ女は少々、困った顔をしながら呟いているがそれはこっちのセリフである。まあ元々、入部する気だったわけだから別にかまわないのだが。

「いや、別にいいよ。最初からそのつもりだったしな」

「だってさ要。あっけど樋口、私はともかく要は一応、先輩だ。敬語な」

要とは多分、目の前にいるノーパソ女の事だろう。ダブっている桜沢と親しそうな感じからおそらく二年か。

「本当にいいの？　ここ、少なくともあなたが思っているような所じゃないわよ」

哀れみを含めた視線をこちらに投げかけつつ要という女子はそう言った。しかし、それも予想の範疇である。なにやらいわくつきの人物である桜沢が所属し、いい噂の聞かない旧校舎に本拠を置く部。言っちゃあ悪いがまともな活動をしている方が考えがたい。現にここに来るまでにすでに怪現象に巻き込まれているのだからどっちかというと今さらである。

「それを今から説明するの。聞いての通りだ。ここは表向きは民俗学研究部って事になってるけど実際は全然違う活動をしている。入部するにあたりその辺の事は理解しておいてほしいわけなんだけど」桜沢は残念ながらっぽく言っているが俺は民俗学などに全く興味がなかったのでむしろ嬉しいくらいだ。

「君のその反応から考えてその心配は無用だったかな。主な活動はトラブルの解決になる」

これはちよつと意外だ。そんな人助けみたいな事をすすんでする人物ではなさそうに思ったのだが……いや、外にあった結界と外での桜沢の『あの』発言から考えると

「霊関連のか？」

「うん？ 一応、そっちを主でやる予定にしているけど依頼がない場合はそれ以外もやるよ」

ちよつと前ならば一笑に付して相手にしないような話である。人生は分かんものだと改めて思い、そしてそんな自分が内心ちよつとおかしかった。

「で次に簡単に部員を紹介するね。私が一応、ここの部長の桜沢潤、であなたの向かいいるのが森 要。主に情報処理とかを担当している」

森 要は俺の方を見、軽く会釈する。第一印象としては地味。眼鏡をかけ、眼の近くまでかかった前髪がそれをさらに強調している。

「右にいるちよつと人相の悪いの悪い奴が水上 冬馬。戦闘及び料理担当で君と同じ一年だ。仲良くやってね」

「よろしく。俺も助かったよ。男子は俺一人で話相手が欲しかったんだ」

水上は笑顔で炒飯を小皿に盛りながら話しかける。

確か、こいつは名前も聞いたことあるし、一年の教室の廊下で何回かすれ違ったこともある。入学当初は結構、話題になったせいか、そういう情報に疎い俺でもある程度知っていた。

確か中学時代、それなりに有名ないわゆる不良というカテゴリーに入る人物だったと聞いている。しかも相当無茶苦茶もやっていたらしい。それが合格ラインが大体クラスの中の上くらいの学力が必要なうちの高校に入ってきたのだからビックリだという話だった。様々な憶測が飛び交い、理事長を脅

迫したんじゃないかなどという荒唐無稽な話まででるくらい一時は校内で時の人のような扱いになっていたが本人の学内での態度や生活はいたってまともであり、動かない玩具をいつまでもイジる程の話題に飢えているわけでもなく。同姓同名の人違い説の浮上を最後に自然消滅した。

まあ少し茶髪だし、雰囲気的にはなんとなくそれっぽそうだがまあどうでもいいことではある。つかこの部活『戦闘』担当ってなんだよ。もしかして戦闘の必要な事件に首を突っ込むつもりか。

「ああ、よろしく。俺も同年代がいてくれてよかったよ」

とりあえず、今の時点ではどういう人物か分からないので無難に返す。

「うん。ではあらためて彼が新入部員の樋口 クロエ君ね」

「樋口 クロエです。こんな時期の入部ですが一生懸命がんばりますのでよろしくお願いします」

俺は立ち上がり、スタンダードな感じの自己紹介をする。とりあえず普通に振る舞う。それが無難に学校生活を送る、処世術だと俺は思っている。色は後で着ければいいのだ。

「さて、自己紹介も終わったし、本来の会議をしようと思うんだけどなんか質問ある？」

色々あるが今のところ、いまいち頭の中でまとまらない感じである。追々、説明してもらえばいいか。

「いや、今のところ特には」

「ん。じゃあ始めるね。でもその前に」

「その前に？」

「炒飯を食べましょう。せっかくの炒飯が冷めてしまう」

俺は軽くずっこけそうになるも、少しおもしろくも思えた。そしてその炒飯は驚くほどうまかった。

こうして俺の日常における非日常は始まった。

豹と芳香 其の一

空の美しく、正確には何色と言うべきかは分からない夕焼けの色を徐々に夜の漆黒が浸食している。時期的にも日が最も長く昇っている季節とはいえ、さすがに暗くなってきた。

ちなみに俺が今、何をしているかといえば別に夕焼けの空を眺め、感傷に浸っているわけではなくワゴン車の中からある人物の家を監視しているところだ。なぜと聞かれれば当然、理由があるわけが……それは数時間前。

「下着泥棒を捕まえます」

いきなりだな、おい。

俺は数瞬、桜沢がいきなり言った言葉に対して早くも理解不能に陥ったがそんな事はお構いなしに会議は続く。

「先週、要に貰った現在保留中の依頼リストの中から独断で選別した結果今回は最近、紫苑町の周辺で起きている『連続下着泥棒』を捕まえるって事で決定したから何か意見は？　ないなら続けるわね」

有無を言わずかい。下着泥棒ねえ。てっきりもう少しヤバめな事も予想していたのだが意外に常識の範囲内の依頼でちよつと安心する。一般的に考えれば部活で下着泥棒を捕まえようとする時点で非常識ではあるが活動コンセプトが揉め事の処理なので仕方がないといえ仕方がない。

「要、例の資料をみんなに」

森先輩は無言で鞆から書類入れを出し、数枚の書類を俺達の前に置く。どうやら事件に関する資料らしい。

「それは今回の下着泥棒事件の資料なんだけど今から十分程でざっと目を通しておいでくれない？　この後、すぐに犯人を捕まえる作戦を発表及び実行するから」

「今日、やるのか？」

とりあえずおとなしくしていようと思っていた俺だったが思わず

声が出る。いきなり過ぎるだろう。

「ああ、そのつもりだけど？樋口は初めてだからもう少し慎重にいきaitって気持ちは分かるけどね。まあ作戦って言っても内容は単純なもんだから。とりあえず資料に目を通してくれない」

この人の辞書には不安とか躊躇の二文字は載っていないのだろうか。それとも既に俺が知らないだけでそれなりの場数を踏んでいるのだろうか。仕方がないので資料を読む事にする。

内容は事件の詳細と発生箇所を記した地図であった。詳細とは言っても内容は所謂、典型的な下着泥棒だが一点だけ少し不思議に思う箇所があった。

「この犯人、盗品を持って帰らず、現場近くで捨ててしていると書かれてるけどこれは？」

「ん？ ああ、それは書いてある通りよ。奇妙な事に犯人は下着を盗むくせに下着にはそのものに興味はないという矛盾した話になるわけ」

「つまり盗む『行為』そのものになんらかの意味があるってことっすか」

急に「っす」口調で喋った水上に少し驚く。桜沢に対してはそういう風に話すのか。同学年とはいえひとつ年上だからだろうか。

「普通に考えたらそうなるわね。まあ、理由については大体、見当はついてるけどね。今回の作戦はその辺の予測も含めて組んでるんだけど、予想がもし当たっていた場合は一刻の猶予も許さない事態という事になっちゃうから少々不安があるけど本日、決行ってわけ。ここまでで何か質問は？」

少しの間、その場に妙な沈黙が続く。あまりに事態にみんなが混乱しているのか？それともこれくらいはこの部では日常茶飯事で特に意見はないという事なのだろうか。

「ないなら会議は終わってすぐに現場に行くけど？」

桜沢がそう発言すると俺以外の二人はやれやれといった感じで立ち上がり外へ行く支度を始める。マジですか。

俺もとりあえずは外へ行く支度といっても鞆を手につくくらいだが、しながらとりあえず水上に話しかける。いきなり過ぎて誰かと話さないと頭がおかしくなりそうだ。

「水上君」

そう声をかけると眠いと面倒臭いをブレンドしたような表情をしながら「ん？」とという感じでこちらを向く。

「随分、急だよな。いつもこんなのか？」

「ん？ ああっあの人？ いつもってわけじゃないけど割と行動的な人だから。それでも今回は比較的、いきなりではある。それだけ事態が火急なのかもな」

なるほど、いつもあんな感じではないのか。意外と考えて行動しているのか？

「ああっそれと呼び名、水上でいいから。俺も樋口って呼ぶし」

「オッケー、水上」

俺はそう言いながら少し笑うと水上も少し表情を緩めながら廊下へ向かう。

「じゃあ、下に車、待たせてあるからすぐ行くわよ」

そう言うのと桜沢は東先輩となにやら話しながら部室を出ていく。

俺も水上と一緒に、後を追うように部室から出る。

まだ四時半くらいだろうかどこからともなく部活をしている生徒の声が聞こえてくる。

「車を待たせてあるって言っていたけど、顧問の先生か？」

「いや、俺もよくは知らんがうちの部のOBでスポンサー兼協力者らしい」

OBが部活を応援、支援する話はまあ珍しい話ではないがこんなマニアックなしかも本来とは全く違った活動をしている部に？ どういうことだろうか。元々こういう活動の部活だった？ そんなことありえるだろうか。

校門前に行くと桜沢の言っていたように白いワゴン車が止まっていた。俺達が乗り込むとワゴン車はすぐ発進した。

俺と水上が後ろ、桜沢たちが真ん中の座席に座っている。運転しているのはどうやら女性らしい。ここからではよく見えないがどうやら若いっぽい。

「すいません神馬さん、またこんな形で手伝ってもらっちゃって」
普段では考えられないような喋りだな。初めて桜沢が人に対して丁寧に接する所を目撃し、激しい違和感を感じる。

神馬というその女性はバックミラー越しにこちらを一瞥する。一瞬俺と目が合う。

「ああっ別にいいよ、私も別に忙しいというわけではないからね。それより後ろの彼、例の新人君？」

「ええっ、本格的に案件に関わるのは今回が初めてですけど」

「よりによってこの部活に入るとはねえ。物好きな話だ」

いや、別に好きで入ったわけじゃないけど。

「おい、新人君」

「はい？」

「OBとして忠告したいことは山程あるが一番、重要なのは『ターニングポイントを見極めろ』だ。覚えておけ」

「はあ……」

OBとはいえ随分と上から物を言う人だな。ていうかそんなもん意識して分かるかよ。そういうのって大体は後で気付く事だろう。

「まあこの部活入った時点、お前は既に人生のターニングポイントをミスったわけだがな。お前の学園生活における死亡率はいまやストップ高だ」

悪そうな笑みを浮かべながらいきなり自分が所属していた部に無茶苦茶な事を言ったなこの人。つかこの部活って死ぬ危険があるの？ やべー現実感なさ過ぎ。この人の言うように間違えたかもしれない意味で。

「神馬さん、ひどいですよー、仮にも自分が所属していた部活ですよー」

「だからだよ。いわゆる経験者は語るってやつだ」

桜沢と神馬さんはシャレになっていない話をバカ笑いしながら続けている。どういう神経しているんだこの人たちは

「気にするな。神馬さんはああいう人なんだ。別に悪気があって言うてるわけじゃない」

水上はなんとなくフォローを入れるが人格どうこうよりも会話の内容にひいてるんだけど。何この部活、ミスると死ぬの？ 一体、俺はどこで間違えたんだろう。

豹と芳香 其の二

二十分程走ったところで車は停車。どうやら現場に着いたらしい。当然ながら気が重い。水上と東先輩は分からないが桜沢は少しワクワクしているように感じる。本当にこの女はこういう厄介事が好きなのかもしれない。面倒くさい女だなあ。

着いた場所はなんの変哲もない住宅街のようだがここで一体、何をしようというのか。

桜沢と東先輩は体ごとこちらへ向け、横の窓を指さす。指し示す方向には五十メートルくらい先にごく普通の平屋の家があった。

「あそこが今回の件の囹となる家。で私達は今からあの家を監視し、犯人が現れたら捕まえる。以上。OK？」

「なぜ、パトロールみたいに移動せず、次の犯行現場をここと決めるうちしたんっすか？」

まずは水上が誰もが浮かぶ疑問を質にする。俺もそう思う。なんであの家なのだろうか。

「理由はふたつ。犯人は移動しながら犯行を繰り返している。その移動の仕方から次の犯行はこの周辺だろうと予測したわけだ」

「でもそうだとっても……」

「まあ話は最後まで聞け。尚かつ当然ながら警察も下着ドロ程度では大した捜査もしないだろうが周辺住民への警告くらいはするだろう。そうなれば当然こんな時間帯に下着を干すバカはいない。にも関わらずなぜかそんな獲物の全く見つからない状況下で盗りやすそうな場所に美味しそうな獲物がぶら下がっていたらそれはもう行くしかないだろう」

理由は理解したが逆にそれだと怪しまれないだろうか。しかもよく見たらどうやら庭の竿竹に干しているようだ。かなり露骨だ。別にどうでもいいけどな。来る、来ないで言えば来てくれないにこしたことはない。

「そういうわけで今から水上と切石は交代であの家を監視。私達は適当にしとくから、なんか見つけたら言ってね。以上」

「お前らはなにもしないのか？」

「何言ってるの。私は言ってみればこの組織の指揮官、ここまでの指示で既に仕事は終了しているのよ。要も情報とここまでの作戦を担当したからいいのよ。実働系はあんたの仕事なの。分かる？」

いや、分かるけどはつきり言っが一番、キツいとこ俺らにまわしてない？それ多分、その後の犯人を捕まえるのも俺ら（主に水上）がやるんだろう。それに作戦と情報を東先輩が担当ならお前、なにもしてなくね？言う揉めそうだから言わないけど。

「まだ何か言いたそうね。とにかく四の五の言わずにやる」

どうやらそう思っいても多少は顔に出たらしい。まあいいか。
「いやまあ。とりあえずはやるけど……」

仕方なく水上と三十分交代であの家の監視をやり始めた。こうしてやり始めてから一時間、現在に至るというわけである。

時間は暗さ的にもどちらかと言えばもう夜といえるだろう。退屈で気の進まない監視任務はいまだ続行中である。交代したばかりの水上は腕を組んで座ったまま寝ている。桜沢は東先輩とパソコンでなにやら動画を見ているようだったまにアホみたい爆笑している。神馬とかいう人はここに来てからずっとなにやら本を読んでいる。

しかし、監視という行為がこうも辛いものだとは。何も変わらない景色をただ眺めているだけ。寝てしまいそうだ。夜の闇もいよいよ濃くなり、段々、監視対象の家がよく見えなくなってきた。

「なあ、桜沢。もう大分、暗くなってきたかなり視界状態が悪くなってきたぞ。まだやるのか」

桜沢は視線をパソコンの画面から俺へと向ける。なんだそんな事かといった感じで無言で足元の鞆を漁り始める。

「はい」

なんかヘルメットに眼鏡のついたちよっと近未来的な物体を手渡される。桜沢は再び画面に視線を落とす。なんとなく分かるが一応、

聞く。

「なにこれ」

「暗視スコープ。それ使って続行ね。見辛いって事は相手にとっても同じだからむしろ好都合だしね」

なぜそんなものがある。どういう部なんだよ、と思いつつも暗視スコープ自体には興味がある。こんな状況でなければ純粹におもしろがっただろうなと思いながら暗視スコープを装着。まるで世界のすべてに葉緑体が宿ったような世界が視界に広がり、少し驚く。なるほど。こういうものなのか。ただ、これがあるということ監視する時間に厳密な線引きはなくなるわけだが一体、いつまでやる気なのだろうか。もの凄いい不安だ。

そんな思考が頭をよぎりつつも継続していた俺の視界に幸か不幸か一人の人物が現れる。どうやらフードのついたパーカーを着ているその人物は対象の家の前を行ったり来たりし始めた。

あきらかに怪しい。そう思った次の瞬間、その人物は信じられない高さに跳躍したと思うと垣根を越え、向こう側、つまり洗濯物（餌）の干してある庭へ降りていった。

確定的だ。仮に下着泥棒じゃないとしても不法侵入者である可能性はかなりあると思う。

「おい、桜沢、来たぞ」

「えっ本当？かなり怪しい感じ？」

なんか興奮している風に感じるが、イメージ的には台風の日にテニションの上がるガキを彷彿とさせる。

「ああっ家の前をウロウロして壁を飛び越えての侵入。充分過ぎるほど怪しい」

「よし、では次の作戦に移行ね」

まあおそらくだが戦闘担当とか紹介していた水上が捕まえに行くとかそういう話だろう。まあ最悪保険として俺まで行かされる可能性はあるだろうが。その場合、俺はこいつがどれくらい強いかわからないから若干、不安ではある。まあ中学時代の悪名は情報に疎い俺

の耳にも轟くくらいだったのだからそこから考えれば腕つぶしはそれなりにあるだろうが一般人を取り押さえるのに通用するかというと別問題のようにも思える。というかもう1110番でよくね？

豹と芳香 其の三

「今、思った、警察に通報って選択はないのか」

桜沢は少し、目を丸くし、『えっ何言ってるの?』という表情をする。なんでだよ。さも当然の如く大捕物しようとしてるんだ?

「安心しろ新人君。警察への連絡は私がやっておこう。だから君は安心して行ってきたまえ」

運転席から上半身のみを反転させ、神馬さんは笑みを浮かべ言う。いまいち怪しい。

「ほら、そういう事だからさっさと捕まえに行きなさいよ」

「あっやっぱり俺も行くの? その下着ドロ捕まえに」

「『俺も』? 何言ってるの。捕まえに行くのはあんた一人よ」

へー俺ひとりか。そりゃ随分と……

「つてえええっー!?!? なんで」

「あんたの能力を見るためよ。分かったらさっさと行く。はい、これ持って」

反論する前にゴルフクラブを渡される。これで犯人と戦えと?

「ちよっと、待ってって」

「まだ、何か文句があるの? サンドウェッジじゃ頼りない? スプーンだとちよっと重だろうし……神馬さん五番アイアンで」

「違うつつの。どこの世界に下着ドロとゴルフクラブ片手に格闘する高校生がいる。どんだけカオスな状況だ」

「うるさいなあ。そういう作戦なんだからしょうがないでしょ。それにうまく説得すれば反省して自首してくれるかもしれないじゃない」

「するか! ゴルフクラブ持った奴と話し合いなんて成立するわけないだろう。殴る気まんまんじゃないか」

「とにかく、もしもやばそうだったらすぐ水上を寄越すからとりあえず騙されて行け」

そこも他人任せかよ。しかも騙されて行けてなんだよ。

結局、言い負け、しぶしぶとサンドウェッジ（という名前のクラブらしい）片手に問題の家へ近づく。

客観的に見たらどう考えても危ない奴だよなあいろんな意味で。どう考えても打ち放しの帰りには見えないだろうし、せめて近隣住民に見つからない事をただ祈るばかりだ。とりあえず文句を呟きながらその不審人物の侵入した場所から一番近い電柱の陰に身を隠し、待つ事にした。まあ侵入経路から出てくるとは限らないしというか出てこない方がむしろいいくらいだ。しかし、ここ最近の流れから考えれば……多分。

そんな事を考えていると目の前で着地音が響く。

一瞬、恐怖と混乱が体を強ばらせ、視界もまっ白になりそうになったがなんとか押さえ込む。とにかく、深呼吸をひとつし、冷静を意識。眼前の人影に注視し、決断し声をかける。

「おい、あんたこんな所でなにやっている」

振り向いたその人物の顔を見た瞬間、俺はすぐに声をかけた事に少し後悔した。禍々しいとでも言えいいのか。顔のパーツ、パーツの異常な彫りの深さ、眼光の鋭さ、人類では絶対にあり得ない犬歯だけが並んだ口。その総合的な邪悪さは生物として本能的に恐怖が全身を支配した。

どうしよう、声はかけたものの、これはマズいぞ。どう考えても説得どうこうの相手じゃなさそうだぞ。人外の者の可能性だってある。

「なんだ、お前は？」

完全に固まってしまった俺にその怪人物は声をかける。会話は可能だったことに安堵する。ほんの少しだが恐怖による金縛り状態が緩和したような気がした。少し、流れのままに喋ってみる事にする。ゴルフクラブは相手から見えないように電柱の陰に隠す。

「いや、それはこっちのセリフだろう。そんな所から出入りしているところから見てあんた、この家の人じゃないよな？」

「だったらなんだ？」

全く悪びれた様子もなく、その人物は不敵に笑う。

「まあ不法侵入の現行犯ってことで」

「捕まえる？」

「そうなるな」

ただ気になるのは相手の雰囲気や様子はどう見てもチンケな下着ドロとは思えない点だ。これもしかして全然違う奴と対峙しているんじゃないだろうか。そんな最悪の可能性を考えつつも会話は進む。

「止めとけ」

「何？」

「止めとけって言うてるんだよ。本来の俺ならこんな警告もせずに返り討ちにするところだがな、今日はやっと目的が達成出来て気分がいい。見逃してやる。失せろ！」

思わぬ敵の言動に意表を突かれた。風貌に似合わず、随分とお優しい。表層的に見ればもっと野性的で攻撃的だと考えていたがこれは……

「目的って？まさかお気に入りの下着が見つかったとか？」

少し、茶化した感じ聞いてみる。否定してくればさっさと去れる。俺は下着ドロを捕まえに来たのであって他の犯行犯人に関しては捕まえる義務はないはずだ。まあそう言い訳すれば桜沢は怒るだろうし、つとと言うか下着ドロを捕まえる義務だって本当はない。

「ふっ。やはりな。偶然通りかかったにしては少し、リアクションが妙だとは思っていたが君が住民を困らせている悪しき下着泥棒をこの手で捕まえてやると意気込んでいる正義の味方気取り君だったとは」

そんな格好のいいものではないのだけだね。えっ……ということは本当にこいつが下着ドロという事になるのか？ 最悪っという下着ドロという規格から完全に外れている。ということは俺は今、下着ドロ界最強の男と対峙しているのかもしれない。ん？ それって凄いのか？

そんなしょうもない事を現実逃避気味に考えるが男はさらに言葉を紡ぐ。

「ならなおのこと去れ。安い正義感で死に急ぐなど愚か以外のなにものでもない。下着ドロを捕まえようとして返り討ちに遭った、間抜けもいいところだ。そうだろう？」

同感だ。しかし、なんだろうなこの気持ちには、実際にどうでもいいことなのだが標的を目の前にして堂々と見逃すのはなんか癪に障るというかなんというか気分が悪い。若さ故かなこの感覚は。全く俺らしくもない。全く困ったものだ。

豹と芳香 其の四

「ああっ全くだ。今日は俺はたまたまここを散歩をしていたが何も見ていないし誰にも会わなかった。そういうことだろう？」

「理解が早くてよろしい。では俺はこれで」

そう言いながら、その人物は俺に背中を向け、悠然と歩き出した。あからさまな隙。奴は俺を試しているのだ。本当にあきらめたのかどうかをそれを確認するために。つまりそれは自分の強さに対する絶対の自信であり、おそらくそれは事実だろう。ただし、それは奴が知っている情報の範囲での話である。俺の左手に握られているゴルフクラブ。この存在はおそらく奴は知らない。このゴルフクラブによる奴の攻撃範囲外からの攻撃。奴を捕まえるにはこれしかあるまい。ちよつと前まで図書室の片隅で本を読んでいた俺がこんな決断をする日がこようとは我ながら笑える。

俺は一気に間合いを詰めると同時にゴルフクラブを両手で握り直しね全力でその怪人物に向かってスイング。狙うは足だ。こちらとしては一撃だって反撃は貰いたくない。ならば足にそれなりのダメージを与えておけば、追う事、逃げる事、どちらを行うにしても有利に働くはずだ。それに足ならば致命傷にはなり得ないと一石二鳥にも三鳥にもなる。

そんな事を頭に巡らせながら今までの人生で初めて人へと放った一撃。恐怖と躊躇は当たるその瞬間、俺に反射的に目をつぶらせた。当然、俺にはそういう経験がないから当たればどのようなインパクトが手に伝わるかは知らないがこれは多分、違うんだろうなとは思った。なぜなら、その衝撃、そのものがいつまで経っても来ず。次の瞬間に來た衝撃は手には来ず、俺の頭の側面に訪れたのだ。

ああっ無理だ。衝撃の瞬間、俺はすぐにそう思った。

奴は俺のゴルフクラブの一閃を人では到底、あり得ない高さへの跳躍により回避し、それだけでも驚きなのにさらにその状態から口

ーリングソバットを繰り出し、俺の頭を薙いだ。俺はその場で崩れるように倒れる。

ダメージそのものは痛いことは痛いけど、痛いというわけではない。まあ視界は揺れるし、吐き気も少々食べた箇所鈍い痛みがあるが多分、立ち上がれないって程でもない。しかし、俺はかなりのダメージを負ったふりをし、膝から崩れ落ちる。傷は大したことはないとはいっても目の当たりにした男の身体能力から勝ち目がなさそうだと実感。同様の理由から逃げるのも無理そう。ならば戦闘不能を装い、去っていただくか期待薄だが桜沢達に助けてもらう。こんな状態から追撃されたらそれこそかなりやばいってことも分かるし、ぶっちゃけ怖い。危険な賭けだとも思ったがまあ仕方がない。状況が状況である。百パーセント安全な道などないだろう。

俺は生温いアスファルトと打撲の熱気を感じながら目をつぶり、ひたすら追撃が来ない事を祈り続けた。

どれくらい経ったのだろうか。こういう特殊な状況のせいはいち分からず。感覚的にはとても長い間、こうやって倒れているがもしかしたら実際は一分も経っていないかもしれない。

そんな事を考えているとどこからともなく足音が近づいてくる。思わず全身に力が入る。

「潤から聞いていたけど……あなたもしかして地べたで寝る特殊な宗教にでも入っているの？ それとも純粹に興味とか」

目を開けるとそこにはスカートを両手で押さえ、座りこみながら俺を眺める森先輩がいた。心なしかいつもよりも少しだけ心配そうな顔をしているようにも見えるが……彼女の発言から考える気のせいだろう。

その皮肉を含んだ言葉に俺は安堵し、全身に入っていた力を一気に抜きながら、大きく溜息を吐いた。

「怪我人に対して随分、冷たいですね」

俺は笑いながらゆっくりと仰向けになり、とりあえず正直な感想

を言ってみる。

「神馬さんが言うにはあんな無茶苦茶な体勢で放った蹴りの威力なんか知れてるって」

他人事だと思っただけの人は……ったく。

「で、潤がこういう風に言っただけじゃなかったら119番に通報してっただけだから」

でさっきの発言というわけか。なんか腹立つな。

「もういいですよ」

「怪我の方は？」

「神馬さんが言うように大した事はないです。まあ痛いですけどね」

「私個人は大事に至らなくて、ホッとしてるわ。神馬さんはああは言っただけじゃぱり心配だったから……よかった」

ちっともよくはないのだが……まあいいか。こうやって心配してくれる人もいるのだ。それだけでも救いがあるというものだ。

いくら痛みもマシになってきたのでとりあえず上半身を起こし、その場に座る。すると例の家から神馬さんが出てきた。

「おお樋口君だったか。無事でなによりだ」

新馬さんを正面からちゃん見たのは今が初めてだがやはり美人だと思った。着ている物は長袖のシャツにジーパンとラフな感じで腰まである髪もほとんどそのまま伸ばしてそのまま縛りましたという簡易なものだ。なんというか、見た目の印象としては気軽にお喋り出来そうな感じで何か惹

きつける雰囲気がある。

「全然、無事じゃないですよ。結構、痛かったですし」

「何を言ってる。五体満足で命に別状なけりゃ四捨五入すれば無事にカテゴライズされるだろうが」

暴論だなあ。風貌と同様に性格もかなり大雑把っぽいこの人。

「神馬さん。で結果はどうでしたか？」

森先輩はおもむろに立ち上がりながら聞く。

結果？　そう言えばこれ図捜査だったな。あの化け物が本当に一

連の下着泥棒事件の犯人だとすればさっきの奴の発言から目的のモノを手に入れたと考えるのが妥当だろう。今まで盗んだ下着をばらまいた理由も納得はいく。ただ分からない事がある。奴は一体、『どんな』下着を探していたのか？　かなりマニアックな変態の中の変態さんだろうか。だがまあそれは『餌』に何を使ったかを知らない事にはなんとも言えないところだ。

「ああ。潤の予想通りだったよ。しっかりと盗んでいったよ。しかもそれだけね。これですますます確定的となったな」

神馬さんはなぜか少し嬉しそうに言う。この人も桜沢と同じでこういう厄介事を楽しむタイプか。面倒だなあ。よく分からないけど。「奴は何を盗んでいたんですか」

「潤のパンツだ」

神馬さんは笑顔でそう答えた。

豹と芳香 其の五

ああつ最悪だ。俺が今まで生きてきた十六年間で間違いなく第一位の悪夢のような状況だ。俺は今ただ行く当てもなくこの周辺をウロウロしている。昨晚俺がローリングソバットを貰った例の家からほど近い、街灯もまばらな暗い場所である。「なんでこんな事に……」そんな疑問を昨日からずっと自問しているが答えは出てこない。今もそう呟きながら少し泣きそうな気持ちで歩いている。

気持ちちが落ち込んでいるせいか、つい地面ばかりを見て歩いていたら何かの気配を感じ、視線を上げる。その瞬間、『戦』『慄』の二文字が頭をよぎり自分の意思ではなく本能で踵を返すと次の瞬間には全力疾走していた。こういうあいまいな表現をすると言い訳臭くなるが、奴の表情は顔の造形こそ昨日

と同じだったが一段と鋭さの増した目つきは見る者全てを殺すような、それに反し口元は涎を垂らし嫌悪感を抱かせる程の邪悪な笑み、快楽と殺意の混ざった表情と雰囲気は見た瞬間、ヤバイと俺の中の本能が警告する。

逃げ切るのは無理でも全力疾走すれば一分くらいは三十秒くらいは時間が稼げると思っていた。その間に水上辺りが不意打ちか何かして戦闘不能にするとか考えていたが甘かった。その怪異なるモノのポテンシャルの凄まじさを改めて現在進行形で再認識した。

振り返り全力疾走の体勢に入った刹那、首の後ろを掴まれた感触と同時に信じられない質量が突然、背中に乗ってきた。やや前傾姿勢だった俺はその勢いのままに倒れ込む。

「逃げられると思ったか？」

獣臭い吐息と共に俺の耳元で聞き覚えのある声というか昨晚の下着泥棒と同じ声だ。どうやらこいつは俺が踵を返した瞬間に昨晚にも見せたびっくり脚力による跳躍で奴と俺との間にあった十数メートルの間合いを一瞬で消し去り、器用にも俺の背中に着地したらし

い。なんつー身体能力だ。やばいやばい、認識が甘過ぎた。予想以上にこいつやばい。無駄だと思いつつもなんとか逃れようと体をよじるがビクともしない。

「そうだもつと、もつと抵抗しろ。同じ食うにしてもやはり過程は楽しい方がいいからなあ」

怪人物はもはや獲物を捕らえた事を確信しているらしく余裕だ。おいちよつと待てこいつなんか今、凄く物騒な事言わなかったか？『食う』？どっちの意味で？どっちにしてもダントツで人生最大の危機だ。必死に暴れながら心の中でやばい連呼し、決心する。もう無理だ。正体を明かそう。作戦どうこうはもうどうでもいいし、信じられない。このまま拉致られでもしたら人生のグランドフィナーレを迎えてしまう。まあそんな大層な人生は送ってはいないが。やってられるか。正体を明かせば俺は対象外のはずだから見逃してもらえるかもしれない。

俺はすぐに大声、自分が男性である事を一発で理解してもらうために『ちよつと待ってください』と言おうとしたその瞬間であった。さっきまで全く動けそうな気配が微塵もなかった俺への拘束が緩くなった。少しの驚きと疑問からとっさに視線を男の方へと向ける。

「くそ、狙撃か！　まずい」

男はそう呟きながら男は首の側面から血を流し、右手には夜目にも目立つ赤い蛍光色の羽を施したダーツのようなものが握られている。醜い顔をさらに歪める。怒りもしくは悔しさが表情から見てとれる。

どうやら次の一手が間に合ったようだ。けどなんだろうかあれは。詳しく聞かされていない。おそらく、桜沢たちであろう、謎の狙撃。ダーツを地面に叩きつけ、何か次の言葉を紡ごうと犬歯の並ぶおぞましい口を開いた次の瞬間には第二弾、第三弾の狙撃が脇腹、太股の順に彼の体を美しい羽が彩っていった。

全く不思議な感覚だ。さっきまで生命の危機に瀕していたのだが

あまりの出来事に現実感が湧かず、呆然としていた。がしかし、目の前に転がっている怪人物は作り物でもなければ、幻想でもない間違いなく現実なのだ。

第二弾、第三弾のダーツが命中した後、狙撃ポイントである方向へ顔を向けると俺への拘束を解き。フラフラと立ち上がり、その方向へ歩き始めたがどうやらその行動は苦し紛れだったらしく、すぐに片膝をついたかと思うとそのままゆっくりと崩れるように倒れていった。

ただ呆然と俺はその倒れた怪人物を眺めていた。

「あーあ、俺の役目はなしか。残念なような、ホッとしたような……微妙だな」

背後から聞こえてきた水上の声がふわふわと揺蕩っていた心を正気に引き戻す。振り向くとどこに隠れていたのだろう、面倒くさそうに頭を掻く水上となぜか妙に嬉しそうな神馬さんがいた。

「二度もあんな化け物に襲撃されて無事とは君は悪運の強さだけはそれなりのようだな。しかし、お前……いや、いくらなんでもそれは……ぷっ」

失礼な。まあ今の俺の格好にも問題があるが別にしたくてしているわけではない。

「何も言わないでください。それより一体、何をしたんですか？

一見、ダーツのように見えますが」

「ん？ ダーツだよ。刺さった瞬間、麻酔薬が注入される特殊なやつだけだな」

麻酔ねえ。三発も撃ち込まれていたけど大丈夫かな。などと少しだけ犯人の安否を気にしつつもダーツが飛んできたと思われる方向に視線を向ける。

確か、奴は狙撃と言っていたが……。そこには自分が『狙撃』という単語からイメージしたイメージ通りの高層マンションが百メートル先ほどに存在していた。狙撃手はここにいない事から桜沢か東先輩辺りか？

「あそこから狙撃を？」

「ああ、そうだ。狙撃手の潤、弾着観測者の要の二人が屋上にいる。ん！？」

携帯になにか着信があったらしくポケットに手を入れ、取り出すと、いきなり喋り始めた。

「おお、バッチリだ。ああっ私もそう思うよ。今替わる、ご指名だよ」

そう言いながらなんか笑いをこらえ、俺に携帯が手渡す神馬さん。
「はい？」

そう言いながら携帯を耳に当てた瞬間、けたたましい笑い声が俺の耳を貫いた。桜沢か。

「なんだよ」

「悪い悪い。どう？ 人生初めての女装感想は？」

そうなのだ。今日、俺が人生最悪だと呟いていた要因、それはまともや生餌として泳がされている状況はもちろん最悪だ。それと同じくらいの悪夢、それが今、俺のしている格好である。ジャージの上に着ている十六年間着た事もなくもちろんこれから死ぬまで着ることのなかったであろう……うちの学校の制服、しかも女子の。

「最悪だよ。なんで俺がこんな……しかも臭いし」

「お前は女子に対する気遣いとかそういうのないわけ？」

「だったら、最初からこんな作戦、立案するなよ」

昨晚の展開は桜沢の予想通りだったらしく、桜沢のパンツが盗まれたその日のうちに今回行われた作戦の内容が伝えられた。どうやら神馬さん曰く、女性のアソコからは男性よりも濃く魂魄の香りがあるらしい。もちろん、霊的な要素のある人の方が『喰う』者にとっては美味だそうだ。で奴はその下着を手がかりに獲物を探していたらしい。

で今回の囹作戦である。と言ってもあの桜沢が自ら囹になるわけもなく、俺の連夜の生餌化が決定したわけである。もちろん抗議してみたがもちろん却下。そしてこの女装である。うちの学校の女子

制服だ、しかも桜沢の。しかもジャージの上からとはいえ下着まで付けさせられてである。男として以前に人としてなにか大切なものが折れて踏みにじられた、そんな気分だ。しかもその服が事前に激しい運動をし、汗をしこたま染みこませ、三日間熟成させたというのだから悲しみは鼻孔を通じてアンモニアの刺激臭とともに三割増だ。涙が出てくるいろんな意味で。

「そんな悪態つきつつも本当は嬉しいんだろ？正直に言ってみ」

「あんたは俺にどういうキャラを要求しているんだよ」

「男はちよつとくらいスケベな方が可愛げがあると私は考えるんだけなあ。少しくらい照れろよ」

「もう切ります」

馬鹿な会話が面倒くさくなってきた。

「ああっ待て待て、今回、こんな危険な目に遭わせてしまっただけでもすまないと思っているよ」

「そんないきなり謝られてもなあ。」

「まあいいよ。想定外ではあったにしろ危険は承知で入ったわけで、結果的に無事だったしな」

「その、お詫びの印といっってはなんだが本当はちよつと恥ずかしいんだけど」

嫌な予感しかないので通話ボタンの所に指を置く。

「その今、着用している下着全て恥を忍んでお前に、ブチッ」

聞くに堪えず強制的に着信を切る。本当は桜沢の狙撃の腕についてとか聞きたかったのだが……まあいいか。視線で神馬さんを探し、見つける。どうやら例の化物に興味津々のようだ。

「神馬さん」

声を掛けてみるが気付かない。どんだけご執心なんだよ。

「豹憑きのステージ？か……珍しいな」

近づいていくとぶつぶつとそんな事を呟いていた。少し興味があるがとりあえず再度、声を掛ける。

「神馬さん、すいません」

やっと気付いたらしくこちらに視線だけ寄越す。

「ん？　なんだ」

「この服なんすけど洗濯して桜沢に返してやってくれませんか」

神馬さんはなぜか怪訝そうな表情をする。ん？　なんだ？

「ん？　いいのかそれで？　寛大な神馬さんだ、一日くらい内緒で貸すぞ？　しゃぶしゃぶするなりポン酢でしめるなり好きにしたらいい。今回の件のご褒美だ」

「……」

ブルータスお前もか。なんだよポン酢でしめるって。

とりあえず事件はどうやらこれで一件落着のようだ。とにかく今日は疲れた。とっとと帰って寝たい。心の底からそう思った。

じわりと湧いた汗の香りが混ざり、生まれた新たな臭いは夏の本格的な到来を感じさせる独特の生暖かさは俺をより不快にさせた。

こうてこの怪夜の舞台は幕を下ろし、静かに更けていくのであった。

豹と芳香 其の五（後書き）

今シリーズ初の本格的な事件編となります。少々、下品な話になってしまったのが少し気になったと言えば気になる所でしょうか。怪人物のイメージは江戸川 乱歩の『人間豹』です。個人的にはもう少し話に深みを持たせたいなと考えているのですがどうでしょうね。この冬休みの間にブログで書きためた分を一気にこちらに投稿しようと考えていますので感想や批評ぜひよろしくお願いします。

それでは今酔いも酔い夢を 其の一（前書き）

それでは今酔いも酔い夢を 其の一

その電話は学校から自宅へ帰宅してからすぐだった。いきなりの携帯の着信音にちよつとビビる俺。滅多に電話もメールも来ないため、未だに突然来る音と振動に慣れずにいる。我ながらなんと情けない。その掛かってきた電話の相手が登録されていない番号ならばその不安はいつもより増すというものだ。まあとりあえず出るけど。

「はい、樋口です」

「森です。いきなりで悪いんだけど今、暇かな？」

電話の相手は森 要先輩だった。一応、面識のある人物だったが実際、まだよく知らない人なのでまだちよつと緊張が抜けない。今のところ俺の認識ではうちの部活で唯一の二年生であの桜沢の相方みたいな人というイメージだ。

「いや、暇と言われれば暇ですけど何か用事っすか？」

「ちよつと、大事な話があるんだけど、閑谷駅の近く、福建飯店って分かるかな？」

閑谷駅っていううちの最寄りの駅からふたつ向こうの駅だったか。駅は知っているがその福建飯店ってのはよく知らない。というか大事な話って携帯とか明日ではダメなのだろうか。

「駅は分かりますが店の場所の方はちよつと……。それよりその話、今とか明日じゃダメなんですか」

「ええ、事態は一刻を争うの。そしてとても大切な事で携帯ではちよつと……。お願い、切石君」

女性の声でそう言われると私生活に女っ気の少ない男子としてはホイホイと行きそうにはなるが相手はあのトラブルメーカーの桜沢の友人だ。油断は出来ない……。というよりあの件以来女性の誘いに懲りているというのもあるが。

「この件、もしかして桜沢、関わっています？」

桜沢サイドの人間が馬鹿正直に答えるとも思えないが今後のための参考として聞いてみる。桜沢が関わっているなら今回はパスだ。というかこんな切り口から始まって桜沢が関わっているならそれは間違いなく厄介事だろう。避けられるなら避けたいところだ。

「潤？ 潤は今日ちょっと用事があるとか言って放課後、神馬さんと一緒にどこかへ行ってるわよ。というか今回の件については潤は無関係よ」

これはちょっと意外というか、まあ森先輩が嘘をついている可能性もあるけどそこまで疑心暗鬼になってもしょうがない。人を疑うにも限度はある。まして俺はこの人の事、よく知らないわけだしな。「ああっそれならまあ、いいっすけど。駅で待ち合わせでいいっすか？」

「ええ、構わないわ。七時に閑谷駅、着いたら電話してくれない。樋口君ありがとう。助かったわ。」

「どういたしまして。では七時に」

まあ……悪い気はしなかった。

特になんの問題もなく閑谷駅に到着する。駅の時計を確認、現在六時五十分ぐらいのようだ。帰路につく会社員や学生に混じり特に何も考えず電車から降りる。

六月の半ば、日中の時間がかなり長いとはいってもさすがにほとんど夜と言っても差し支えないレベルまで辺りは暗くなっていた。夜とはいえその本格的な夏の到来を予感させる湿気を含んだ不快な暑さにうんざりしつつ、駅の出口へ向かう。

待ち合わせ場所は改札口と決めていたが結構、混雑しているので多少は探すかなとも思っていたが意外にもすぐに見つかった。

あれだけ地味だと逆に目立つんだな。失礼ながらとっさにそんなことが頭に浮かんだ。

改札口の一番組の壁に寄りかかり、本を読んでいる森先輩の姿を視界に入った瞬間確認出来た。無地の白いワンピースに黒い上着を着そして相変わrazuの前髪眼鏡だ。飾りっ気のなさ百二十%。私服

だと少しくらい雰囲気変わるのかなとか思っていたが予想は大きくはずれた。別にどうでもいいが。

「先輩。どうも、早いっすね。待ちましたか？」

森先輩は読んでいた本を閉じ、肩に掛けている大きめのシヨルダ―バックにその本を入れ、こちらを向く。俺を視認する。微笑みながらこちらを向く。

「別にそんなには待ってないわ。時間通りなんだから気にすることないわよ。それに無理にお願いしたのは私なわけだし、文句は言える立場じゃないわ。じゃあ行きましようか」

先輩はそう言いながら俺が改札口から出てきたのを確認するとスタスタと駅の外へ向かって歩き始めた。

「福建飯店はここから歩いてすぐだから。話はそこでしましょう」
見た目に反して結構、引っ張ってくる人だな。そう思いながらとりあえずついていく。

しかし、大事な話って一体なんだろうと少なくともあの部活の関係者である以上、いい話でないことは容易に予想出来る。まあ、俺も一応、関係者だが……桜沢が関わっていれば十中八九厄介事、しかも霊関係のと考えられるのだが森先輩単独でのこういう状況は初めてなので予想すら浮かんで来ない。

そんな事を考えつつ、当たり障りのない会話をしているうちに目的の場所に到着。福建飯店などと大層な名前で高級中華料理店の可能性も考え、いつもより多めにお金を持ってきたのだが外装は完全に『〇〇の王将』って感じの小汚い感じのラーメン屋で少々、拍子抜けと同時に安堵する。

「ここよ。誘ったのは私なんだから一応、ここは私の奢りって事で安心して食べていいわよ」

「いやあ……それはいいっすけど……名前負けっすね。ここ」

「初めて来た人はみんなそう言うわね。見た目はこんなだけど味はそこそこよ」

「そこそこですか……」

「そこそこよ」

じゃあなんでここにしたんだよ。

「じゃあ、入るわよ」

なぜか、どことなく嬉しそうな森先輩に首を傾げながら、俺も後
に続く。

心の中では厄介事じゃないことをただ静かに祈った。

それでは今酔いも酔い夢を 其の二

流れのままに入ってはみたが内装もやはりという当然というか完全に町の小汚いラーメン屋であり、中華料理屋独特の中華油っぽい臭いが充満していた。客の入りはこの時間にしては少ないような気がする。やっぱり先輩が言うように味もそこそこのだろう。

森先輩は空いている席を見つけるとそこに座り、ショルダーバックを足元に降ろす。俺もとちあえず先輩の向かいに座る。

すぐに店員がお冷やを持ってきたと同時に森先輩は炒飯セットと餃子二人前を注文する。女性の割には結構、食べるなあ。俺はここで特に何か食べたかったわけではないが他人が食べているのをジッと見るのはなんか気まずいのでラーメンを注文する。

「あつ後、生中ふたつ」

先輩が思い出したように発せられたそのセリフに一瞬、耳を疑いたくなった。

店員は注文を繰り返し、店の奥に去っていく。

今、この人『生中』って言ったよな。普通に考えれば『生中』といえど生ビールの事だろう。この「私は真面目です」と語らずとも全身の内側から滲み出ているようなこの人が……まさかねえ。多分、そういう名前の中華料理とかかな？ そうだそうに決まっている。とんなり無理矢理解釈するがそんな淡い希望にも似た解釈はすぐに店員が持ってきた黄金の液体入った巨大なジョッキにより打ち碎かれる。つーかどう見てもビールだろそれ。

先輩は目の前に置かれたその液体を見るなり、その表情は今まで見たのない素晴らしい笑顔をしていた。そしてジョッキの取っ手を握りしめる。

「ではとりあえず、お疲れさまです」

そう言いながら俺の方に向けてゆっくりとジョッキが突き出される。どうやら乾杯がしたいらしい。

「ちょっと待ってください」

「ん？ 何？」

なぜ、という感じで首を傾げる。

「それはなんですか」

俺は分かっている、その先輩が持っている液体を指さし、質問する。

「ビールだけど」

「『それがなにか？』みたい言わないでください。先輩はいくつですか」

「十七だけど」

「じゃあまずいでしよう」

「えっおいしいよ？ ビール嫌い？」

わざとまのか真面目なのか、俺に向かって真顔で首を傾げる。

「そういう味の問題じゃなくて、俺は未成年の飲酒について……」

「ああっそれなら大丈夫だよ。ここは今時、珍しく未成年にも金さえ払えばお酒を飲ましてくれるとても良心的な店だよ」

いや、それは駄目な店だろ、と心で呟く。

「それに君はそういう細かい事を気にする堅物君なの？」

「別にそういうわけではないっすけど……」

個人的には飲酒だろうが喫煙だろうが他人事なのでどうぞご自由にとまっている。ただ今回は先輩の普段の地味真面目キャラからは考えられないような行動に思わず突っ込んでしまったのと見た目が明らかに未成年の先輩の飲酒を周辺にいる良識ある大人に注意もしくは通報されないかという不安が頭によぎったからだ。飲むのはかまわないが出来れば隠れてか俺と関係のない場所で飲んでいただきたい。

「じゃあ別にいいでしょ。それでは改めまして、乾っ杯〜♪」

先輩はそう言う俺の目の前置かれているジョッキに自分のジョッキを軽く当てるとジョッキそのものの重さを全く感じさせない軽快な動作で勢いよくビールを飲み始める。

「ぷはー。この一口目、本当にたまらないわあ」

普段、全く見たことがない笑顔で一気にジョッキの半分くらいを飲んでいいる。おっさんか、あんたは、と心の中で突っ込む。

そうこう言っている間に餃子が来る。結構、早いな。

「おっ来た来た。いただきまーす」

そう言いながら、小皿を二枚取ると俺と自分の目の前に置き、タレを入れ始める。つかどうか大事な話は？

「先輩、それで大事な話っていうのは……」

当初の目的を完全に忘れていいるんじゃないかという疑念と不安が浮かんだので念のため聞いてみる。

「まあまあ。せっかく餃子が来たんだし、熱いうちに食べないと勿体ないわよ」

そう言いながら彼女は美味しそうに餃子を食べ始め、それを肴にまた実に旨そうにのどを鳴らしながらビールを飲み干していく。

「いや、別に俺はここに飯食べに来たわけじゃないんすけど。別に食べながらもいいでしょ？」

「んー別にいいけどさあ。君もなかなかつまらん男よね。飯の最中に深刻な話などしてはご飯が不味くなるじゃない」

先輩はやれやれといった感じで首を振る。いや、だったら飯を会う前に済ませておいてほしいものだとか心の中で呟く。

「深刻な話なんですか？」

「ええ……だから落ち着いて、ちゃんとした形で話したいの」

なんか胡散臭いな。とは思いつつも、俺の瞳を真っ直ぐ見つめるその眼差しに俺の方が先になんか照れてしまい、視線をはずす。なんかダメだなこういうの。

「ただ、その前にお腹が空いちゃって、ね？少しの間だけこの馬鹿な先輩と楽しく会食してくれないかな？」

箸を口にくわえ、胸の前で手を合わせ、拝むように懇願する。

話の内容は気になるが、まあ話す内容さえ忘れないでいてくれるなら仮にも同年代の女性である先輩との食事は決して悪くはないと

……思ってしまう辺りが俺のヌルいというか馬鹿というか。

「まあいいっすけど。先輩、さっきから結構、いいペースで飲んでますけど大丈夫っすよね？」

唯一の懸念はそこだ。べろんべろんに酔われては話どころでなくなってしまう。

「大丈夫、大丈夫。こう見えても私は酒にはかなり強いからねえ。家族もみんな強いらしいから血筋かもね」

まあ嘘だったらそれはそれで今後の参考にもなるだろうからとりあえずは様子見だな。

そうこうしているうちに注文していた料理が来て、楽しい楽しい晚餐となったわけだが。

三十分後……

「なんかねえ。表面上は普通に接してるはずなんだけど、なんか私以外の人と違って、接し方に距離を感じるのよねえ。なんか避けられてるというか……」

食事もほとんど終わり、頃合いとしてはそろそろ本題に入っていたんだけど……なんとなくこういうオチだろうなどは予感はしていた。しこたまビールを飲んでいた先輩は出会った当初にあった真面目な委員長っぽいイメージは灰燼と化し、虚空の彼方に消し去っていた。そしていまだにビールを飲み、ニンニクの口臭をまき散らしながら、虚ろな瞳でグチをこぼしているその姿は完全に立ち飲み屋のオッサンを彷彿とさせる。

次（その次があればの話だが）は絶対、飲む前に用事を済ませよう。俺はそう心に決めた。

さて……で、どうしようかな。

それでは今酔いも酔い夢を 其の三

「先輩、で話ってなんですか」

一応、無駄だとは思いうけど聞いてみる。面倒くさいなあ。

「ん？ 話？ えーとそうそう、そういう用件で呼び出したんだっけ」

先輩は視線が定まらないまま、ケラケラと笑う。何がおかしいんだろう。まあ酔っぱらい相手にまともな会話など期待してはいないが今までの時間は一体なんだったんだ。思わずため息をつく。

「けどさ。たまにはよく知らない人と一緒に食事っていうのも悪くないね。うん、悪くない」

そこにはやはり普段の部活では見ることの出来ない無垢な本当に嬉しそうな先輩の顔がそこにはあった。

「デザートはバニラアイスです」

突然の声に驚くと同時に俺達の目の前にガラスの器にウエハースと共に美味しそうなバニラアイスがのっている。正直、中華みたいな脂っぽい食事の後にはぜひ締めで欲しい一品だ……がそんなもん注文したっけ。

「あの、頼んでいないですけど」

と持ってきた店員の方へ向く。その瞬間、俺は驚愕のあまり、一瞬マジで時が止まった。

「なぜお前がここにいる」

そこにはその店の店員の格好をした仏頂面の水上 冬馬がいた。

「樋口も災難だな」

「まあ、ある意味な。じゃなくて、お前ここでバイトしてたのか？」

「微妙に違う。ここ、俺の親父の店なんだよ。で、俺はたまにこうやって手伝っているわけだ」

「おおっ樋口、喜ベアイスだぞ。ここはどの料理もそこそこだがア

イスは絶品なんだ」

先輩は子供のようにテンションを上げ、アイスを食べ始める。

「先輩、微妙に傷つくっす」

「だって事実なんだからしょうがないじゃん」

「このアイスは手作りなのか？」

「いえ、スー〇ーカップっす」

……それは傷つくっすーか言うなよそんなこと。先輩も安い舌だなあ。まあうまいけどね、スー〇ーカップ。

「それはそうとさっき『樋口も』って言ってたけどこういう事って結構あるのか」

「前は主に俺が呼び出されてた。あれだろ『大事な話が』みたいな感じの理由で呼び出されたんだろ？」

「じゃあ大事な話っていうのは……」

「単なる呼び出す口実だ」

「じゃあ、別になにか目的が？」

だとすればそれは一体、何なのだろうか。わざわざ呼び出し、本人がベロンベロンに酔う事で達成される目的……分からないな。

「いや、それが特にないんだ」

「はあ!？」

思わず変な声を上げてしまった。

「強いて挙げるならこうやってお前と食事する事自体が目的と言えるかもな」

「いまいち意味が分からないのだが食事する事、自体に意味があると？」

「いや、なんかお前、無理矢理深く、意味があると考えようとしてるけど単に先輩は極度の寂しがりやでひとりで飯が食えないというだけだ」

よし、帰ろう。

今、俺の心は清々しくも馬鹿らしいそんな気分の中、俺は帰宅を決意した。

「おい！ 冬馬！いつまで喋ってんだ。さっさと仕事としろ」
厨房らしき奥からおそらく親父さんだろう、ドスのきいた声が聞こえてきた。

「ういーす。悪いな。なん用があったらまた呼んでくれ。じゃ」
気のない返事と共に声の発信元へと戻っていく。

「じゃあ俺、これ食ったら帰ろうと思うんですけどいいですか？。特に用事もなかったみたいですし」

「えーもう少しくらい付き合ってくれてもいいじゃない」

アイスクリームを食べ終え、空の器をとスプーンを弄びながら、焦点の定まらない視線をこちらに向ける。

「大事な話っていうのも嘘だったわけですし、ここにいる理由、ありませんから」

アイスクリームを食べ終え、俺は席を立とうとする。嘘をつかれたせいだろうか少しイライラしているようだ。

「えー。じゃあすぐく大事な話するからもうちょっと付き合ってください」

いきなり腕をつかまれる。

面倒臭いなあ、この酔っぱらい。

「じゃあどうぞ、さわりだけ聞いてどうでもよさそうだったらマジで帰りますよ」

「んーじゃあ日本におけるー侵略的外来種についてー」

「帰ります」

「なんでー、地球規模の大事な話だよ」

「規模でかすぎますし、今しなきゃダメ話でもないですよ。明日で充分です。」

それ、今思いついただけでしょうが」

「んー確かにそうだけど……仕方がない帰るか」

とても残念そうな表情と共にしぶしぶ一緒に立ち上がると同時に大きくふらつく。大丈夫かよ。

ふと無意識にふらつく先輩の後ろのテーブルにいる客に視界の焦

点が合った。おそらく女性であろうか。背中まで届く長い黒髪。しかし、その髪には艶というものが全くなく、肌の色もどこことなく生氣的なものを感じない気がした。何か食べているのだろうか小刻みに動くその口から見え隠れする乱杭

歯との組み合わせは嫌なものを見てしまったと思わず後悔した。

とりあえず視線を戻し、おぼつかない足取りの先輩と会計を済まし、一緒に外に出る。

「ねえ、家まで送ってくれる？」

それって女性の口から言うセリフだったか。面倒臭いがよく考えてみればこの状態の先輩を放っておいてトラブルに巻き込まれたり、警察に補導されたりする方が後々、厄介だ。あーもう。でもそれほど悪い気がしない自分はやっぱりなんていうかダメだな。

「いいっすよ。近いんっすか？」

「うん、歩いて十分くらいかな」

まあそれくらいなら……

そう考えながら、千鳥足の先輩の後ろについていく。

それでは今酔いも酔い夢を 其の四

凄く不快な音が周囲に響いている。なるべくなら見ないであげたところだが少し心配なので視界の端で捉えつつ、終わるのをただ待つ。道路脇に座り込みながらひたすらリバーズしている先輩を。歩き始めた時はそんなでもなかったのだが歩いているうちに酔いがまわったのだろうか。

直前までご機嫌だった先輩が「あつ ヤパい」と言って道路脇へ走ったと思うとそこでまさかの大量リバーズ。いきなりの事態に俺は軽くひきつつも仕方なく近くの自販機でミネラルウォーターを買い、とりあえず飲ませ落ち着かせる。なんとかいけるかなと思いき始め二分。現在に至る。

「まったく、先輩飲めないなら飲まないで下さいよ。今日一日でどんだけ自分の株を暴落させるつもりですか」

「いや、本当にすまん。もっといけると思っていたんだけどなあ。

あゝ気持ち悪っ。神様、本当すいません。もう絶対飲まないと誓います」

「飲んで吐いたりしている人はみんなそう言うらしいですね」

「言うな。忘却は人類に残された最後の……」

なにか言う前に再度、吐く。なんかもう最悪だないろんな意味で。誰かが俺達の進行方向から来たようだ。自分達とのすれ違う瞬間に気付き、視線を思わず走らせる。

それは先程の中華料理屋にいた気味の悪い女だった。目が逢い、その瞬間、全身の毛穴から嫌な汗が滲むような戦慄が走る。その目は濁り、まつ毛が一本もなく、何を食べているわけでもないのにさつきと同じく、口を小刻みに動かしている。その乱杭歯が見え隠れする口からは何かが腐ったような不快な臭いが漂っている。その女はわずかに笑みを浮かべるとそのまま、立ち止まる事もなくそのまま歩いていった。

そしてふと疑問に思う。

さっきまで確か、店にいたと思ったのだが……見間違い？ いや、あんな奴そうそういるか？ そんな事を自問自答しているといつの間にか若干ながら回復し、立ち上がった先輩がいた。

吐瀉物が少し、服にかかっているせいかこちらも若干、不快な臭いがする。

「おい、どうした？ なにかあった？」

「いえ、なにも。それより大丈夫ですか」

「今のところはね。第三波が来る前にさっさと帰りましょう。あゝきつゝ」

右手で頭をおさえつつ、再びふらふらと歩き始める。

歩き始めて十数分くらい経っただろうか。一向に到着する気配がないまま歩き続けている。ちゃんと家に向かっていているんだだろうか。という心配もあったがそんな事が些末に思えてしまうような事態にどうもなっているみたいだ。

また女と再びすれ違う。やはり間違いない、先程の女だ。口は何かを食べているように小刻みに動かし、何かが腐ったような強烈な吐息をまき散らす。不気味な眼はかすかに笑っているようにも思える。恐怖あまりの気持ち悪くなって俺まで吐き気を覚える。

当たり前だ。俺はこの十数分の間にあの不気味な女と四回もすれ違っている。これはもう人違いとか偶然とかそういうレベルではない異常だ。違ったら失礼だがあの女からは何か人ならざる感じがする。最悪、憑かれたかもしれない。

それだと今、俺にとっての問題は先輩の家に着いたらどうすればいいのかだ。ここから一人で帰るとか嫌すぎる。かと言って先輩の家に泊めてくれとか……言えるわけないよなあ。恥ずかしいし、なにより仮にも女子である先輩が彼氏でもない男子を泊めてくれるわけがない。けど怖いし……どうする俺。

しかし、それにしても長すぎるもう歩き始めて二十分くらいになるだろうか。

またもあの不気味な女とすれ違う。不可解すぎる。心なしか、さつきよりもすれ違うまでの間隔が早くなっている気がするし。

「先輩、まだっすか」

恐れと不安の入り混じった複雑な心境で聞いてみる。

先輩は振り向き、俺に笑いかける。思いつきり、今作った、引きつった笑みである。

嫌な予感……

「ごめん。迷った」

なんでだよ。って普通は怒るところなんだろうけど状況が状況なだけにちよつとホッとしている自分もいる複雑な心境だ。けど、突っ込まないとダメなところなのでとりあえず突っ込む。

「いや、先輩、なんで地元で迷子になるんですか」

「いやあ、いつも電車で一駅乗って、そこからすぐなんだけど酔い醒ましにちよつと歩きながら帰ろうと思ったんだけど……やっぱ慣れない事はするもんじゃないね」

「酔ってるんだし、ちゃんと……もういいです。俺もこの辺はよく知らないんで一旦、戻りましょう。駅からすぐなんですよね？」

色々、考えたがこの場合、下手にうろろしてもさらに迷うだけだ。今なら記憶を頼りになんとか戻れるような気がする。

またあの女が俺達とすれ違っていく。やはり頻度が目に見えて増えている。

とにかく人のいる所に出たい。

「ああっそれがいい。たがその前に……さつきからなんか私達変な奴に尾行されてない？」

吐いたせいか酔いも大分、醒めてきたようだ。まだ、不快そうではあるが。

「ええっ。尾行とはちよつと違いますけどさつきの合計5、6回はすれ違っていますね。偶然っていう可能性もなくもないですがどう考えても、ちよつと無理があります。正直、女の雰囲気から考えると面倒事になるかも……」

「まあいきなりそう断定するのもあれだけどさっき通った所に公園があったからとりあえずそこまで戻って、ベンチにでも座ってちょっと調べてみるわ。ちょっとしんどいし。あー気持ち悪。まだ残ってるなあ……」

やはりまだ酔いが抜けきってはいないようだ。先輩はなにかを振り払うように頭を振る

「調べるって何を？」

「今回の事象をよ。もしかしたら過去にそういう現象があったかもしれないでしょ？」

「どうやって？」

「ついてくれば分かるわ。百聞は一見にしかずよ。」

そう言われ、先輩と共にさっき通り過ぎた公園まで戻りベンチに座る。

夜の公園は今の心情のせいかとても薄気味悪く思えた。

先輩はさっき買ったミネラルウォーターを一気に飲み、一息つくとききまで肩から掛けいていたショルダーバックからノートパソコンを取り出す。

そして起動させるとなにやらパソコンをいじり始めた。

「何してるんです」

「唐突だけど、君は部室にある大量の本、読んだ？」

本当にいきなりなんの質問だよ。確かに部室には壁が見えないくらいほどの本棚とそれに入れられた大量古臭くさの本がある。特にタイトルもなく少し読んでみたが何かの日誌のような内容だった。特に興味もなかったので気にも止めなかったが。

「いや、あんまり。そういえばあれってなんなんっすか？」

「んー簡単に言えばレポートかな？ 怪現象に関する」

先輩はパソコンに視線を固定したまま、会話を続ける。

「マジっすか？」

俺は思わず半信半疑っぽい口調で聞き返してしまう。あり得るのかそんなモノ。

「うん、それが本当なのよ。で、そのデータの中には怪現象に対する対処方なんかも載っていて怪現象を扱う我が部としては重要な資料なわけ。それらをまとめたデータベースがこのパソコンに入っているからちよつと調べてみるの」

「ああ……でさっき女の特徴とか聞いていたんですね」
便利な時代になったものだ。

「そういうこと。……おっ該当する事象がやっぱり過去にも数件あったみたい」

そいつは僥倖つと言おうとした瞬間だった。

聞き覚えのある不快な何かを食べ、口の中で弄ぶような音。そして吐き気をもよおす強烈な腐臭。俺は戦慄し、一瞬で体も硬直した。見たくはない。しかし、だからといって確認せずにはいられない。そんな葛藤を胸中で渦巻かせながら俺は視線を先輩とは逆方向へゆっくりと移していく。

分かってはいた。しかし、俺は恐怖せずにはいられなかった。そこにはやはり先程の不気味な女が静かに俺の隣に座っていた。

それでは今酔いも酔い夢を 其の五

とにかく、今の時点では特に何かしてくる様子はなさそうだがすぐにここから離れたい、そういう衝動に駆られる。

「先輩！」

「分かってる。目の前にある遊具が見えるよね」

いきなりなんの話だ。確かに俺達の前、三十メートルくらい先にテントウムシの背中のようなドーム状で穴だらけの遊具がある。

「あれが何か」

「ついてきて」

なんの説明もなく、先輩はノートパソコンを閉じ、脇に抱えるとその遊具に向かい歩き始めた。

「ちょっと！ 先輩」

「あっごめん私の鞆、持ってきて」

おれはベンチに置き忘れられていた先輩の鞆を持ち、後を追う。一体、何をしようというのか。

あの不気味な女はまだベンチに座ったままだ。どうやらすぐに追って来る気はないらしい。先輩は何も言わずにさっさとその遊具の中へ入っていく。わけがわからず。俺は遊具の外で立ち尽くす。なんのつもりだ？

「先輩、もしかしてまだ酔ってます？」

「いや、大分吐いたから気分は最悪だけど酔いは醒めてるわ。そんな事はどうでもいいでしょ。さっさと入って来なさいよ。『奴』が来るでしょうが」

しぶしぶ、言われるままにその遊具の中に入る。中はほとんど真っ暗で外の街灯からのわずかな明かりのおかげ辛うじて完全な闇を免れている。というかこんな所に入って何をしようというのだ。こんな所にいてもし、あの女がここについてきたら最悪以外の何物でもない。ホラー映画ならこんな所に籠も

るなど死亡フラグである。

「はい、これ」

そんな事を考えていると先輩から俺は何かでかい短冊のような物を数枚渡される。

「何っすか。これ」

「それを舐めて」

一瞬、というかさっきからずっとわけが分からないが、なんなんだこの状況は。

「はい？」

「いいから！ 札の裏側を切手みたいに舐めるの。後で説明するか」

先輩はきよんとする俺に若干、いらついたのだろうかそれともなにか焦ってるのか？ 少し、語気を強める。

その短冊はよく見ると文字のようなものが書かれていた。とにかく俺は言われるままに短冊の裏側を舐める。紙質はまるでザラ半紙を舐めているようでザラザラとしていて舌触りはかなり不快だった。先輩は俺が舐めたその短冊を受け取ると素早い動作で遊具内側にセロハンテープで貼っていく。全部で四枚、四方向にその短冊を貼り終えると軽く息を吐き、ゆっくりと座りこむ。大した事はしていないのになんか一仕事終わったような達成感で満ちた表情だな。とりあえず一安心と思っているのは先輩の様子で分かるが一体、何をしたんだろう。

「先輩。これ何っすか？」

「結果だよ。見れば分かるでしょ？」

いや、そんなさも当然のように言われても。普通は分からねえだろ。っていうか『結果』って……またかよ。この人達と付き合っていると普通、人生を歩んでいてほとんどの人が日常会話では一生、使うことのないような単語をよく耳にする。

「マジっすか」

「今さらマジもなにも、あんた、学習能力ないわねえ。まあ活動内

容が内容だけにね。こういう簡易式だけど結界用の札が部員全員に支給されてるの。樋口君にももう少ししたら渡されると思うよ」

「使う日が一生来ないことを祈ります。それより効き目ちゃんとするんですよ？」

「それは大丈夫。実証済みだし、まあ初めてのあんたにとっては不安だろうけどね。その点は安心していいよ」

そう言われれば信じるしかないが、やはり不安な気持ちは拭いきれない。気を紛らわすため会話を続ける。

「さっき見つかったって言っていた今回の怪異の詳細教えてもらっているんですか。少し、気になるんで」

「いいわよ」

先輩はそう言いながら、ノートパソコンを膝の上に乗せると再び開ける。画面から放たれるの青白い光が先輩の顔を怪しく浮かび上がらせる。今のところあの不気味な女が周辺いる気配はない。結界が効いているのだろうか。

「正式名称は不明だけど一部の人もしくはうちの部の報告書では『オイヤミさん』と呼称しているみたい。特徴はやはりあんたが言っていた異様な口元と異臭。で、基本動作は追尾する事。家の中までついて来られたり、被害者の関連性不明の事故死なんかも報告されているわ。正体は報告が近年に限られている点から達の悪い徘徊型の霊と推測。以上が今回の怪異に関するざっとしたデータだ」

そんなものに遭遇した自分の運命を呪いたくなる。

「で、どうするんですかこれから。こんな所に籠もってしまつて。次の手だてとかは」

「ないわよ」

「えっ」

一瞬、冗談だと思い込みたかったが先輩の真顔からどうやら本気らしいという空気が伝わる。

「ここに籠もって、朝まで籠城大作戦よ。残念ながら撃退方法まで

は書いてなくて。もし家の中にまでついてこられても嫌だし、朝まで待って消えるのを待ちましようってわけ。君には災難になってしまったな。すまないな。私が呼び出したばかりに」

全くである。がこれもまた桜沢、そしてこの部に関わってしまった宿命なのかもしれない……と無理矢理自分を納得させようとしたがやっぱり無理だ。

「いいっすよ。もうあきらめましたから」

ちよつとイライラしている自分に少し自己嫌悪。

先輩は悪くないんだから落ち着け俺。いや、そりゃ確かに行動としては悪いけどこの状況は霊のせいだから……

なんていうかこういう状況でなければ女子と暗がりで二人つきりなどなど男性ならば誰もがドキドキする展開だろうに。

何者がこの遊具の周囲を歩いている足音が静かにそして大きく俺の鼓膜にこだまする。漂う腐臭はその足音の正体があいつである証左だ。やはり来たか。

「神馬さんか桜沢に連絡は？」

焦る俺の頭の中で考えられる一手はその手の事に詳しそうなこの二人に助けを乞うくらいしか思い浮かばなかった。

「今、試しにやってみてるけどやっぱりダメね。あの二人あまり携帯電話に出ない人だから。とりあえずメールは入れといたけど」

携帯電話の意味ねーと心の中でため息と共に呟く。

先輩の肩越しにある遊具の穴が視界に入る。再び体が硬直。

ああっ正面からモロに見てしまった。俺の瞳に映ったそれはおぞましい笑みを浮かべ禍々しい瞳で俺を睨みながら静かにたたずんでいた。

たりにしちまったら信じるしかないっすよ」

プラスあの女が人ならざるモノである事が確定という意味でもある。まあそうじゃなかったとしてもそれはそれで怖いけど。ということはこの結界がある限りあの女はここへは入って来られない。とりあえずは安心だが……

「先輩、倒す手段がないからこのまま朝まで籠城という先輩の作戦ですけど、俺はいいっすけど先輩はいいんすか」

「それはどういう意味？」

先輩は面白そうに尋ね返す。この人、分かって言ってるな。

「単純に俺が男で先輩が女だって話っす」

「状況が状況だからね。仕方ないんじゃない？」

特に臆面も恥じらいもなくさり言った。剛胆なのか、それとも俺が男として見られていないのか？

そしてあの女はというと懲りもせず遊具の周りをただひたすら歩いている。遊具の穴から時折、視界に入ってくるのは中に侵入出来ないと分かっているけど嫌な感じがした。

三十分くらいしただろうか。何もやる事がないせいか時間の流れが驚く程遅い。他愛のない会話をしていたのだが俺はいまいち会話に入り込めずにいた。しかし先輩はまるで何事もないようにしようもない話題を振ってくる。やはり慣れているのか。つーかあの部活に入ると慣れる程こういう状況に遭遇するのか？嫌すぎる。

そんな会話をしてたのだが急に先輩の体が硬直し、表情がさっきまでゆるい表情ではなく真剣になる。

まさか、俺の背後に『いる』のか？それとも侵入されたのか？

「悪い。トイレに行きたくなんだけど。どうしよう。」

静寂となんか妙な空気が遊具の中に充満していくのが分かる。

「ああ、やっぱりダメね。ビール飲むと近くなってしまうがなわ」

『オッサンか、あんたは』というツツコミは心の中に留めておく。さて、問題だ。

「我慢の方は？やっぱり無理っばいっすか」

「当たり前でしょ。じゃなかったらいちいちこんな事、申告しないわよ」

「ですよ。確か、さっき公園の風景を見た時にはトイレらしき建物がありましたからそこに行くしかないっすね」

まあ結界から出る事になるがこんな所で女子高生がそんな事をするわけにもいくまい。

「ただ、それにはちょっと問題があるのよね」

「何っすか」

「結界用の札があと二枚しかないのよ」

……そういう事か。つまりもう結界を張れない。トイレという狭い個室の中でのあの女との遭遇。考えただけで鳥肌モノだ。

「仕方がないわ。恥を承知でここでやってしまおうしか……」

「いや、ちょっと待って下さい。今から俺が何か手を考えるんでいくらなんでもそれは先輩が可愛そうだし、俺も明日から非常に気まづくなる。なんか昨日と同じ関係でいられなくなるようなそんな気がする。」

「もーれーるー」

先輩はあぐらをかいたまま両膝を上下し、だだっ子のように喋る。まだ酔っているのか？状況を楽しんでいるのか。後者ならどういう思考回路しているんだこの人は。

「分かりましたから。二分待ってください。なんとか考えますからとにかく考えるんだ。やれば出来るぞ俺。考えろ俺。」

考えられるのは俺がここを出て、ここでしてもらうか、もしくは外の奴を倒し堂々と公園のトイレでしていただくぐらいか。出来れば後者を選びたいところだが。問題は方法だ。残念ながら時間と俺の思考能力の限界から策はひとつしか思い浮かばなかった。だがやるしかない。ああっなんでこんな事に。

「先輩。いくつか質問が」

「手短にね。本当に限界みたいだから」

真顔で苦痛と羞恥を瞳で訴えかける。やはりあまり余裕はなさそ

うだな。

俺は先輩に二、三質問をする。その答えはすべて俺の予想通りだった。準備も完了。あとはこの方法があいつに効くかどうかだけだがまあこれに関しては賭だな。俺は遊具の入り口の近くで静かに奇襲するタイミングを計る。相も変わらず静かで不気味な足音が徐々に近づいてくる。

「もし、ダメだったらすぐに結界の中に逃げて。神馬さんも言っていたけど基本、霊に手を出すのはとても危険な事だから」

辛そうな表情だったが俺を心底、心配してくれているものなんとなく感じられた。それだけで少しだけ体の芯が一瞬、熱くなったような気がする。

「分かりました。だからもう少しだけ我慢してくださいね」

「ああ。なるべく早くな。この歳でさすがお漏らしは恥ずかしいかな。がんばるよ」

先輩は俺を少しでもリラックスさせようと思ったのか、無理矢理笑みを浮かべる。俺も同じく先輩を少しでも心配させないように微笑み返す。

足音はかなり近づいていた。あと十秒といったところか。

十、九……三、二、一、今だ！

俺は拳を握りしめながら結界の外へ勢いよく飛び出した

それでは今酔いも酔い夢を 其の七

遊具の外へ出た俺はすぐに視線をオイヤミの方向へ向け、身構える。いきなり襲ってこないだろうかと少し危惧していたのだが女はただそこにたたずんでいるだけだった。

女は様子は吐き気をもよおす臭気、嫌悪感の湧く笑みを浮かべる口元から漏れる咀嚼音。心臓の弱い人なら本当に殺せるんじゃないかと思える血走り生気を感じさせない刺さるような視線と相変わらずだ。

結界から出る前にはわずかな混乱や逡巡もあったがこうしてこの人ならざるモノと対峙した瞬間にそれらのものはすべて消え去り、思考は完全に停止する。頭の中が真っ白になり何も考えられなくなった俺ではあったが攻撃の対象に対してはなぜか落ち着いて見えていた。

俺の肌で外に吹くわずかな風を肌を感じ、女の立ち位置を把握し、右手を固く改めて握り直す。そして俺の行動のベクトルはその女を殴る事一点のみ収束される。

だが格闘経験のない俺がそんな素晴らしい拳撃を放てるわけもなく。拳を適当に振り上げ、そのままその女の右側の顔面目掛けて、力一杯振り回す。女は全く避ける素振すら見せず、そのまま俺の拳は奴の顔面に右頬を抉る。

手に伝わってきた感触は人を殴った時に感じる、それとは全く違い、生クリームの塊を殴ったようななんとも心地悪いものだった。

殴る前に余裕とすら感じられる笑み浮かべていた女も拳が奴の頬にめり込んだ瞬間、驚愕に変わり、次の瞬間には首から上はコナゴナになり霧散した。ワンテンポ遅れて首から下も同じく消えていった。一瞬だけ悲鳴も聞こえたような気もするが気のせいかもしれない。

「ははっ本当に効くとはね」

俺は安堵のあまり両膝をつき、深く息を吐く。

地味に痛くなってきた左腕の傷と滴る血を認識する。

札に血を塗り、それで殴る。頭の悪そうな作戦だがそれしか思いつかなかったんだからしょうがない。先輩曰く、札単体でも効果はあるが霊的素養のある人の汗とか唾を塗ると飛躍的効力が増すそう。でどうやら俺はその素養のある人に該当するらしい。だから遊具を結界にする際、舐めさせたそう。で血ならもっと効果上がるかなと考え、俺は手持ちのカッターで左手を切り、それを付着させた札をメリケンサックみたいに拳に巻きそれであの女を殴り結果、大成功というわけである。

冷静になって考えればなんの確信もないしちよつと無茶だったかな。

「痛って、どっかで傷洗わないとな」

テンパってたせいかちよつと深く切り過ぎたかもしれない。つとそうじゃなくて先輩に声掛けないともう限界のはずだしな。

安堵のあまり目的を見失いかけていた。

「先輩、もう行っても大丈夫ですよ」

……返事がない。うん？ どうしたのだろう。

「先輩！ 何かあったんですか。先輩！」

俺は先輩に呼びかけながら遊具に近づこうとする。

「来ないで！」

どういう事だ。まさか奴がなんらかの方法で結界の中へ、と一瞬、頭を過ぎったが夜の静寂を切り裂く静かな水音は全てを物語っていた。

「先輩……」

なんで、俺までなんか恥ずかしい感じになっいるんだろう。

「樋口、もういい。もういいよ」

俺はただ遊具から静かに離れる。

様々な感情が混ざり、処理出来なくなりつつある自分。終わったことは終わったんだろうけど、いろんな意味で。今日の出来事はな

んか後に引きそうだなとなんとなく思った。

そして静かに夜空を見上げ、月に向かって俺は呟く。

「なんて日なんだ」

「ふーん。そんな事があったんだ」

桜沢はそう言いながら炒飯を旨そうにほおぼる。

翌日の放課後。部長である桜沢には今回の現象についてとりあえず口頭で報告したところ、今の反応というわけだ。以外に反応が薄いのはやはり慣れているからだだろうか？

いつものメンバーに今日は珍しく神馬さんも来ていて、桜沢と一緒に炒飯を食べている。

「いや、怪現象はともかく、あの結界用の札にそんな使い道があったとは知らなかった。神馬さんは知ってたの？」

どうやら桜沢は今回の件では現象そのものよりもそちらの方が気になったらしい。

神馬さんは食べる行為を一旦止め頭を掻きながらいかにも面倒臭そうな雰囲気醸し出す。

「一応、そういう事も出来る。正式術式を用いて製作された退魔用の札だからな」

「なんで今まで教えてくれなかったんですか。そういう事が出来るならば霊に対する戦略も一気に増えるじゃないですか」

桜沢はなぜかとてもおもしろそうに眼を輝かせる。まるで新しく玩具を前にした子供のようだ。

「だからだよ。お前には言っても分からないだろうが人に害する霊がイコール『悪』ではない。だから私は霊とはいえ滅してしまうのはどうかと考えてる。出来るならば去るのを待つ、退いていただくそれがうちの基本方針だ。既に何回か言っているとは思うが」

桜沢の顔にやや怒気が含まれる表情に変わる。少しイラついていうようだ。何かわけありなのだろうか。それにしても今の神馬さん

話は少し興味深いな。

「けどそのせいで部員に危険が出る場合も！」

神馬さんは手で桜沢を制し、レンゲを静かにテーブルに置く。

「その議論は今までもかなりやっただろう。結論は出ないよ。あなたの答えもわたしの答えもひとつの『答え』だからな。私が言えるのは極力使うな。それだけだ。今までどおり依頼は私がチェックして危険性に応じて私がつきそう。以上」

桜沢はまだ不満気だったが黙り、神馬さんは再び食事を再開する。昨日なんか色々ありすぎて距離が縮まったのか遠くなったのかよく分からなくなってしまった森先輩は相変わらずノートパソコンに向かってキーボードを叩いている。どうやら昨日の件の報告書をまとめているらしい。

昨日は「全部、忘れて」と言われたので口には出さなかったが今日、あらためて対面するとお互いやっぱり気まずくて、今日はまだ何も話していない。

先輩の方をちらちらと見ていたため何度か目は合うのだがすぐに恥ずかしそうに画面の陰に隠れてしまう。

うーんなんか以前より関係が悪化したような。まあ当然と言えば当然か。俺に非がないとは言え、やはり『あれ』は恥ずかしいと思う。しばらくほとぼりが冷めるまで待ちますか。

それでは今酔いも酔い夢を 其の七（後書き）

事件パターンとしては大別して依頼パターンと遭遇パターンがあり、これは後者のパターンです。出来れば半々くらいの割合で構成したいとは考えています。

今回はメインキャラの一人、森 要のキャラクター付けの意味合いも含めた話となっています。まだ始まったばかりですのでどうしてもそういうキャラ紹介的なエピソードが多めになると思います。しばらくそういう傾向の話が続くと考えています。また若干、オチが下っばいのはちょっと僕の趣味も入ってるかもしれませんが言い訳させていただくと最初からこうしたかったわけではなく書いていくうちに自然とそういう流れに……やっぱりそういう趣味でしたすいません。もう少し自重した方がいいかも。その辺は反省しないとなあ。

何か感想や指摘がありましたらぜひ教えてください。よろしくお願ひします。

テディベアと終焉のエリア 其の一

六月の半ば、本格的な暑さはすぐそこまで来ている。既に充分過ぎる程暑いのでそろそろ誰か太陽さんをの説得に行っていた方がいい気分だ。まあそんな馬鹿な考えが浮かんでしまうほど暑いという事だ。

今日も俺はいつものように部室へ向かう。ここ数日は依頼もなく実に平和、嬉しい限りだ。中華料理をつまみながらの桜沢や水上とのなんの意味もないくだらない会話も俺からしたらそんなに悪くないと思う。

そんな事を考えていると大抵、事件っていうのは起こるものだが

……

俺は今、目の前の光景を目にして足が止まる。

なぜだ。やっぱり思っちゃまずかったかな。

部室の前にうちの部員じゃない誰かが座り込んでいるその女子近づいていた俺に気付き、立ち上がる。

一応、ここまで来てしまっているのに踵を返すわけにもいかず、出足は鈍くなったが部室へは着実に向かっている。気持ちとしては帰りたい。依頼人とは限らないけどここに来る部外者が吉報を持ってくる気がしなかった。

俺はとりあえずその女子と会話するのに自然な距離まで詰め、声を掛けようとした。

「すみません。民俗学研究部の方ですか？」

先に言われた。どっちでもいいことだけど。

「そうっすけど、あんたは？」

中途半端に敬語で喋るべきかタメ口でいいか迷う。よく見れば制服のボタンの色から一年生だと識別出来た。同級生だが面識はない。「ここに来れば、困ったこととかの相談に乗ってもらえるって聞いて来たんですけど」

学校でどういう噂が流れているかは知らないけど基本方針が微妙にずれて伝わっているような。揉め事の処理だったよな確か。

「まあとりあえず、中で入って待ってもらえる？もう少ししたら全員来ると思うから」

俺はそう言いながら部室の鍵を開け、依頼人を中へ入れる。十数分後ほどなく部室に全員集合。いつもやっている水上の料理は中止にし、依頼内容を聞くことになった。

「待たせてしまつてごめんなさいね。私はここの部長、桜沢 潤です。ではさっそくですが相談内容を聞きましょうか」

外面用っぽい桜沢の物腰に違和感を覚える。言ったら怒られるのと言わないけど、ちょっとおもしろいかな。

その女子はついさっきまで室内をかなり不思議な目でキョロキョロ見ていた。見た感じではまだ落ち着かないって様子だ。まあ学校の廊下からいきなりこんな生活感丸出しの空間が現れれば誰でもこうなる。俺でもそうなる。

「私は一年四組の天根 鈴です。今日はいきなり来てしまつてすいません」

「いって、いって、どうせ暇だったし」

リラックスさせるためだろう。桜沢は軽い感じ返す。

「今日、たまたまそういう噂を聞いて……で相談というのが私の友人、若月 楓っていうんですけど。彼女、何かに憑かれているかもしれないんです」

放課後の普段いる教室の廊下というのは同じ場所のはずなのになにどこか違う感じがするなとふと頭にそんな思考を巡らせながら今俺は歩いている。

俺は今、桜沢と二人である人物に会いに行くところだ。そう、依頼人が何か憑かれているかとも言っていた依頼人の天根 鈴の友人、若月 楓とかいう女子の所に。

「桜沢、また随分、急だな。いきなり会いに行くなんて」

天根からどのような症状かを二、三聞くとまだ若月が校内にまだいるか携帯で確認してもらい、まだいるという事で現在に至るわけだ。

「色々聞くよりも本人を霊視した方が一発で分かるからね。こういう依頼は割とあるけど八割はた単なる精神的な病気だったりするしね」

だろうな。そんな事がそうそうあるわけがない。けど残りの二割は本当に憑かれているって事か？ 微妙に高いような気も……

「そんなものだろうな。俺だったら今回の件、依頼人も含め、腕のいい心療内科の先生を紹介してあげたいところだ」

友人の様子がおかしいから霊現象を疑うっていうのは今はともかく昔の俺だったら考えられない話だ。

症状も急にぼーっとする時がある、怒りっぽくなった、微妙に感じが違うといった程度のものだ。せめてブリッジして階段を登るくらいはしてもらわないと。

天根はおそらくみえない人だろう。常識的な人ならいきなり霊の仕事という発想は出てこないように思うのだがそうでもないのかな。

「そう言わない。人間ってのは原因不明の現象にはそういう方向に理由付けを施してしまうものよ。藁をもすがる気持ちでうちに来たのかも知れない」

そうこう言っているうちに目的の教室に到着、天根にお願いして若月にはこの教室で待って貰っている。

桜沢はなんの躊躇もなく教室に入り、俺もそれに続く。

その女はただ空を見ていた。窓際の席に座り、まるで教室にある備品のように微動だにしない。俺達が入ってきたにも関わらず彼女は全く反応しなかった。

気付いていない？ それともわざと無視しているのか。

「どうも」

桜沢が馴れ馴れしく話しかける。こういう時こいつのこのフラン

クな感じは助かる。俺は人見知りするタイプだから声を掛けたりするのはいまいち苦手だ。

若月はそう呼びかけられ、やっとこちらの存在に気付いたらしいが特にこれといった反応はなく最小限の会釈をするのみだった。

「私達は天根さんから聞いていると思うけど校内で心理カウンセリングの真似事をしているの。今日、天根さんからあなたの様子が少し、心配だという相談があって、少しあなたとお喋りしてみようと思ったわけなんです」

カウセリングねえ。ちょっと笑ってしまいそうになる。俺はお前がその道の専門家にカウセリングして貰った方がいいと思う。

「そう。そんなところだろうなとは思っていたけど。ならありがた迷惑だわ。鈴には悪いけど喋る事なんてないわ」

そう言いながら若月は立ち上がると鞆を肩に掛けこの場から去ろうとする。

「うーん。それは残念。もし何か、喋りたい事がありましたらいつでも言ってくださいね」

桜沢も気持ち悪いくらいあっさり引き下がる。もう少しくらい粘るかと思ったのだが桜沢はなぜか少し嬉しそうな表情をしていて、言葉と表情が合っていない。

無言のまま教室を後にする。

「さてと。まあこんなものだろうでしょ」

そう呟くと嬉しそうに俺の方を見る。

「あれは喰われているかもしれないわね」

その不吉な発言に俺はわずかな頭痛を覚えた。

テディベアと終焉のエリア 其の二

「喰われている？　どういう意味だ」

俺は思わず首を傾げる。いまいち理解出来ない。一体、何に何が喰われたというのか。

「お前は彼女を見て何か感じたことはある？」

「少なくとも何か憑いてるとかそういう感じはなかったけど……」

「けど？」

やはり少し嬉しそうに聞き返す。

こいつ分かっていて聞いてやがるな。確かにうまく説明出来ないがなんか彼女を視認した際にあった妙な違和感があった。あれは。

「なんか普通の人と比べて、そこに存在するという感じが希薄だったような。いまいちうまく言い表せないけど」

「うんやっぱりね。私もそう思った。やっぱ自分だけじゃないってのは確信になっていいね。まあ正確には魂の気配が極端に薄かった」
また聞き慣れない単語が飛び出す。なんだよ魂の気配って。

「言い換えれば魂の発する臭いっていうのかな。あんたは後天的に見えるようになったっぽいけど私は先天的だから私の方がそういうのには敏感なのよ。普通はどんな人間でも一定量するものなのに彼女からそれがほとんど無臭に近かったわ」

そんなモノがあったとは驚きだな。俺からもしているのだろうか。「元々、薄い人もいるけど彼女の場合、性格の急変等も含まれているから後天的、しかも霊的トラブルの可能性が高いわね」

うわあ、今、この人、さらっと嫌な事言ったなあ。

「あの、すいません。急に気分が悪くなったんで帰っていいですか」
「じゃあ、一旦、部室に帰って作戦会議かな。神馬さんにも連絡しなきゃだし」

聞いちゃいねえし。

数日後

今、俺は若月 楓の自宅近くに來ている。いつものメンバーに神馬さんを加えた五人は車から降り、若月の家に向かつて歩く。

「おい、桜沢。マジでやる気か。これ犯罪だぞ。一応、言っとくけど」

「しょうがないでしょ。原因探らなきゃ助けようがないんだから」

今日は若月の家が完全に留守になるという事で原因があると思われる彼女の自宅に不法侵入しようという今回の作戦だが思っていた以上にこいつらフリーダムだな。

「静かにしろ、馬鹿。喧嘩するな。ここまで来て、今さら何を言ってる」

神馬さんががこちらを睨みつける。家の前に辿り着くと神馬さんは何やら怪しい道具を何点靴から取り出すと鍵穴をいじり始めた、と思っただけの三十秒程で開けてしまった。

それはもう完全に犯罪だろ。つーかあんた何者だ。

ドアを開けると俺を除いた全員がなんの躊躇もなく家へ入っていく。いや今更だけど慣れすぎ過ぎだろお前ら。

「お前もとつと入れ」

神馬さんに背中を押され、しぶしぶ、俺も犯罪者の仲間入り。

歸りてえ。心の底からそう思った。

「よし、では事前の打ち合わせ通り、樋口は一階を探索、私と神馬さんは二階で若月 楓の私室を中心とした探索、他は誰も歸ってこないか見張っていて。じゃよろしく」

桜沢はそう言い終わると神馬さんとまるで自分の家のように平然とすぐ近くにあった階段を登っていく。

「ちよつと待てよ。探索っ何を探せばいいんだよ」

「そんなものはフィーリングよ。なんかここおかしいなあと思う場所や物があつたら知らせて」

桜沢はそう言いながら二階へと消えていく。

「お前、そんな適当な」

なんだよフィーリングって考えるな感じろってやつか？ ブルー
スリーかお前は。

「お前も大変だな。いろいろと」
横で水上が無表情でそう呟く。

「そう思ってくれるなら一緒に探索を手伝ってくれよ」

はつきり言って他人の家でしかも何があるかもしれない家をウロ
ウロするのは不安だ。

「別にいいけど、俺はそういう能力ないからあまり探索には役に立
たないぞ」

「ん？ それはどういう意味だ」

「俺と森先輩はいわゆる『みえない』人だという事。そういう事は
感知したりは出来ない」

これはちよつと意外だな。こういう部活だからてつきり全員『そ
ういう』能力を持っているものだと思っていたのだがそうでもない
のか。

「けど以前 オイヤミさんに追われた時、森先輩は見えていたぞ」

「まーその辺は神馬さん曰く、霊体の霊子濃度とか関係しているら
しいが詳しい事は俺もよく分からないんだけどな。条件によっては
俺らでも見えるらしい」

「とにかく見えなくてもいいから一緒に来てくれ。ぶっちゃけ何が
あるかも分からない家で一人での探索は不安なんだ」

「って言ってますけどいいですか？」

振り向き、玄関で座りながらパソコンの画面を見ていた森先輩に
話しかける。

「別に構わないわよ。見張りって言っても簡易設置タイプの監視カ
メラの画像をチェックするだけだからいてもいなくても一緒よ」

さらっとときつい事言う人だな。じゃあ別に監視に水上いらないじ
ゃんと心の中で呟く。余ったので適当に振り分けたのだろうか。

「呼んだ時にすぐ来てくれたらそれで充分間に合うしね」

「俺の役目はこの家の人間が帰ってきて、脱出が間に合わなかった

場合の足止め担当だ。最悪、少し乱暴な事になってもいいそうだが……それってどうなんだろう」

俺が疑問に思った事を察してか水上は簡単に自分の役割を説明したらしいがそんな事聞かれても返答に困る。『殴ればいいと思うよ』
「とでも言えと？」

「どうなんだろうって、とりあえずそうならないよう祈るしかないんじゃない。まあお互い大変だな」

水上の扱いの酷さに少し共感しつつ、水上と共に一階の探索を開始とは言ってもリビングを含め三部屋くらいしかない狭い日本家屋だすぐに全部回り切ってしまった。

箆笥や押入も開けては見たが特になにもなく。中はさすがに物色するわけにもいかず二十分程でやる事がなくなり、途方に暮れた。全く、何やってんだかな。そう呟きながら、水上が持ってきた中国茶を三人で飲む。やっぱり後ろめたさのせいでなんか落ち着かない。上にいる二人が何も見つけずあきらめてさっさっ降りてくる事を願った。

俺の携帯がいきなりバイブし始める。画面には桜沢の二文字。『リング』のビデオを見た後にかかってくる電話並の不吉さを感じる。そのまま切りたい衝動を我慢しながら電話に出る。

「見つけたわ。すぐ上がって来て！」

それだけを伝える桜沢はすぐに電話を切った。

俺は切れた携帯電話を見つめながら大きく溜息をついた。

テディベアと終焉のエリア 其の三

桜沢は二階を上がってすぐ所にいた。

「樋口、こっちこっち」

そう言いながら俺の腕を掴むと急かすように引っ張ってきた。俺はどっちかというとそのな靈的現象に関わりたくないので無駄とは分かりつつも若干、抵抗しつつ歩く。桜沢の方はやはりなんか生き生きとしている。

引っ張られながら入った部屋はどうやら若月 楓の自室らしい。よく考えれば女子の部屋に入るのはこれが初めてかもしれない。しかし、その最初が不法侵入とは泣けてくる。

しかし、初めてなので標準的な女子の部屋を知らない。案外、普通という感想が真っ先に浮かんだ。ベッド、机、本棚と部屋におけるいわゆるスタンダードな物が配置されている。女子の部屋とはもう少し可愛いものだと思っていたがどうやら妄想だったらしい。もっとも若月 楓なる人物が元々そういう人物だったかも知れないが、強いて挙げれば所々に飾られているぬいぐるみがわずかながらこの部屋の主が女性である事を想像させる程度か。

「で、どれだよ。来てみたけどそんな悪いモノがいる感じは微塵もないぞ」

「うん、やはりそうか。ということはこの件に携わっている奴がそれなりの奴だっていう事になる」

部屋のベット腰掛けていた神馬さんは俺の反応をさも当然のように態度で喋り続ける。

「普通、呪詛や怪異の類が近くいれば、よっぽど鈍感な奴じゃない限り、何かを感じるはずだ。それは生物としての生存本能だ。人間も他の生物と比べ危機察知能力が退化しているとは言ってもまあ『ここは嫌だな』と感じる程度の能力は一応ある。私達みたいな人種なら尚更、そういうのには敏感なわけだが」

なんとなくだが分かる気がする。事実、科学がこんなにも進んだ世の中なのに人の入らない、入ってはいけない場所や地域の存在等が普通に存在する点から考えると妙に納得してしまう話である。

「怪異や呪い、特に後者はそれでは成立しないのでそれなりのレベルの術者なら気付かれないような細工を施すわけだ」

「で、今回の件はそれだと？」

いきなりなんの説明かと思った。

「そういう事、あそこにテディベアがあるでしょ」

神馬さんが俺の後ろにある出窓を指さす。そこには確かに数体の動物のぬいぐるみと共にティディベアがあつたが改めてそういう認識で凝視してみるもやはり特に何も感じない。

「あれですか」

いまいち信じられないなと思いつつ、俺はおもむろにそれに近づこうとする。

「そう。あつ触るなよ。誰が作ったかもうという術を掛けてあるかも分からないんだ」

「じゃあどうするんです。これが原因なんですよ？」

いきなりその辺にありそうな熊の人形が呪いの原因ですと言われ、でもいまいちピンと来ない。半信半疑というのが正直な所だ。

「そう急くな。既にこいつは若月とかいう女の魂を半分近く喰ってる、安易に取り除けば済むというステージではないんだ、既に。魂魄がめいぐるみとリンクしている可能性もある。下手をすれば元に戻らなくなる可能性だってある。細心の注意をもって事に当たらないと」

「じゃあ、やっぱり大元、このぬいぐるみの製作者を捜すしかないですね」

桜沢が口を挟む。

「そうだな。ロゴと四方からぬいぐるみを撮影し、調査してみるか」
急遽、ぬいぐるみの撮影会を行い。ほどなく撤収。若月の家を後にする。

しかし、今回は直接的な怪異でないせいか終始、俺は騙されているんじゃないだろうかと疑念と不法侵入がバレないだろうかという不安が同時に胸中で渦巻き、妙な気分の悪さを感じた。

あの不法侵入の件から数日、特に何もなく過ぎ、今日も俺は桜沢や水上とくだらない事を喋るか本を読むといった感じの時間を過ごしている。事件を処理している時以外は特にやる事のない部なので自分は何をやってるんだとたまに自問自答してしまう。運動部とかと違ってトレーニング等ないので仕方がないと言えば仕方がないのだが。

「桜沢。あのぬいぐるみの出所を調べるって言ってたけどやっぱりまだかかるのか？」

「うーん今、神馬さんと要が調べてるんだけどこればかりはねえ……連絡もないし」

定時連絡とかさせればいいのに。というかあんな情報だけで一体、どうやって調べるというのだろうか。

「若月 楓の方は？」

「まだしばらくは保つとは思うけど……一週間経って分からなかったら次の手を打つわ。だからもう少しだけ我慢して」

「まあ別にいいけど」

次の手は一応あるのか。やはりあの人形そのものを直接どうにかするのだろうか。

学校のチャイムが鳴り響く。そろそろ下校時刻だ。今日も特に連絡なしか。

奥の台所で水上の食器を洗う音がむなしく響く。思わずため息が出る。

「さて、帰りましょう。何かあったらまた連絡するからよろしくね」
「ああ」

俺は気のない返事をするとう水上と共に鞆を持ち、部室を出て帰路

につく。

自宅に帰り、晩飯を食べ、その後で宿題をやりうとしたのだが事件のせいかいまいち集中出来ずにいた。

全く、腹の立つ話だ。自分は正義の味方気取りみたいな事は嫌いだし、今回の件も自分にはどうしようもない。気にするべきではない。そう自分には言い聞かせているのだがこうしている今も、若月楓の魂は徐々に喰われていく。その事とそれを気にしてしまう自分の心境に心底むかつき、そして心をかき乱した。

ああもう俺はこういう他人についてグタグタ悩むタイプじゃないはずんだけどなあ。もういいや。今日は寝よ。明日になればこの心境も多少マシになるだろう、そんな希望的推測を胸に俺は少し早いと思いつつも床につく事にした。

深夜二時、暗闇の静寂を引き裂く携帯の着信音に目を覚ます。

こんな時間に誰だよと思いつながらもうこういう非常識な時間に電話を掛けてくるバカは俺の知り合いに一人しかない。予想通り、携帯の画面には桜沢の二文字。いらつきと安堵の混合された感情のせいか微妙に頭痛を覚える。

「はい。樋口です」

「あつ樋口？ 今って大丈夫？」

「おい、今何時だ」

「二時三十分」

「常識っ二文字はないのか、お前の辞書には」

「人命が危機に瀕している時などの非常時にはそういうものは適用外になるのよ。これこそ常識。救急車やパトカーが信号を無視していいようにね」

「なんか納得いかねえ」

なんとなく筋が通っているようにも聞こえるその暴論に抵抗せずにはいられない。

「とにかく、今あんたの家の前にいるから、とっとと出てきて」

「おいちょっと待て、最初セリフは何だったんだ。今、命令形にな

ったぞ」

「一応ね。建前よ。空気、読んでね」

そう言って、携帯が切れる。

腹は立つがこうやって迎えに来たところを見ると製作者と居場所が判明したのだろう。行く事にはこのまま悩んでいるよりはマシなのでいいのだが……大丈夫なのだろうか、そんな呪いの人形作っているような奴の所へ直接行って。新しく生まれたその不安に俺は胃に鈍い痛みを感じた。

テディベアと終焉のエリア 其の四

疾走する車の窓をただ眺めてはいるが目映るのは黒に黒が配色された漆黒の世界。外を眺めれば気も紛れるかと思っただが暗闇対する潜在的恐怖心から心がザワつくだけだった。

いつものメンバーはいるようだがさすがに皆、心なし眠そうに見える。

「今から行く所ってやっぱり犯人の所か？」

前に座っている桜沢に声を掛ける。何か喋ってないと不安でどうにかなりそうだ。

「ええ。やっと特定出来たみたいでさっき連絡があったの。そんなこんなで急遽、全員の強制招集となったわけ」

「まあ実際はほとんど要がやったようなものだけだね。私は今回の作戦の下準備とかした程度だがね」

神馬さんはそう補足しながらバックミラー越しに視線を寄越す。

「神馬さんがこうやってわざわざ付き添ってくれているって事は今回も結構ヤバイ感じって事ですか？」

「可能性としてはね。まあそう不安がるな霊的な事象でヤバイ事なんてそうそうないから」

これほど説得力ない言葉も珍しい。つつか人の魂を喰らう人形が出ている時点ですでに充分、尋常ではないだろ。心の底から不安だ。

「けどそんな人形を作るくらいの人物なんですよね、犯人は。何者なんです」

神馬さんは少し面倒くさそうな表情をする。

「要、頼む」

「分かりました。今回、あの魂を喰らう人形の製作と思われる人物、名前は香月 静留。人形作りの名家香月家の末裔にあたる人物で、江戸時代ではその業界で香月の名を知らない者はいないくらいのビ

ツグネームだったらいいわね」

「だった？　じゃあ今は？」

「人形作りに関しては数年前に廃業しているわ」

森先輩はノートパソコンの画面を見ながら淡々と説明する。

「神馬さん、こういう昔の人形師っていうのは今回みたいな呪術みたいなものをよく使ったりするんですか」

とりあえず、疑問に思ったことを口走る。霊的な質問なので神馬さんにしてみる。

「さあ」

随分と素っ気ない返事が返ってくる。

「なにぶん、ああいう伝統系って鎖された社会構造を形成しているからなあ。情報があまり出てこないんだよ。裏ではそういう術の存在があるかもしれないし、他の術者が第三者が介入してきた可能性もある。結局のところ」

車が静かに停車し、ドアが自動で開く。どうやら市街地の中らしい。

「本人に聞いてみないと何とも言えないって事だ。さあ到着だ。行くぞ」

神馬さんは助手席からてかいボストンバックを肩に掛け、車外に出る。俺達もそれに合わせてとりあえず出る。

人形作りの名家とさっき聞いて、でかい日本家屋的なものを想像していたのだがどうもそれっぽい建物はなさそうだな。ここから少し歩くのだろうか。

「よし、全員降りたな。今回の件の犯人はこの目の前のマンションの最上階605号室に住んでいる。とりあえず、ここじゃ目立つんでこのマンションの屋上へ行くから」

そう言いながら神馬さんはマンションの入り口に向かって歩を進め。俺以

外の全員なんの躊躇もなくそれに付いていく。

俺はため息混じりにその後を追い、改めてそのマンションを眺め

る。どう見ても普通のどっちかというと安っぽい外観だ。

「意外っちゃあ意外かな」

俺はそう静かに呟いた。

夜風を少し肌感じはするものの六月特有蒸し暑さは緊張と相まって呼吸すらし辛く思える。

屋上に上がるやいなや神馬さんはすぐにボストンバックからザイルやら金具やらを出して何やら準備を始める。

まさかここから犯人の部屋のベランダに降りる気か？ ははっ本当だったらおもしろい冗談だな。

神馬さんがザイルのカナグを給水塔の梯子に取り付ける。どうやらマジらしい。作業を終え、戻ってくる。

「では作戦を説明する。私と水上でここからベランダに降り、室内へ侵入。水上は犯人の拘束。私はすぐに中から鍵を開けるから他の奴ら605号室前で待機。以上だがなにか質問は？ ないならすぐに決行する。行くぞ水上」

そう言い終わると神馬さんは早くも降りるため水上と共に歩き始める。相変わらず無茶ではあるが俺が降りなくていいというのはこの上なく素晴らしい。これからもこの感じでお願ひしたいものだ。

桜沢

がなぜか不満顔だがなんで？ と思ひながら、俺は東先輩と共に屋内へ入ろうとすると突然、後ろで桜沢の声が聞こえた。

「神馬さん、私も降りたかったんですけど」

どうやらこいつはこの降下作戦もどきをやりたかったみたいだ。

この人、どこまでアグレッシブなんだよ。ややこしいな。

「お前なあ、以前もやりたいてって言ってやらせて落ちかけただろうが」

「今回は大丈夫ですよ。あれから学校で何回か練習しましたし、前みたいにはなりませんよ」

学校で何やってるんだよ。つーかどんだけ行きたいんだよ。理解に苦しむな。トラブルを楽しめる桜沢にとってはそれほど魅力的と

いう事なのだろう。

「そうなのか」

神馬さんは面倒くさそうな表情をしながら水上に形式上っぽい確認をとる。

「はい。学校で二十回程、落下八回、降りられなくなった六回と自分としてはまだ実践するのは危険っすね」

「だそうだ。残念でした」

「水上」この裏切り者。空気読めバカ」

いや、当然だろ。どうでもいいから早くしてほしい。眠いのもあるだろうがどうやら俺はちよつとイライラしているっぽい。ちよつと自己嫌悪。

「すみません。けどやっぱ危ないんで……」

桜沢はまだ納得したわけではなさそうだったが水上の心情を察してか不機嫌顔でこちらに向かってくる。てつきりもつと駄々をこねると思ったが。

「行くわよ」

「ああつ、さっさつと済ませて帰りたいよ、マジで」

俺と桜沢と東先輩は指示通り605号室前に到着。現時点でおそろくベランダに降下し終えていると考える今からが本題といったところか。最悪、警察沙汰もあり得るだけにぜひとも無理はして欲しくない。

沈黙。何も聞こえない。仮に犯人（仮）の香月 静留が中で都合良く寝ていたとしても多少なり何か物音が聞こえると思うのだが。もしかして留守だったとかだったら俺としてはこれ以上の幸福はないと言える、本日限定だけどね。頼むから大声で助けを呼ばれるとかだけは勘弁してほしい。そう考えてみるとマジでそうになったらどうすればいいんだろう。考えれば考える程、不安がつのるばかりだ。

テディベアと終焉のエリア 其の五

意外な事に拍子抜けするぐらい何の物音もしないまま、605号室のドアがあっさり開き、中から神馬さんが顔を出す。

「捕獲成功。さっさと中に入って」

随分とあっさりだな。てっきりもう少しややこしい事になるんじゃないかと予想していたのだがまあ何もないのにこしたことはない。とりあえず部屋へ入る。玄関から短い廊下を少し歩きトリビングらしき部屋へと神馬さんに続き、入る。中では今回の件の容疑者 香月 静留と思われる人物がうつ伏せの状態で水上に完全に組み伏されていた。顔は今の位置からは見えないが金髪のショートカットに浴衣というアンバランスな格好からまあ多分、変わった奴だろうなとなんとなく思った。

「随分とおとなしいな。もっと抵抗するものだと思っていたんだが……」

神馬さんはそう言いながら香月の頭のすぐ隣に腰をおろす。

「おい、叫ぶなよ。少しでも叫んだら、気絶させて拉致って別の場所が無惨な拷問する羽目になる。それはお互い面倒だろう？」

サラッと恐ろしい事言うな、この人。完全に犯罪だし、っつーか既に犯罪か。なぜ、こうなったし。

香月は顔を上げ、ゆっくり頭を上下させる。口にはガムテープが貼っている。こんな状況にしては妙に表情は落ち着いている。そういうものだろうか。よくわからないが。年齢は二十代前半くらいだろうか。

神馬さんはゆっくりとガムテープをはがす。

「ふう、厄日だな。クソッ。で何？ 聞きたい事って。なんとなく見当はつくけど」

当然の悪態か。この状況悪態つけるのも凄いいけどな。俺だったら泣きたくなる。

「うん。話が早くて助かる。見て欲しい物があるんだけど、この写真のぬいぐるみ、見覚えある？」

神馬さんはおもむろに香月の目の前に一枚の写真を出す。写真はおそらく例のティベアのものだろう。

不機嫌な視線を神馬さんの持っている写真に向ける。そして深いため息をひとつつく。

「確かにこれは私の製作した人形だ。全く、だから嫌だと言ったのよ」

香月は何やらグチを言い始めた。その口ぶりからどうやら誰かに依頼されて渋々、作った感じだろうか。

「持ち主が魂を喰われて困っている。対処法は？」

「人形から当人を離せば浸食は止まるわ。喰われちゃった分は申し訳ないけど自然回復待ちって事になる。気休め程度でいいなら回復を促す薬ぐらいなら処方するわ」

「随分と素直ね。もう少し自分の正当性とか芸術論とか語ると思っ
てただけど」

隣にいる桜沢が余計な事を言う。いいじゃん別に。

「作ったとは言っても副業としてよ。普段はしがないOL。そこま
でプライド持って人形師やってるわけでもないしね」

「ま、そんなところだろうな。さて対処方も聞いたし、大体、予想
通りだったが」

そう言いながら神馬さんは立ち上がる。帰る気だろうか。

「神馬さん、そいつは何者かから若月さんの呪殺を依頼されたわけ
ですよ？そいつについては聞かなくていいんですか」

急にさっきまで黙って香月を取り押さえていた水上が神馬さんに
質問をした。俺もそれは考えていたが面倒臭くて言うのをやめてい
た。根本の原因はそこなのだからそいつを何とかしないとこの件は
解決したとは言えないだろう。当然っといえば当然の疑問だ。

「呪殺？ははっお前それはちがうぞ、水上。こいつはあくまで人形
師だ。人形しか作らん」

「はあ」

気のない返事をする水上。

「いまいち分かっていないようだな。そうだな……お前ら御霊入れて知っているか？」

「御霊入れ？」

少なくとも俺の今までの人生では聞いたことない単語だ。

「簡単に言うそうだな。何かを作る時に魂を込めて作るとか言うだろあれだ。仏像なんかは出荷前に坊さんがそういう御霊を入れるために儀式的な行いをする場合もある。無論、本物の魂など込めないがな」

「なるほど。この女は『本物』の御霊の入った人形を作ろうとしていたってわけね」

桜沢は少し、いつもとは違う真面目っぽい声質だった。表情から嫌悪感から滲み出ている。

「普通は禁術の部類入る術だが。特に今のご時世に普通なら論外だけれどその辺はどうなの香月さん」

「どうも何も私もそう思ったけど昔のよしみで断り切れなかったのよ。こっち来てから色々、世話になっっている人で……」

「ちよつといいっすか。無駄かもしれないっけど一応。あんた人の命を」

「あーうるさいなあ」

水上の言葉を遮り、さらに悪態をつく。どうやら地雷質問だったらしい。

「そういうなんか道徳的な偽善臭いセリフ、虫酸が走るな。一応、答えるけど命がどうたらとかいう説教はなしね。人、一人の命より完成された人形の方が価値は上、それが香月の思想。まあ私も特に『香月』の名に誇りがあるわけでもないから香月がどうこうとは言わないけど六十億もいるんだから一人ぐらいいいでしょ？　って痛い！　痛いって」

水上がねじ上げてすでに完全に極まっている手首をさらに捻る。

「神馬さん、こいつ殴っていいですか」

変わった人達とは思っていたがこの辺の価値観は意外と普通なんだな。とちよつと驚く。

「そう興奮するな。人形師つかというか職人タイプの人間ならまあそういう極端な価値観の人も珍しくないんだ。育った環境そのものが特殊なケースが大体起因している事が多いな」

「それでもなんかムカつくっす」

「我慢だよ。我慢。殴ったところでどうにもならん、お互いな。さて、そろそろ行くとするかな。おい、お前も今のご時世こういう事をする目立つんだ。ほどほどにしておけよ」

神馬さんはそう言いながら立ち上がる。

随分と軽い注意だ。もう少しなんらかのペナルティがあると思っただけだが変な所で寛容な人だな。

「はっ分かってますって。私もそこまでバカじゃないわ。それに今回の件で確信を持った。このやり方では昔ならいざ知らず、現代では完成させることは不可能に近いってことがね」

「今回の件がむしろ例外って事か。今の子は確かにそこまでひとつの物に執着はしないかもね」

「そゆこと。現に私の製作した十三体の内であれが最後だったけど……正直、少々残念よ」

香月は寂しそうな表情を浮かべる。この世にあの人形生み出した親としての心情といったところか。よく分からんが。

「まあいいか。水上、じゃあ帰るから落として」

「分かりました」

香月の表情が一瞬、硬直すると同時に水上の腕が香月の首に巻き付く。所謂『裸絞め』の状態だ。

一体、何を……

そう考える間もなく水上は腕に軽く力を込め、香月の意識を虚空の彼方へ消し去った。

「帰り際に逆襲されちゃたまらないからな。用心だよ。用心」

俺の思考を読んでか、玄関へ向かうすれ違い際に神馬さんは言い訳っぽくそう呟いた。こいつら怖えなと思いつつもその行動は正解のような気もするから心境的には微妙だ。

テディベアと終焉のエリア 其の六

比較的、厄介な事にならず帰路につけたのはまあ上々とすべきか。ていうか寝たい。携帯電話で時間を確認すれば、その疲労感も一層深まる。明日の授業は……もうあきらめよう。

車内にも疲労が空気に混じり漂っている、なんとなくそんな気がする。

「神馬さん、神馬さんはあの女、もうあーゆう事本当にしないと信じているんですか？」

どうやらうちの部長殿は今回の沙汰にご不満のようだ。終始無言の森先輩はともかく、水上は室内での件からも桜沢、似た心情だろう。

「おそろくだがやめないだろうねえ。奴はあんなナリをしてはいるが根っこは生粋の職人だ。あいつは多分、本物の御霊人形を作ろうとしているのさ。市松人形じゃ今時、売れないだろうしそんなに愛でももらえないだろうからな。そこで考えた結果、今回テディベアの件なるわけだが、それもあまりうまくいかず。おそろく隣の和室、おそらく工房かなんかだろうが既に次の試作っぽいのが転がっていたよ」

「いいんすか」

「正義の味方じゃないからな。依頼の件が達成出来れば私としては問題ないよ。個人的に気に入らないっていうならどうぞご自由にだ。なんならここで降ろそうか？」

「いえ……それはちよつと……」

黙り込む水上。

なるほど、これが神馬 赤月なる人物の思想か。なかなか、興味深いと思うと同時に人による考え方の違いに少し考えさせられる。

「しかし、先程、神馬さんと香月の会話では現代人はそこまで人形を大切にしないと行ってましたけどそれは今回とは別の『愛される』

人形なんですか？」

「そりあな、まあ。愛する人形と別称されるくらいの代物だ。そりや滅茶苦茶、愛されるだろう」

なぜかにやけ顔でそう答える神馬さんの表情からすぐピンと来た。なんとなく分かってきた。出来ればその話は止めて欲しい。絶対なんか気まづくなる。

神馬さんはおそらく分かっていると言っているのだろう口調は真面目だが口元がにやけている。

「それは……」

「そう所謂、ダッチワイフってやつだ。あれなら確かに愛される。しかも上等なやつだど六十万とかするし、商売としてもおいしいだろうよ」

「なあ要、ダッチワイフって何？」

場が凍りつくっていうかお前は東先輩になんていう事を聞くんだった。神馬さんは運転席で笑いを堪えるのに必死といった感じで体を震わせている。

東先輩は少し考えた末、周りを気にしながら桜沢の耳元で何やら囁く。

どんな説明かはまあ大体、予想はつき、予想通りに桜沢は顔をみるみる赤らめながら、こちらを少し蔑視し、そのまま黙り込んだ。俺は関係ないだろうが。

だが不覚にもその恥ずかしがっている桜沢を少し可愛いと思えた。

テディベアと終焉のアリア 其の六（後書き）

どうもここまで読んで下さって本当にありがとうございます。

実際書いていても思ったのですが結構、地味な話になってしまったのが今回の反省点かなと思っています。大体の流れとオチだけ決めていたのですが戦闘っぽいシーンを入れ損なってしまいおとなしい感じに。次回はもう少し戦闘シーンを増やそうとは思っています。感想または何か指摘事項がありましたらまた教えていただければ幸いです。今後ともよろしくお願いします。

闇の香りはリンスと共に 其の一

日が経つ事に暑さは増し、体感的にはもう夏の本格的到来を宣言しても問題ない感じだ。登下校の時間が比較的気温の低い時間帯ではあるとはいえやはり徒歩という行動による体温の上昇と発汗は毎年の事ながらうんざりする。

そんな事を頭に過ぎらせ、同じ部活仲間である水上 冬馬と帰路についているところだ。こいつとはそろそろ知り合って一月くらい経つが相変わらずよく分からない奴で、まあよく分からないという意味では神馬さん含めて他の部員も同様だが、そういう観点で考えれば、水上はまだまともな部類に入る人間ではある。我が民俗学研究会の『戦闘』担当でクールなイメージを受ける。中学時代はここいら一帯に悪名轟かす……

「しかし、部活ってのはこういうものなのかね」

なぜかは自分でもよく分からなかったけどとりあえず話してみたくなった。

「なんの話だ」

「うちの部活だよ。今日も適当に集まって、料理食って、喋って終わりだぜ？何部だっていう話。そう思わね？」

水上は視線を前に向けたまま、少し考え込む。

「うーん……けどあれだ、うちの部は波風が立つ時ってのはそれこそ嵐の如くだろ？ 普段のあの緩い空気はむしろバランス取れてるんじゃないか」

「まあ……そう言われる確かに……」

なんか妙に納得してしまう。しかし、それだと今の状態は何か大きな災厄が起ころ前触れという話になるわけだが考えただけで鬱になりそうだ。全く出来ればそういう事は避けたいのだが、部長である桜沢がトラブルを招くどころか自ら突っ込んで行くような奴だ。そう望むのははっきり無駄だという事を最近理解した。

そして……

目の前に少女が立っている。年齢は中学生だろうか、制服を着てはいるがこの辺りでは見ないタイプの制服だ。しかし、その制服は何故かかなりボロボロでしかも汚れている本人も顔や腕の露出している部分には擦り傷が少々。その茶髪の少女は俺達と目が逢うところへ近づきこう言った。

「お願い、助けて……」

そして厄介事は放って置いてでも向こうからやってくる。面倒な、全く。

俺は水上の方を見、反応を伺う。

水上はこちらを少し視線を走らせ、すぐに少女へ戻す。

「何があったか、説明してくださいますか。俺らでなんとかなりそうな話でしたらなんとかしますけど」

「水上!!」

なんの躊躇もなく目の前のおそらく厄介事になるであろう少女の助けを求める手を即座に取らんとするその快諾に俺は思わず声を上げる。

「しょうがないだろう、この状況、無下に無視するわけにはいかな
いだろう？」

「そうだけど……」

分かってはいる。人として、無視するわけにはいかない場面では分かってはいるがなぜ、こいつは、いやこいつも、厄介事になると予測しうる救いを求める手をこうも迷いもなく取れるのか。俺にはどうしても分からなかった。

「しばらく、どちらかの家に泊めて欲しいんだけど、ダメかな」

詳しい事情を聞くため、近くの自販機横のベンチで話を聞く事になったのだがその少女が発した第一声がこれである。少し拍子抜けというか、もっとややこしい事態を想定していたため内心、ホッと

する。

ただの家出少女か。厄介事ではあるが命に関わらないだけまだましというものだ。衣服の汚れからてっきり何かから逃げているのかと思っていたのだが、汚れに関しては後でさりげなく聞いてみるか

「水上、うちの部ってそういう依頼も受けるのか」

「いや、微妙だな。厄介事や揉め事で霊関係以外でも依頼を引き受ける例は今までもあったが結局のところ、桜沢先輩や神馬さんのサジ加減ひとつだからな。断る事もままあった」

「じゃあとりあえずどっかに電話するしかないんじゃないか」

「まあそうなんだが、あの二人、あんまり出ないんだよなあ。メールも返信来ないし」

水上はそう呟きながら携帯電話をポケットから取り出し、ボタンを押し始める。

そういえば以前も放課後に連絡取ろうとしたけど出なかったか。しばらく少女と共に水上の連絡を取る様子を観察していたが表情と様子からやはり全く出ないようだ。全く、なんのため携帯電話なんだか。

「ダメだ。全然、出ない」

「もう、お前の家に泊めてやったら、それこそここで『じゃあ、ダメです。ごめんなさい』ってわけにもいかないだろう？俺、実家だし」

「いや、俺もだよ。親になんて説明するんだ」

「俺の彼女ですでいいんじゃないか。うん、それで万事解決だよ」

「何も解決してないし、彼女に失礼だ！」

珍しく、少し感情の入った口調とわずかな顔の紅潮を見ると吹きそうになってしまった。そこまでクールに徹しているわけでもないのか。少女の方は少し困ったような表情と共になるべく視線を合わせないようにしている。照れかな。ぶっちゃけ発端である水上に押しつけてみたいような気もするがあんまり揉めても彼女も気まずいだろうし、とっとと次善の手を提案するか。

「じゃあ仕方がない。うちの部室に泊まってもらうしかないんじゃないか。幸いあそこには布団も食い物もある」

「それしかなさそうだな」

水上もどうやら同じ事を考えていたみたいだ。まあそれしかないしな。

水上は少女に歩み寄り、部室に泊める旨を伝える。

「一応、うちの学校内なんで部外者あんた一人であってわけにはいかないから俺達も一緒に事になるけどその辺を了承してもらえればって話だけどうかな」

っていうか俺もかよ。面倒くさいなあ。少女の容姿から考えればアリだけどな。などつい内心思ってしまった。ああ、我ながらなんと俗な。

「ええっ、それでいいわ。二人にこの相談を持ちかけた時点でその辺は仕方がない事だし、むしろ全然オッケーよ」

もう少し、警戒していただきたいものなんだけど、最近は俺が知らないだけで皆こうなのだろうか。

「じゃあそういう事で。私は下灘 百合、どうぞよろしく、おふたりさん♪」

こうして俺達はさっきまで歩いていた道を再び戻る。

俺の中では初の女子とのお泊まりにうきうきする自分と何か不安な感じを覚える自分とが複雑に絡み合い、今、俺自身がどういう気持ちなのかよく分からないままただ歩み続けた。

闇の香りはリンスと共に 其の二

かなり暗くなってきた。いつも通っているはずの部室までの道程が異常に不気味に感じるのは学校という空間のせいか、それともここが旧校舎だからだろうか。

「水上、うちって人、泊められるような客間的なものがあるのか」「そんなものはない。布団と寝袋はあるからなんとかなるだろう」相変わらず冷静な事だ。家出少女を匿うとかどんな部活だよ。

ダメ元で神馬さんと桜沢に連絡をとろうとするもやはり出てくれない。明日会ったらこの件に関してはマジでなんとかしよう。今後、これが致命傷になる予感がする。

「あの、あまり気を使わないでいいよ。私は私なりに覚悟を持ってあなたたちにお世話になっているわけだし、少しくらいのエッチな事、私は全然我慢するよ?」

一瞬にして気まずい空気が一帯に流れる。何言ってるんですかこの人は。

「まあなるべくそうならないようにはするつもりだけど。ここでお前に手を出したらなんか、傷になるような気がするからな」

「そういう風にカッコつけながらも下半身に抗えないのが男でしょ?」

「おっさんかお前は。どう思おうが勝手だがな。とりあえず手は出すつもりはないから」

面倒くせえ。っていうかこいつ、今まで『そういう事』をしていたという事なのだろうか。

部室に到着。中に入ると各々の荷物を置き、水上は当然の如くエプロンを付け始める。

「あり合わせで飯を今から作るがその間シャワーでも浴びてくればいい。お前ドロドロだろ。風呂のセットは確か押し入れにあったと思うからそれ使ってくれ」

なぜそんなものまである。寝袋といい、普段から完全にここで泊まる気満々じゃねーか。

「シャワーとかあんのか」

「一階にな。主に運動部が使うものなんだけど今はあんまり使われてないやつがな」

いかにも怪しいつか大丈夫かよ、それ。

ただ、確かに女子にその状態で風呂無しでっていうのも酷な話なので水上の言っていたお風呂セットなるものを探す。しかし、どこを探してもそれらしき物は影も形もない。

「おい、水上。風呂セットないぞ」

「ん？ おかしいなあ。いつも開けたところにあるはずなんだけど……ないんだったら、そうだな。悪いけどバスタオルだけでも近所のコンビニに」

「コンビニにバスタオルとか売ってたっけ？」

「さあ？」

「殺すぞ」

「いいよ、いいよ。なんか悪いし一日くらい我慢するよ」

一日くらいってこいつやっぱり結構長めの滞在期間をご所望なのだろうか。なぜか自然とため息が出た。

「トイレはどこに」

台所にあったあり合わせの材料を使い、水上はとりあえず炒飯とスープを作った。相変わらず顔に似合わず旨いモノを作る男だと改めて感心しつつ食べ終わり一服していた時、彼女はそう呟きながらゆっくり立ち上がった。

「そこを出て直進すればあるよ」

意識はしていないのだが妙に気恥ずかしい感じが脳を過ぎる。まあそれは向こうも同感らしく少し、恥ずかしそうな表情と共に足早に部屋の外へ出る。水上は台所で洗い物をしている。

「さてと、水上、あの子、どうする気だ？」

「どうするもない。一晩は泊めるが後は神馬さんに相談して、そこ

からどうするって話だろうな。多分だがここに泊め続ける事を良しとは言わないだろうさ。そうすれば自動的に後の彼女の処遇は大人達に委ねられる。俺達がそこまで深刻に考える事じゃないよ」

洗い物の音を室内に響かせ、水上は冷静に言い放つ。

「そりゃそうか」

冷静に考えれば、学校内でいつまでも家出少女を匿っておけるはずがないか。

「ただ……」

そう静かに呟き、水上は洗い物をしていた手を止める。静寂と共に不安の入り混じった空気が部屋を満たす。

「ただ、なんだよ」

「あの女、どこかで……」

「きゃー」

突如、廊下の方から聞こえた、突き刺さるような悲鳴。

次の瞬間には水上は台所から飛び出し、部屋の戸を開ける。考える暇もなくつられる形で水上と共に部屋から出る。

俺らが廊下に出ると同時に女子トイレから現れた人影。下灘であつてくれと願ったがその願いはすぐに却下され、現れたのは人ですらない異形の者だった。

見た感じはパッ見、人だ。季節はずれのロングコートその下にはセーター、長い黒髪はその黒さになぜか吐き気を覚える。しかし、決定的に俺達とは違う部分がある。

左腕だ。それは当然、人のそれとはかけ離れていて、いや、多分俺の知っているどの生物にもあんな腕はない。二〜三倍はあると思われるその異常な太さに加え、地に擦りそうな程の長さ、その三分の一を占める極厚の刃のような爪からは血が滴っている。下灘のか？女(?)はただ静かに笑みを浮かべ、こちらに体を向ける。

「最悪だ。最悪。最悪だ。最悪だ」

俺は冷静さを失いつつ、ただそう呟き続けるしかなかった。

闇の香りはリンスと共に 其の三

逃げるべきだろう。普通に考えればあんなもの相手にするわけがない。ましてや神馬さんや桜沢がいらないこの状況での異形との遭遇、最悪の展開だ。

足が震える、油のような汗が全身を覆うのを感じる。すぐ左にある部屋の戸に視線を走らせる。

（あの女はどうする？）

思考は逃亡一択なのに対してわずかな良心が俺の中で葛藤をし始める。

（どうすれば……助ける？無理だ。このまま逃げる？けど、それは）不意に肩に手を置かれ、我に返る。

「落ち着け」

水上はこんな状況にも関わらず冷静に俺にそう声をかけ、ゆつくりと前へ歩を進めていく。だがさすがにいつものクール表情にやや険しさが感じられる。

「一応はやってみる。それでも戦闘担当だからな。とりあえず神馬さんには連絡し続けろ。そして状況を見て、ダメそうだったらお前、一人でも逃げろ。いいな」

そう言いながら水上は近くにあった掃除用具入れのロッカーを開ける。中からなぜか箒の柄だけ、しかも先端が鋭利に加工され、槍のような形状をしている。明らかに本来の目的とは違う代物だ。

「なんだ？ それ」

「こういう事もあるとかと暇な時に作っておいたんだ。ああいうのに効くかは分からないけど素手よりはマシだ」

水上は箒の柄を槍のように持ち、構える。というかこいつ、なんだかんだで結構、やる気満々なのは気のせいだろうか。

今逃げたいのが本音だがそうもいかないよなあ。そういう風に思

考を巡らせつつ、無駄と薄々、分かりつつも神馬さんに電話を掛ける。

その異形は 水上の構えを確認し、一瞬だけ動きを止めるもの、すぐにこちらへ悠然と歩いてくる。

それに対しての水上はいきなり構えを解き、やり投げの競技のように右手で箒の柄を大きく振りかぶり、その異形に向かって投擲。軽いはずの箒の柄に重量感を感じさせる速度で異形へ向かう一撃。

しかし、異形はそんな意表を突く攻撃に臆する雰囲気も微塵も出さずにその豪腕を右方向に薙ぐ。箒の柄はまるでポッキーのように驚くほど軽い音を立てて、砕け散る。やはりあの左腕、当たれば死亡確定だな、あれは。

しかし、そう思った刹那、俺の視界に水上の姿は消え、驚きと同時に瞬きをした次の瞬間、異形の懐といえる位置にその姿を認識。何が起こったのか理解しようとするが水上の行動の速度がそれを許さない。

左から繰り出される水上のフックは無防備な異形の右頬にめり込む。夜の静かな校舎に気分が悪くなるような鈍い音が響く。さらに水上ほとんど間を置かずに右手でアップercutを先程の音の終わりに際にさらに音を重ねる。

格闘技をテレビでたまに見るがあんなのまともに食らった場合、確実にKO必至のはずだ。現に異形のモノもさすがにのけぞっている。だが水上は完璧主義者らしく、さらに体を一回転させたと思うと左の回転上段回し蹴りが異形の頭を削ぐような速度で容赦なく蹴り抜く。

異形の頭は廊下の窓をブチ抜き、ガラスが砕け散り、辺りに散乱する。

その怒濤の連撃に俺は思わずこれは終わったんじゃないかと安堵した。

急に水上の体が一瞬、硬直したかと思うと大きくバックステップで後退し、再び大きく間合いをとる。

異形の者はとうとうまるで何もなかったかのようにゆっくりと体勢を整え、立ち上がると再び悠然とこちらへ前進してくる。

あれだけの打撃をモロに食らって平然としているところを見ると今さらながらこいつは人ならざる者だと実感する。

水上の方へ視線を移すと脇腹に黒い染みのようなものが出来ているのに気付く。

「水上、それ……」

「大丈夫だ。掠っただけだ。しかし、参ったな、クソ！」

異形の者の方へ目をやるとその右手にはナイフのような物が握られている。おそらく連撃の終わり際の隙をついたといったところか。さすがの水上にも少し、焦りが見える。こちらの攻撃が全く効かないと判明したわけだから当然といえば、当然の反応だ。普通ならどう考えても逃げるべきだが状況がそれを許さないという面倒な場面、確かに参った。

攻撃が効かない以上倒すのは不可能。あと考えられる手はさっきと同じような方法で間合いを詰め、攻撃はせずにすり抜け、女子トイレで倒れていると思われる下灘を連れ、逃亡するくらいか。

そんな考えを口に出そうとしたその時、微かな風と共にリンスのような香りが鼻をくすぐると同時に目の前に全く想定外の人物が現れる。我が部の部長、桜沢潤だ。

一瞬、誰だと思ったがそれも当然の話だ。服装はなぜか浴衣、しかもその腕に抱いているのは洗面器に入っているのはいわゆるお風呂セット、まるで銭湯帰りである。普段の制服姿とはあまりにも違いすぎる格好に若干、混乱する。

そんな突然、現れた桜沢がこちらを見て発した第一声は

「なんであんたたちがこんな時間にこんな所にいるのよ」

こっちの台詞だと突っ込んもうとした瞬間、水上がとっさに桜沢の声に反応しこちらへ振り向く。ほぼ同時だろうか、異形の者はその隙を逃さなかった。気が付いた時にはその豪腕は水上を捕らえ、水上は次の瞬間、視界から消える。鈍い音と共に教室の戸に叩きつ

けられ、その戸と一緒に教室の中へ。机や椅子やらがぶつかり合う音と同時に轟音が響き、教室から煙のような埃が舞う。

「水上！」

叫んではみたものの、どうすればいいのか最早、判断もつかず、ただまた冷静さが失われていくのがなんとなく分かり、辺りがスロ―モーションになったように感じた。俺は万が一の時のために握りしめていた、護符で作った簡易対霊ナツクルを振り上げ叫びながら、わけも分らず体重を前へと移動させる。

しかし、桜沢の行動はそんな命の惜しさや恐怖と混乱が混じった俺の動きよりも迷いがなくそして速かった。

俺の襟首を掴むと同時に部室の扉を開けるとそのまま俺を引っ張り、入室し、畳に勢いのまま転がす。そしてすぐに戸を閉めると懷から何か札を取り出し戸に貼り付ける。すぐに凄まじい衝撃と音が室内に響く。ハンマーか何かを戸に叩きつけるようなそんな感じの衝撃が断続的に戸を叩く。おそらく本来ならばさっきの水上がぶち込まれた教室同様、一撃でオシヤカになっていただろう。となるとやはりこうして保っているところを見るよりはり今、桜沢の貼った札のご加護といったところか。普段はむかく女だがさすが今回は仏様に見えた。

闇の香りはリンスと共に 其の四

「なんでここにいる」

部室に避難し、俺と桜沢の第一声がはもり部室内に響く。わずかな沈黙の後、再び桜沢が喋り始める。

「まあいろいろ聞きたいことがあるのは分かるけど状況から考えてどういう状況かの説明が先じゃない？」

「確かに」

部室の戸が外にいる異形なる者が凄まじい打撃音共にノックをしてくる

確かに現状を考えれば、桜沢がなぜここにいるのかなどは些事だ。そして今、俺達が置かれている状態とここに至る経緯を簡単に説明するが室内に響く強烈な衝撃音に徐々に失われていくせいか、説明にやや手惑ってしまった。どうも俺はちょっとテンパっているらしい。

桜沢は俺とは違いまるで扉の結界が破られない確信があるのか至って冷静だ。聞き終わった後に少し、黙ったまま考え込む。そしてすぐに立ち上がり押し入れの中でなにやらごそごそし始める。

「全く、面倒なモノを呼び込んだものね」

「あれは一体、なんなんだよ」

「さあ？物理的に殴れるって事は憑依体である可能性が高いけど話だけじゃなんとも」

「倒すことは？」

「それも現時点の情報だけじゃ微妙ね。神馬さんには一応、メールは送ったけど最悪の場合、逃げるっていう選択肢も考慮しないんだけどそこそこいい結界を張ったからまあそんな心配しなくてもいいわよ」

なにやら押し入れの奥から狙撃銃のようなものが出てきた。以前、あの豹憑きを狙撃したあれか？

「けど、依頼人の少女や水上については？」

「依頼人は知らないけど、水上はあの程度で死んだりはないよ」銃を持ちながら立ち上がり、ダーツを装填、心地よい金属音をさせる。

「そうだろ？ 水上」

「もちろんっすよ」

急に外の窓が開き、そっちの方からいきなり水上の声が聞こえ、思わず身構える。

そこには水上が頭に手を当てながら窓から入ろうとしていた。少し、頭から出血しているようだが目立った外傷はないようだ。おかしいだろ、普通に考えて。あの異形の者の腕から繰り出されていた一撃、まるでハンマーのようだった。無事に済むとは考えづらいのだが……

「水上、大丈夫なのか？ 思いっきり入っていたように見えたけど」
「なんとかな。とっさに衝撃の逃げる方向に飛んだからなんとかダメージは最小限に押さえた」

衝撃を逃す方向に飛ぶ？ 何者だよお前。

「さて、こうなってしまった以上、揉め事は解決するのが私達の部活だ。じゃあ作戦を今から言うわ。いいわね」

さて第二幕の開演といったところか。ブザーの代わりに溜息が出た。

まあ作戦とは言っても内容は至ってシンプル。水上が再度、あの異形の者の囷となり、その隙に俺と桜沢が窓の外を伝って、依頼人の救出に向かい尚かつあれを使役している術者の搜索するという内容だ。もう一度、あんな化け物と闘わされるとかさすがにあんまりだと思ふ。

「おい、水上、本当にいいのかよ」

「仕方がないだろう。どちらにせよ誰かがやらないといけない事だ。依頼人をこのままにしておくわけにはいかないだろう？」

「そりゃあそうだけど……」

相手はこっちの攻撃が全く通じない、それに対しての水上は生身の人間だ。ダメージを受ければ、疲労も蓄積する。しかも、敵の攻撃は一撃、一撃が必殺の威力を持っているとなれば、どう考えても酷な采配だ。

「樋口の言いたい事は分かるわ。だから、水上、これを使って」

そう言いながら桜沢は水上になにやら投げる。

それはどうやらメリケンサックのようだったそしてそれにはなにやら文字を書いた紙のようなものが隙間なく巻かれている。

なるほど以前、俺がやった札を拳に巻いて殴ったあれの實用版ってどこか。確かにあれならダメージを与えられるかも。

「それならある程度の霊撃戦闘が可能なはずよ。ただ無理はしないでね、駄目だと思ったら時間稼ぎに徹して。あくまで命優先を分かっているわね」

「了解。よし、それじゃあもう一働きといきますか」

水上はいつの間にか静かになっている戸の近くまで行く。

『なにを?』と俺が思うよりも速く水上の鋭い前蹴りが戸を蹴破る。それとほぼ同時にまるで衝撃波のような一撃が頭上から振り下ろされ、風圧が室内を駆ける。戸は凄まじい音と共にバラバラに破碎する。どうやらあの異形がこちらが出てくるのを見計らっていたらしい。しかし、水上もそれを読んでいて、完全回避に成功し、さらに反撃に転じる。脅威的な一撃ではあるが当然、その威力に比例し、隙も大きくなる。水上は当然、そこを見逃さない。

大きめに一步、室外に踏み出し、体を四分の一回転程捻る。部屋からちやうど半身出すと同時に先程のメリケンサックを嵌めた、右拳が異形の者の顎を捉える。戦闘開始といったところか。

「死ぬなよ」

おれはそう呟き、そして祈った。

闇の香りはリンスと共に 其の五

「さあ、こつちも行動するわよ」

桜沢はそう言いながら銃を肩に引っさげ、窓を開ける。水上が囁になっっている間に窓の外を伝って依頼人 下灘 百合が倒れている（と思われる）女子トイレへ救出に向かうという作戦なのだが。

「桜沢、そんな格好で行くのか？」

明らかに機動性に難のありそうな浴衣を着たまま、外に出ようとするのを見て思わず声を掛ける。

「仕方がないでしょ。時間ないんだし、着替えも下に置いてきたままなんだから」

「ええっと、さっき思ってたんだけど、お前まさかここに住んでる？」

「そんなわけないでしょ！ さっさと行くわよ」

なぜか少し恥ずかしそうな表情と感情をごまかすようにそう言いながら窓の外にあるわずかな幅の足場に降りる。

二階とはいえさすがにちよつと抵抗があるが、向こう側では水上が必死に闘っているのだから躊躇してはいられない。桜沢のすぐ近くに降りると夏場特有の生温い風が桜沢のリンスの香りを運び、鼻孔をくすぐる。

「行くわよ」

そう言いながら、桜沢はゆつくりと前進し始める。トイレはさつき水上がぶち込まれた教室の隣だから距離的にはそんなにないはずだが……妙に距離を感じる。足幅が狭いせいかな、それともこの特殊な状況のせいかな。

教室の外にさしかかると一カ所、窓が開いている。おそらく水上はあそこから出たのだろう。教室の中をなんとなく見るがある意味予想通りの光景が広がっていた。一言でいうと台風一過っ感じか。机と椅子が入り乱れ、まるで知恵の輪のように難解に絡まっているように見える。水上の食らった一撃がいかに凄まじかったかをもの

語っている。

「マジかよ」

思わず呟いてしまう。

とりあえずトイレの直前の所までは到着する。桜沢が急にしゃがむと俺に対して手を使って、しゃがめとジェスチャーするので指示通りしゃがむ。桜沢はそのまま、さらに前進し、ちょうど窓のすぐ下の位置で再び止まる。俺もそれに倣い桜沢のすぐ隣に移動する。

桜沢は上を指し、俺の眼をジッと見つめ、無言の指示。どうやら俺に見ろと言っているらしい。嫌なのは間違いないが反論している場合じゃない事は重々、承知しているつもりだ。まあそれ以前におそらく拒否権すらないだろうけど。少しだけ間を置き、潔くあきらめる。ただ、自然とため息が出た。

腰をゆっくりと上げ、不安と恐怖でパニックになりそうな感情を抑えつつ、目の前の光景を渾身の眼力で直視する。

視界に映る光景がどんなものであれ、恐らく俺はびびっただろう。仮に何もなかったとしてもだ。ただ、今、俺の瞳に映っている光景から考えて、俺はどう反応すべきなのだろう。分からない。ただ自分の心臓の鼓動が妙に全身に響くような感覚を覚え自分の心臓の存在をなぜか、今、あらためて実感している。

彼女は一体、何をしているんだ。

そこにいたのは確かに下灘 百合、本人に間違いない。ただ状況が奇異だ。

彼女は窓とトイレの入り口のちょうど中間にあたるぐらいの場所であぐまっていた。なぜか彼女の前にはスケッチブックのようなものが開かれており、そこに右手を置いている。そしてそこから出ている思われるドス黒い花のような模様、あれは血か？息を飲む光景ではあるが依頼人が生きているのは何よりではある。ただそれ以上に衝撃的な仮説が俺の頭に過ぎる。

まさかこいつが……そう考えた刹那、下灘の狂気を孕んだ顔がこちらへ向く。振り乱した髪、憔悴したような雰囲気ついさっき会

った時とはまるで別人だ。まずい、気付かれたか。

下灘はこちらに手をかざし、狂気表情をさらに苦痛で歪めさせながら何かを叫ぶ。

信じられない、正確には信じたくなかったが正しいか。彼女が手をかざしたすぐ先にさつき、俺達の前に現れた剛腕の異形が出現した。

最悪の状況だ。おそらく奴は窓ごと俺を薙ぐつもりだろう。先程から見せられているあの豪腕の威力なら窓越しという点を加味しても充分過ぎる上に釣りが来るだろう。なんとか初撃だけでも避けなければ、しかし、相手こちらにその手段を考える時間すら与えてはくれない。

軽く前へステップするとその強大な腕を上へと振り上げる。

「どうしたの。何があったの？ ねえ」

そう言いながら、桜沢が俺と同じ位置に視線を上げようとしている。

それどころではない。とにかく俺も桜沢もこの一撃を食らうわけにはいかない。そう考えている間にも異形の一撃は死神の鎌を彷彿とさせる軌道を描きこちらへ来る。

「避ける！」

俺はとっさに横にいる桜沢の肩をなるべく加減して蹴飛ばしつつ、俺もその反対側へ避ける。その行動のすぐ後に強烈な破碎音が鼓膜を貫く。窓ガラス及びその他の破片が辺りに散らばり、俺の体にもそれらがいくつか当たる。その異形なる豪腕は窓はもちろんのことで、その下にある壁すらも全体の三分の一程が完全に変形しているのを見て、本当に冗談にならない威力だと改めて実感する。

「桜沢、大丈夫か？」

多分、落ちてはいないと思うけど、とっさとは言え、あれはちょっとまずいかったかな？ いろんな意味で、と今さら少し反省する。「なんとかね。それよりお前、口で言ってよ、さすがに少し焦ったわよ」

「すまん、ちょっと色々と後手に回っちまって」

「一体、何があったの。あいつは今、水上が相手しているはずじゃ、まさか」

「いや、まだ水上はやられていない。このトイレの中には依頼人下灘 百合がいて彼女が異形なるモノを召喚し、こっちに攻撃を」
「つまり、この件、最初全て、その女が元凶というわけね。厄介なモノ連れ込んで全くだ。」

桜沢、あきらかたような物腰でそう言いながら立ち上がる。異形から放たれた先程の初撃から全く音沙汰がないのが少々、気になる。なぜだ。

「とにかくここじゃ不利だから一旦、建物の中に入るわよ。樋口はそっちから入って、私はここから入るから」

桜沢はそう言うのとすぐ隣の男子トイレの窓からなんの躊躇もなく入る。女子なんだから少しくらいそういう仕草があってもいいと思うのだが、そんな状況でもないか。

そう思いながら俺も少し遅れて先程、通った水上がブチ込まれた教室へ入る。

そう言えばこの件が始まってひとりになるのは初めてだな。そう思うとたまらなくなんか怖くなってきた。とりあえず早く桜沢と合流しないと。

そんな事を考えながら、俺は出口である戸に向かう。相変わらずの荒廃した教室内を一瞥し、戸の前に到着し、少しでも戸を開け外の様子を窺う。さっきみたい待ち伏せされていてはたまらないからな。

特に何も無いようだと思えば、戸を開けようとした瞬間、軽快な足音と共に何者かが俺の目の前を走り去っていく。

あれは、水上じゃないか。

闇の香りはリンスと共に 其の六

目の前を走り抜けていった水上につられるように俺も戸を思い切り開け、廊下に出る。視界に水上の後ろ姿を捉えるがもの凄い勢いで遠のいていく。

「おい、水上！」

そう叫びながら、追いかけるも聞こえていないのか振り向きすらしない。一体どうなっている。水上はどこへ行く気だ。そもそも、あの異形なるモノはどうなった。様々な思考を巡らせながら走っていると先程、通り過ぎた教室の戸が開く音がし、思わず速度を緩め、振り向く。

「樋口、これはどういう事？　　というかどういう状況？」

さすがの桜沢もこの現状を把握出来ずにやや困惑気味に聞いてくる。

「俺もよく分からない。ただ、今、水上が走っていて」

そうこう言っているうちに水上は廊下を右に回り、渡り廊下へ姿を消す。

「とにかく後を追うしかないわね」

「そうだな」

そう言いながら、俺と桜沢は水上の後を追い、渡り廊下の前に辿り着く。水上が姿を消してからタイムラグは一分たらずくらいか。視界と体を渡り廊下の方向へ向ける。

渡り廊下では新校舎への入り口で血塗れのスケッチブックを持ち、しゃがみ込む下灘 百合。そして全長のほぼ中頃の位置で少し肩で息をしながらたたずむ水上。

状況から考えると水上がなんらかの方法でさっきの異形を倒し、その状況に窮した下灘はトイレから逃亡、それを見た水上が下灘を追跡した。しかし、とっさに入った渡り廊下だったが新校舎への扉は鍵が掛かっており、万事休すといったところか。

「水上、大丈夫だったか」

「ああ、なんとかな。それより……」

水上はわずかにこちらに視線を寄越すもまだ警戒しているらしく、下灘から眼を離さない。まあ当然の事ではあるが。

「桜沢先輩、どうします？この女」

さすがに浴衣なのに加え、銃まで持っているので速くは走れないらしく遅れてたった今、到着した桜沢の気配を察し、水上は問いかける。

「そうね。少しだけ話したいんだけどいいかな？」

それはどちらに言った言葉なのだろう。両者に言ったのか？

「ええっどうぞ。ただ気をつけてください。奴の眼、まだ生きています」

「……」

下灘は無言だった。息をするたびにしんどそうに大きく揺れる体から見て体力的にかなりきているように見える。

「分かってるって」

そう軽い感じで返事をし、ゆっくりとした足取りで水上のすぐ隣に立つ。

「下灘さんだったわよね。少し、話をしませんか」

問いかけに対して下灘はただ無言の返答を返すも桜沢は気にせず一方的に喋り始める。

「聞きたいことはいろいろと腐るほどあるんだけど今のあなたの状態から考えて、まともな受け答えしてもらえなさそうだから、詳しくは後日聞くとして、ひとつだけ」

聞きたいことが腐るほどあるっ点に関して言えば、お前も同様だけれどな。と俺は心の中で静かに呟く。

「わざわざ、こんなしょーもない男子二人を騙して、こんな所まで連れてこさせた上で召喚術なんてものまで使用しての襲撃。一体、あなたの目的はなんだったのかしら」

確かに。殺すことが目的ならわざわざ、こんな所まで来る必要が

ない。あれだけの化け物だ。水上は例外として、普通の人ならば俺も含めて秒殺出来る。また金銭目的ならば持ち金の知れている高校生など狙うはずがない。召喚の条件とかが関係しているとかか？

「ふっ…… 目的ねえ。そんな難しい話じゃないわよ。ただここが」
下灘はそう言いながら、驚く程の速い動作で先程から抱えていたスケッチブックを廊下に開いて置き、その上に再度、血塗れの手を乗せる。

「水上！！」

叫ぶよりも先に、下灘へ向かい弾丸のような加速する水上。桜沢も叫ぶと同時に銃を構える。俺はというと周囲急な温度変化に付いていけず、とりあえず下灘に向かい、水上の後を追う。

「楽園^{エデン}じゃなかっただけよ！！」

下灘はそう叫びながらこちらに向けて手をかざす。水上との距離を考えるとほんの少しだが彼女の召喚の方が速い。間に合わないか。
「なっ出ない？ なんで」

そう言い終わらない内に水上の容赦のない突き蹴りが下灘の右頬を捉え蹴り抜く。鈍く不快な音と共に蹴られた勢いのまま左頬を扉にぶつけ、引きずるように倒れ、そのままぴくりとも動かなくなつた。だが水上は倒れた下灘の腕を掴み、無理矢理、引っ張り上げようとしている。

「おい、水上。これ以上何をする気だよ」

「いや、手と足の骨を一、二本折っておこうと」

「もういいだろ。充分過ぎる」

「桜沢先輩がまだ敵だと認識しているならばそれは俺の敵だ。敵は徹底的に潰す。」

味方の俺にまで攻撃してきそうな鋭い視線をこちらへ向ける。いつもの冷静沈着な水上から想像も出来ない凶暴な雰囲気だ。一体どういう事だ？

「水上、そこまでやれば上等よ」

桜沢が軽い感じでいいタイミングで声を掛けてきた。ナイスだ桜

沢。

「これで充分よ」

（『これで』？）

そんな疑問が頭を過ぎるよりも速く、空気を排出するような音が周囲に響く。とっさに下灘の方へ視線を走らせると彼女の腹部に見覚えのある蛍光色のピンクのダーツが刺さっていた。

「これで少なくとも朝までは起きないはずだわ」

満面の笑顔の桜沢。

「お前も大概だな」

こうして、ラブコメ的な様相を呈していたはずがいつの間にかホラーになってしまった夜のクソ演劇もようやくフィナーレと言ったところか。いろいろと疑問は残るが今宵はただこの外に広がる深い闇を眺め、静かに幕を閉じるとしよう。ただなんとなくそう思った。

闇の香りはリンスと共に 其の七

「結局、あれは一体、なんだったんだ」

あの事件の翌日の放課後、いつも通り全員が部室に集合している。あの後、ほどなくして神馬さんが到着、拘束していた下灘 百合を連れ、どこかへと行ってしまった。俺達は結局、校舎に泊まる事なく、かなり時間的にはかなり遅くはあったがとりあえず帰路に着く事が出来た。まああんな校舎に泊まるなんて頼まれてもお断りだが。なぜか校舎にいた桜沢についてだがたまにだがあの校舎で泊まる事があるそうだが理由に関してはなにやら深い理由があるのかそれともないのか、ただ一言だけ。

「いいじゃない、別に。ただそういう気分だっただけよ。なんか文句ある」だ。

かなりのレベルで損壊してしまった校舎に関しては、さすがに一夜で修理は不可能なわけで、とりあえず放置していたのだが案の定、翌日生徒の間ではその話題で持ちきりになった。当事者としてはなんとなく微妙な話題ではあるがとりあえずは「まじで」とか言っておく。教師はあくまで何者かの悪戯と主張し、多くは語らなかった。雰囲気から推測すると何かを察していて敢えてそう発表しているようにも思えるがまあぶっちゃけ、よく分からない。

で本日、我々、民俗学研究部（仮）は神馬さん除いた全員が集合、事後報告会となったわけだ。

目の前にはいつも通り、水上の作った中華料理が湯気と共に食欲を刺激する旨そうな香りを放っている。ちなみに今日は天津飯だ。そして全員に行き渡ったところで俺は堪えきれずに先程の第一声を放つ。

桜沢はなぜかすぐには反応せず、よそわれた天津飯を美味しそうに口へ運び、じつくりと口の中で味を堪能しそして、飲み込む。

「まあ、一番、気になる所よね」

「一応とは言え、報告会って銘打っているんだ、神馬さんから何か聞いていないのか」

「要、お願い」

桜沢はそう一言発し、引き続き天津飯を食べる。森先輩の方に視線を送る。先輩は無言でうなずき目の前にあるノートパソコンのキーボードを叩き始める。

「今回の件、依頼者、下灘 百合についての情報ですが本名は野上加奈子。半年前、隣の県起きた一家惨殺事件、唯一の行方不明者です」

「ああ……あの事件の。どうりで」と水上が呟く。

「殺害された家族は皆、まるで巨大なハンマーのような物で殴られてような死体だったそうよ」

「それもあの女が？」

「でしょうね。動機に関しては詳細はよく分からないけど、うまくいったらこうはならないでしょうね。まあ遺体の状態や状況の異常性から警察の捜査も難航していたみたいだけど」

「ただ、彼女の家系にはその手の能力者が一切、存在しない事から突然変異タイプだと推測出来ます。しかし、彼女が扱っていた術はなぜか召喚系だった」

森先輩はキーボードを叩くのを止め、やや表情を曇らせる。

「おい、「なぜか」というのはどういう意味だ。何かおかしいのか？」

漂う空気になにか嫌な物を感じ、妙な緊張感を覚える。

「突然変異で霊的能力得た人間の能力ってのは特性的に単純なモノがほとんどなのよ。物質に火を点けるとか脚力や腕力が異常に強力になるとかね。それに対してあの女は『召喚術』という儀式系の能力を使っていた。これはある程度の知識が必要となり、それに関する文献のほとんどは消失、もしくは死蔵されていて一般人の目に付くことなどまずありえない」

「おい、それじゃあ、あれか、何者かが彼女にその『召喚術』を教えたっていう事か？」

桜沢は食べている途中にも関わらず、レンゲをちゃぶ台に強く、鋭く置き、わざと大きい音を出す。その音、そして視線から怒りを感じる。

「そう、もしかしたら、家族を殺すようにその女を巧く焚きつけた可能性すらあるわ。たまに、そういう輩がいるのよ。素養のある素人に術を教え、事件を起こそうとする奴がね」

「今回の術式はおそらく術者の血と魂魄を媒体として発動するタイプで生け贄や細かい儀式的な要素を省いた簡易版のようです。その分、術者の精神と肉体にかかる負担はかなりきついものようです。教えた奴も実験的に、悪く言えばモルモットとして彼女にこの術式を教えたかもしれません。神馬さん曰く非常に中途半端な術式だったとまあ今回はそのおかげで助かったというのもあります。発動にはかなりの集中力がいるみたいです。簡易式と言ってもかなり欠点だらけの術式だそうです」

最後の一撃の刹那、発動しなかったのはそのためか。

とはいえ最悪な話だ。この話、俺が考えていたよりはるかに深くややこしい話に思わず溜息が出る。

「彼女から事情聴取して、そのクソ野郎を捕まえる事っ出来ないんっすか」

「難しいでしょうね。多少情報は得られるとしてもその手の輩が足跡を残すとは考えにくいわ」

残念そうに目を伏せ、首を振る桜沢。

「最後に。これも気になっていただけ、結局、彼女の目的はなんだったんですか？」

「彼女の最後の言葉『樂園』^{エデン}。まあつまりは単に居場所が欲しかった。ただそれだけよ」

桜沢は少し、表情を緩め、ゆっくりとまた食事を再開し始める。

「いや、それだけじゃ今回の事件の引き金には……」

（「どうするもない。一晩は泊めるが後は神馬さんに相談して、終いだ。多分だがここに泊め続ける事を良しとは言わないだろうさ。そうすれば自動的に後の彼女の処遇は大人達に委ねられる。俺達の考えるこっちゃないよ」

「そりゃそうか」

「あれか……」

「どうやら思い当たる節があるようね」

俺はすぐに水上の方を見る。

どうやら水上も気付いたらしく、おそらく暑さのせいではない汗を掻き、その眉間には深々と皺が刻まれていた。そして急に立ち上がると鞆を持ち、部室から出るようとしている。

「水上！」

俺は思わず声を掛けてしまったが紡ぐべき言葉は全く浮かんでこない。

「水上。別に今回のお前の行動、間違っていないよ。私はお前が良識ある人間である事を知っている。おそらくお前は正しい選択をした。結果的には悪い方向へ行ってしまった。けどお前は私達を護り、そして命を賭けて闘った。それは事実であり、正しい。それは私が保証するし、誇りにも思うわ」

俺の代わり喋るように桜沢はまるでそれは水上を本心から誇りに思っている事を実感させるような、とても真っ直ぐな言葉だった。

「ありがとうございます。分かっています。ただ、今日は帰らせてください。すみません」

水上はそう言うのと部室から出ていった。

こうして、幕を降ろしたと思われた事件は思わぬ、黒幕の存在と共に自身の行動の選択の重要性を認識させた。何が正しかったのだろう。そして正解はあったのか。この胸に残った嫌なしこりはしばらく後に引きそうだと思いつながら俺は水上の出でいった後のわずかに開いた戸をしばらく眺めていた。

闇の香りはリンスと共に 其の七（後書き）

今まで書いた話の中では一番、アクションシーンが多い今回の話、どうだったでしょうか。その辺の意見や感想をいただけるととても参考になります。話の始まりや展開としてはやや、不自然かなと思ったり。まあ急に依頼が来るパターンが一回くらいあってもいいと思います、今回はそれに甘える形に。

そういう所も含めて意見や感想あらためてよろしくお願いします。
では

樹海は謳う 其の一（前書き）

新しい話のスタートというわけですがまあとりあえずよろしく願います。

樹海は謳う 其の一

六月の終盤という事もあるだろうがやはり暑い。俺はそんな事をぼんやり思い浮かべながら、今はただ歩く。ちよつと前までは色々な感情や思考を巡らせていたのだが現状の俺にそんな余裕はなく、ただ、息を乱しつつ、ついていくのがやっとだ。只今、俺は自称『民俗学研究部』のハイキングに参加している。

まあ、俺もバカじゃないのでこの部活で『ハイキング』に行くと言われればおそらくまた、厄介事に首を突っ込みに行くのだろう。そこまでは安易に予想出来た。そこはもう諦めている。だからある程度、覚悟はしていたし、ある程度の事では驚かないと心に決めていた。しかし、それでもやはり足りないのが我が部であり、実情である。常にこちらの想定の斜め上に行く。

まず、早朝、校門前に集合と言われ、行ったはいいがそこにあったのはいつも神馬さんが乗っているワゴン車ではなく。あきらかに『それ、廃車っすか』と突っ込みたくなるほどのボロボロのワゴン車が停まっております、違ってくれと祈る間もなく、車に背を預け、携帯をいじっている神馬さんの姿が眼に入る。一体なんなんだよ。

そしてほどなくして全員が集合し、車内に乗り込んだのはいいが見た目はこんなだけど中身はって事はなく、内装も最悪なわけで、シートはボロボロガソリン車特有の吐き気をもよおす車内臭。そして一度、走り始めれば、その乗り心地は地震体験マシンに乗せられているのではと錯覚を起こす程の揺れ。車に弱い人ならば十分で吐くような最凶仕様である。さすがにいつも神馬さんのやる事に文句を言わないうちの部の面々がクレームを言っているのだからやはりよっぽどなのだろう。

しかし、そんなクレームにも神馬さんは悪びれる様子もなくただ「いろいろ理由があるのよ」っと曖昧な感じでしか答えてくれない。どうみても廃車寸前の車検を通っているかも怪しい車だ。考えら

れるのは使い捨てにするとかだが、車を使って特攻でもする気だろうか。冗談っぽく考えるもこの人だったらやりかねないから怖い。面倒臭いなあ。

そんなこんなで一時間程の苦行タイムを終え、なんとか目的地っぽい所に到着、地獄の車内から解放され、みんなが少なからず安堵の表情を浮かべる。俺もそれは同じなのだがすぐに妙な疑問が浮かぶ。

現在、俺達のいる場所ははっきり言ってしまえば、ただの道路である。ハイキングコースらしい道はどこにもない。整備もなにもされていないそのまんまの木々が生い茂る森（これはもしかして話に聞く樹海というやつか？）しか辺りには見当たらない。

そんな疑問を余所に神馬さんは車の後ろから何やら荷物を降ろしている。その方向に視線を向け、一瞬眼を疑った。

そこにあつたのはリュックサックだった。当然、ただのリュックサックではなく驚くべきはそこでかさだ。リュックだけ見るならこれからエベレストにでも挑戦ですかと問いたくなるような大きさだ。

「なんですか？ それ」

「お前ら、男子は今からこれを背負って登ってもらう。、どうだ楽しいハイキングになりそうだろう？」

そう言う神馬さんは腰に手を当て、何故かドヤ顔だ。

「ジョークですよ」

無駄と分かっているがとりあえず言ってみる。

「悪いな。今回はちとややこしい事になる可能性があるのな、念には念をと思ったらこうなってしまった」

「日帰りっすよね。弁当でも入ってるんっすか？」

さすがにいつも黙っている水上ですら呆れ気味に皮肉を言う。

「そう言うな。いろいろあるのだよるここでは少々目立つ、詳細はハイキング中に追々説明するから」

なんだって言うんだ。クソッ。

悪態をつきながらリュックに手を掛ける。そして見た目通りの重

量感に絶望する。水上には申し訳ないがなんとか頼み、重い方をも
って貰う。どちらも重いが片方はちよつと洒落にならないくらい重
かった。一体、何が入っているんだ。

女性陣も各々の荷物を持ち、いよいよ楽しい、楽しいハイキング
のスタートとなったわけだが既にきついんだけど……

そしてもうひとつ気になるのが神馬さんと桜沢が肩から掛けてい
る細長いバッグ、桜沢のはいつもの麻酔銃、神馬さんの何か？この
二人の荷物を見ただけでもこれから起こる事が厄介事だという事が
容易に想像出来る。出来れば杞憂であって欲しいものだ。この荷物
も、あいつらの装備も。

苦行タイムを終え、安堵も束の間、お次は修験タイムとなり、こ
うして俺らの楽しい、楽しいハイキングは始まった。

木々が鬱蒼と生い茂り、まだ歩いて十分程度だというのに既に四
方が同じような風景が広がっている。これは少しでもはぐれたら迷
子確定だな。などと考えながら神馬さんの背中を視認しつつ、それ
についていく。それにしてもこのリュック重いな。

「そろそろ、今回の件について詳しく話して下さいよ」

歩きながら他愛ない会話をしていたというかそうでもして気を紛
らわさないと正直、辛いというのもあったのだが。そんな時、桜沢
がおもむろにみんなが薄々気になっていたがなんとなく聞きにくか
った話題を切り出してくれた。

神馬さんはGPSのような機械の画面から視線を上げ、少しだけこ
ちらに視線を寄越す。

「ああ……そう言えばまだだったな」

なんか白々しいな。それよりも桜沢にまで知らされていないとい
うのはちよつと意外だな。

「お前が知らされていないっていうのは珍しいな」

「まあね。事前にこの樹海に来るとは知らされていたんだけどそれ
以外は全く」

「すまん。急遽、といか私の独断で今回の件は決めたんだ。いろ

いろと下準備もあったせいで詳しく話せなかったな。そうだな歩きながらになるが簡単に今回の件について説明しようか」

少しだけ何故か、周囲の空気が重くなったのを感じた。

「先週、知り合いの寺の住職と会って、少し話をしたんだが」

いまいち神馬さんのイメージと一致しないような気もするが。勝手なイメージだが信仰とか信心とか薄そうだなと思っていた。なんとなくだが。一体、どういう繋がりなんだろうか。

「そこで奇妙な話を聞いてな、なんでもそれまでずっと健康体で病氣らしい病は今までしたことがないという人物がある檀家の息子にいたそうなのだが数年前からいきなり別人のように虚弱体質となり、みるみるうちに衰弱していき、つい先日、亡くなったという話だ」「それだけでは……」

東先輩が呟く。確かに、怪しいとは思うが、靈的要素の関与を決めつけるにはやや早計な気がする。

「まあ普通はそう思うわな。私もそう思った。だがこの話には続きがある。その住職なんだが、その檀家の息子の葬式に出ていた。住職は『みえる』人ではないが、それなりにこなしている方でな、たまに妙な感じのするホトケさんがあって、そういうのは分かるそうだ。本人らには言わないがね」

「で、今回、その檀家の息子の遺体がそれだったと」

「そういう事。具体的には表現しづらいんだそうだけど。そして決定的とも言える違和感がその遺体にはあり、住職はそれに気づき、そして私に話した」

「違和感？」

桜沢は既にスイッチが入ったらしく、眼を輝かせて、神馬さんの話を聞き入っている。ちなみに俺は気が重い。

「一日、安置したはずのその遺体は六月の蒸し暑い最中にも関わらず腐臭が一切せず、甘い果実のような香りが漂っていたそうだ」

樹海は謳う 其の二

「しかし、それは確かに妙ですが、やや決定打としては弱いのでは？ 失礼な話にはなりますが遺族の方が遺体に何かされた可能性も珍しく、森先輩が口を挟む。先輩らしく、あくまで論理的な意見ではあるし俺もその可能性はあり得ると思った。」

「そう、私だってその辺の素人坊主がそう言ったならその可能性もあると思うところだがさっきも言ったがそれなりの場数も踏んでいる僧だぞ。後から添加した香りと内側から自然な香りの違いくらい分かるさ。それにどんな強い香水を使ったところで腐臭と混ざって余計にエグい臭いになるだけだ。それが分からなかったとも思えん随分とその住職を買っている、いやこれは信賴しているのか？」

「という事はその檀家の息子とやらを死に至らしめた原因がこの樹海にあると？」

話の流れと現状から考えて当然の結論と言えるが一応、聞いてみる。

「まあそういう事だ。その息子が体調がおかしくなる直前及び死ぬ前日にどうやらこの樹海に来ていたらしい。特に死ぬまでの一週間などは立つ事もままならなかったのにも関わらずだ。どうだこれはもう決定打だろ？」

嫌な決定打だな。

「神馬さん、それは私としてもかなり興味深いですね。神馬さんとしてはそのその死に至らしめた『モノ』正体について何か心当たりあるんですか？」

「大体はな。私見だが木霊もしくは樹木に取り憑きし、異形の類が考えられるがこればかりは実際、見てみないとなんとも……」

「場所に関しても見当は？」

一番、不安なのはそこだ。こんなクソ重たい荷物背負わされて、適当にウロチヨロされてはたまらない。とは言ってもここまで来て戻る事など許されないだろうが。なんか理不尽だよなあ。

「下準備で忙しかったと言ったろ？ 当然そこは最も重要なポイントだ。様々な情報や森の分析を併せてかなりの確度の位置は割り出した。安心したまえ、君のその苦しみも名残惜しくも後十分程だよ」自信ありげな笑みを浮かべこちらを一瞥し、再度前を向く。

まあそれならもう少しの我慢かと少し、ほっとしたがよく考えれば、それはその檀家の息子とやらを死に至らしめた『モノ』とのエンカウントを意味するわけで、なんとも微妙な心境だ。

『あと十分程度だよ』、あの神馬さんのセリフを聞いてから一体、何十分たっただろうか。同じような風景の連続にうんざりし、腕時計で時間を確認するのも億劫になってきている。本当に精神的にも肉体的にも限界だ。それは少なからず皆一緒であり、全員の口数は極端に減りただ黙々と歩く。神馬さんだけはさっきからしきりに『おかしいな』を連発している。全く、この人は信用していいのか、駄目なのかいまいち分からない人だなあ。

そんなわけで現在に至るというわけだ。全く、なぜこうなるかな。溜息を漏らしたかったがしんどくてそれすらも出来なかった。

結局、その十分後に仕切直しの意味も込めて、小休止となった。「どうなってるんですか。神馬さん。さっきと全然話がちがうじゃないですか。もしかして本当に迷ってるとかじゃないですよね？」

あまりのしんどさからか、心中の不安を思わず吐露してしまう。言っではみたものの本当にそうだったらマジで泣きたくなる。

「いや、迷ってはいない。それだけは確信を持って言える。GPSも持ってきているから帰ろうと思えば、すぐにでも帰れるさ」

「じゃあ、帰りません？」

「むしろ問題なのは……」

無視かよ。

「思ったよりもその原因たる『モノ』が深部にいるという点だ。人の迷い込むような所だからそれほど深部にはないと考えていたんだがな」

神馬さんは顎に指を添え、考え込むような仕草をする。

「神馬さん、これ以上、霊泉に近づくのはあまりよくないのでは？」

森先輩が神馬さんに意見している。あまり見ない光景だ。

霊泉？ また聞いた事のない単語だ。言葉から推察するに神馬さんはその『霊泉』ってものを目指して進んでいるのか。

「確かに。雰囲気と読みながら歩いて、場合によっては撤退も考えてはいる。とりあえず、もう少し進んではみようとは思うよ。さて、休憩終わり、行くぞ、お前ら」

全員が渋々、立ち上がり、そしてまた神馬さんの後ろについて歩く形でハイキングを再開する。俺の肩には再び強烈な重量が食い込む。

「おい、桜沢」

少し先程の神馬さんと森先輩の会話が気になったため、話しかける。

「さっきお前らの会話の中に出てきた、『霊泉』とか『霊子』ってなんだ？」

「ん？ ああ、お前には説明した事なかったわね、そういえば。要、ちよっと説明してやって」

また森先輩かよ。桜沢にしても神馬さんにしても、なんか説明に関しては基本、森先輩に振るシステムになっているらしい。

「えーと樋口君、今、少し、呼吸とかし辛くない？」

ん？ 何の話だ？ 確かにそう言われれば、雰囲気としんどさのせいかと思っていたが確かに普段より吸っている酸素の濃度が高いような感じがする。

「そうですね、少し、空気を吸った感触がなんか「ドロツ」として
いるとか、うまく言えませんが」

「それは『私達の住んでいる地域よりもこの『靈子』が濃いから
なの。『靈子』っていうのは空气中に含まれる靈的酵素なんだけど
主に心霊スポットや聖域なんかが濃かったりするわけ。そしてこれ
が濃い地域では怪異や奇跡が起こりやすいと一般的に言われている
わ」

随分と一部の限られた業界での一般論のように思う。

「つまり、今、俺達の歩いている場所は靈子が濃いため、目的のモ
ノを見つげる前に別の怪異に遭遇してしまう可能性があるって事で
すね」

自分で言っていて、その結末だけは本当に勘弁して欲しいと切に
願った。

「そういう事。まあそれを避けるために水上君の方リュックには常
時発動型の簡易結界を発動させているんだけどね。それも完璧って
わけじゃないし、濃度が高ければ高い程、危険度も増す。ここから
はどこで引くかっていうのがターニングポイントになるかもしれない
な意味でね」

ああ、聞けば聞く程気が滅入る情報ばかりが入ってくる。じゃあ
帰ろうよ。

「で『靈泉』とはもう分かると思うけどその靈子が湧き出ている
源泉の事なの。当然、近くほど靈子は濃くなるわ」

「どう？ 分かった？」

桜沢はなぜか自分か説明したようなちよつとドヤ顔の入った笑顔
向けてくる。どういう心境なのだろうか。こいつは多分、楽しんで
るんだろうな。

「了解。理解、理解はしたよ。で帰るって選択肢をそろそろ桜沢か
ら提案してくれよ。結構、ヤバいんだろ？」

「何を言ってるのよ。おもしろいのはこっからでしょ？ 樋口君？」
わざとらしい口調で桜沢は小悪魔っぽい笑みを浮かべる。

ダメだこいつ。なんかいろんな意味手遅れくさい。ちょっと水上
とまともな会話がしたいと思った。

樹海は謳う 其の三

「そう不安がるなよ。こう普通に歩いているように見えるがちゃんと周囲の変化や違和感に気を配りながら歩いているんだ。本当にヤバイと思ったらちゃんと撤退するさ。たとえそれがなんの収穫が得られなかった結果になろうともね」

そいつは嬉しい限りだが、それもこの人のヤバいと感じるレベルってどんな程度かを知らないため、不安を拭いきれないのが正直な感想だ。

「水上、どうなんだよ。この人その辺の察知能力ってあるのか？」

「さあ？ あんまり俺も長いつきあいじゃないからな。今までの経験から言うとそのなりにあるが神馬さん自体の性格に問題があって役に立ってなかったのは一回あったかな確か」

「どういう意味だよ」

「結構、ギリギリまで攻める人なんだよ、あの人」

うわあ。また嫌な情報、聞いちまったよ。誰かこの人を止めてくれ。

そんな事を思いながら視線を神馬さんの背中に戻した瞬間、神馬さんの歩みが突然、止まったと思った次の瞬間だった。

「全員ストップ！ すぐに後退……」

全員の体が一斉に硬直、小さな衝撃音のようなものが聞こえる。神馬さんは舌打ちをしながら右手で肩を押さえ、数歩、大きくバックステップで後退し、その場でうずくまる。神馬さんが手で押さえっている箇所には馬鹿でかい緑色のアーモンドのようなモノが刺さっているように見えた。

「神馬さん、それは、一体……」

一体、どういう状況なのか。説明して欲しいところだがどうもそういう雰囲気ではない事をすぐに察し口を噤む。

「うっさい。黙れ。さっさとともっと離れろ」

そう吐き捨てる。神馬さんは大きく息を吸い、その種子のような物体を自分の体から引き離す。するとその種子と一緒にまるで触手のような根（？）が神馬さんの鮮血で真っ赤に染まり、引きずり出される。右手でその気色の悪い物体を叩きつけると左手ですぐさまその物体に札を貼り付ける。神馬さんの左肩からは結構な量の出血が確認出来、凄まじい勢いで衣服に赤黒い模様が広がっていく。

「神馬さん」

「大丈夫だ。大丈夫だから。もう少し離れよう、ここは危険だ」

傷口に手をあてがいがいい、なんとか立ち上がる。表情からいつもの余裕が消え少し、汗をかいているのが確認出来る。こんな神馬さん、初めてだ。

神馬さんの言った通りに俺達はその場から少し離れる。俺のリュックから救急箱を取り出すと東先輩と水上で応急手当を始めた。主に東先輩が指示をしそれを水上が実行するといった感じだ。

「どうします。止血はなんとかしましたけど傷の状態はあまり……すぐに医者に診てもらった方がいいと思います。思ったより深くて」
「撤退っすか？」

「はっ！馬鹿言え。ここまで来て、ここまでやられたんだ。相手も見つかったし、キッチリここでカタをつけてやるよ」

「さすが神馬さん。そう来なくちゃ」

笑みを浮かべながらもその表情に凶気を孕んませる神馬さんに本当に嬉しそうな桜沢。よくこういう状況でこんなテンションになれるよなあ。正体不明の攻撃に対する不安とか恐怖とかないのだろうか。水上と東先輩はもう慣れているのかこんな状況の二人を見てもやれやれと言った感じで各々にやら

準備みたいな事を始めている。これはこれで順応しすぎだろ。

「帰ろうよ」

俺は聞こえないような細かい声で呟いた。

「で神馬さん、あれは結局何なの？」

とりあえず、今回の件の原因をどうにかするための作戦会議が急遽、樹海のご真ん中で行われる事になった。神馬さんはさっきから自分の撃たれた方向を双眼鏡で対象物を確認している。

「おそらく木霊の一種だろうが私もああいうタイプは初めてだ。突然変異種かも。おそらくああやって人に種を打ち込んで人からエネルギーを吸収していたんだろう。種は半霊体だった事を考えるとおそらく打ち込む時だけ実体があり、打ち込まれてから物質のみ体内に吸収され、消え、霊体の種のみが残る。仕組みとしては多分そんなところだろうな」

「何か見えますか」

神馬さんは双眼鏡から眼を離し、俺へ近づいてくる。やはり、いつもと違い少し険しい表情に見える。

「ちょっと厄介だな。まあそれでも私の想定範囲からは出ていないけどね」

そう言う神馬さんは俺のリュックを漁り始め、なにやら重そうな物を次々取り出す。地面に置く度に起こる、重量感タップリの音がその重さを物語っている。

「何です？それ？」

「鎖帷子だ。霊的術式も施してあるから霊撃及び斬撃も防げる優れたものだ。これで全身を守り、あの木に近づく。そして、この徐霊剤の入ったアンプルを木の周囲に刺し、木を完全に枯らす以上が今回の作戦内容だ。後は周囲を確認し、指示を出す後衛とその指示を実行する前衛を決める。というかほとんど決まっているけどな」

嫌な予感しかない。どうせいつも通りの俺と水上が前衛コースだろう。

「前衛は水上と切石で後衛は私と東で桜沢はどうする？」

ほらな。嬉しすぎて涙が出るよ、本当に。でなぜ桜沢だけ選択権があるんだよ。どんな差別だよ。

「えっなんで私だけ？あっあれですね？私はフレキシブルな能力の持ち主だから神馬さんも使い所を迷っているんですね。前衛にも後

衛にも欲しい逸材。我ながら自分の才能の凄さに……」

「いや、別に今回の作戦で特にあんたに決まった役割がないからどっちでもいいんだ、正直。好きな方に行っていよいよ」

桜沢が笑顔のまま固まり、妙な空気が流れる。なんでこっちまで恥ずかしい気持ちにならなきゃいけないんだ。そして同じ境遇のはずなのに俺は前衛固定ってどういう事なんだ。凄く泣きたい気持ちになる。

「じゃあ、前衛で前線の方がおもしろそうだしね」

無理矢理笑みを作り、鎖帷子の置いてある俺のリュックの方へ歩を進める。ちよつと半泣きの桜沢。神馬さんもはつきり言うなあしかし。適当にどっちに振ればよかったのに。いや、改めて神馬さんの口に手を当て、笑いを堪えている所を見るとわざとか。余裕なのか？それとも憂さ晴らしか。

とりあえず俺と水上そして桜沢が鎖帷子を装着し始める。

思っていたよりこれは重いな。しかも、動き難そう。大丈夫かよ。

「神馬さん。あの木の周辺にいる人は何っすか」

覚悟の違いだろうか水上は俺よりも速く鎖帷子を着ると双眼鏡で木の方向を観察し、現状を確認する。

「ああ、あれね。開始時に説明しようと思っていたんだけど。『木隸』って言って、まああの木の守護者と言ったところかな。まあ能力は一般的な人間に毛が生えた程度だが」

神馬さんは説明不足に対して悪びれもせず解説を入れる。そしてずっと肩から掛けていたあの重そうなバックから狙撃銃っぽい物を取り出している。

おいおい何出してるんだよ、あの人は。

樹海は謳う 其の四

形状とスコープのような物が付いている所から狙撃銃ってことは分かるが、当然ながらここは日本なので完全な非合法の逸品だ。

「それ、本物ですか？」

「当たり前だろ。こんな所に玩具持ってきてどうするよ。場所が今回、人のいない場所だったからな。本来はあまり出番のない武器だよ。重いしかさばるしな。」

「あつ神馬さん。それ！」

茂みの中から場違いな嬉しそうな声が聞こえ、帷子姿の桜沢が姿を現す。

「確か、M40A3 狙撃銃だったかしら神馬さんそんな面白い物持ってたんですか。まさか今日はそれを使用する気では！？ いいなあ私も撃ってみたいなあ」

桜沢は子供ようにだだをこねる。状況が状況でなければさぞ、微笑ましい光景だろう。ていうか神馬さん、あんたはどういうルートでそんな物騒な物を仕入れたのだろうか。俺的にはそっちの方もかなり気になる。

「ダメだって。これはあんたの持ってるおもちゃと違って本物なんだから。素人が扱うにはいろいろ問題があるんだ」

銃の存在そのものが既に問題のような気がするが。いや、そもそも、桜沢の持っている麻酔銃も充分、玩具の範囲を超えてると思うが。

「またそうやって子供扱いする。私、もう十六ですよ」

いや、こんな状況でそんなわがままを言う奴を大人とは言わない。

「とにかく、今日は無理だ。また機会、作ってあげるから」

しぶしぶ、引き下がる桜沢。前衛陣が鎖帷子を装備し終え、必要な物のみを持ってきた小さなリュックに入れるといよいよ作戦開始の時となった。

「よし、いよいよ、作戦開始なわけだが指示はその今、着けてもらっているインカムから出す。もう一つ忠告だが私はあくまで全体の状況に応じた指示しか出さない。狙撃は本当に私がヤバいと思った時のみ使用するから。その辺は理解しといてね」

いまいち大胆か慎重なのかよく分からない人だな。戦闘はおそらく水上頼みになってしまいうだろう。そして水上の格闘能力から考えて相手が余程、強くない限りは圧倒する。ただ不安な要素も少なからずある。まず、この防御の為の鎖帷子がどの程度、我々の動きを制限するか。少なくとも普通の状態のようにはいかないだろう。そして全身を守らなければいけないため頭まですっぽり被って眼しか出ていない状態はかなり視界を狭める。俺や桜沢は戦闘ではあまり役に立てないのは目に見えているのでせめて水上が不意打ちや背後からやられるのを防止するくらいだ。そんな無駄かも知れない考えを巡らせていると装着していたインカムから神馬さんの声が聞こえてくる。

「準備はいいな。お前ら？ではミッション開始」

そして俺達はこれから戦場となる舞台へと勢いよく飛び出していた。

とは言ったものの対象である樹まではまだ結構距離がある上に走ってだと俺と桜沢が置いてきぼりを食らう事が早々に判明したため少し速めの徒歩での前進となった。情けないとも思うがこんな重たい物を着てなぜ水上はまだあれだけ速く動けるのかそっちの方が不思議に思う。

やはり目算で言うとおよ／＼二百メートルの間くらいだろうか、対象の方向から何かが飛んでくる。俺達の体に次々と着弾していくがそれが俺達の体内に食い込む事はなく、全て鎖帷子に弾かれ、地面に落ちる。当たった感触は種にしてはそれなり威力があり、強めにスパーボールを思い切りぶつけられる

くらいの衝撃が体に伝わる。もちろん問題ない。落ちた種にはすぐに札を貼りそれから拾って自前の瓶に入れる。神馬さんが言うには

貴重な資料なので何個か回収して欲しいとの事だ。

「神馬さん、木隸の方に変化は？」

樹との距離もかなり縮まり、残り百メートルを切る地点まで進み、少々不安な心境に駆られ、ちよつと質問してみる。

「いや、まだ動きはないな。そろそろ距離的に動いてもおかしくないんだが、ああ言うっておくが『あれ』は既に死体みたいなモノだからな水上、遠慮はいらないぞ」

「了解っす」

淡泊な水上の反応は頼もしいような気がする。と思うように努力する。

「おっ動き出した。気をつけろよ。まずいな相手は武器を取り出し始めた」

「得物の種類は何っすか！」

「鉈が四、弓が二、弓が固定で鉈はツーマンセルで前進」

「ちよつと待ってよ。弓ですって鎖帷子は弓に対しては効果薄いはずよね、確か」

桜沢の珍しく慌てた声が聞こえる。

えっそうなの？それ最悪じゃないか。いや、待てそうとも言えない。こっちには狙撃銃が後衛に構えているんだ。神馬さんにその弓兵を処理してもらえばなんの問題もない。

「神馬さん、その銃で弓兵狙えますか？」

「ダメだ。上手く遮蔽物に隠れやがってここの位置からじゃ狙えないこちらでも遮蔽物に隠れながら迎撃して」

「ったく！なんのための後衛だよ。クソッ。」

とりあえず俺達はすぐに傍にあった大きめの樹木に体を隠し、臨時作戦会議を開催する。

「どうするよ。あんまり時間がないけど、最悪撤退も……」

「いや、それには及ばない。神馬さん、敵の状況は？」

水上は俺の言葉を遮り、神馬さんと会話し始める。いや、どう考えてもこの状況はヤバ過ぎるだろ。

「敵、前衛、二組は二手に分かれ、あんたらを挟み込むように迂回気味そっちに向かって来ている」

「了解。いいか、俺はすぐにここから左側へ向かいそっち側の敵を倒す、そしてそのまま迂回しながら弓兵に近づき、弓兵も片づける。お前らには悪いが右側から来る敵の得物は鈍だ。最悪、その装備なら致命傷はなんとか避けられるはずだからここでなんとか防御に徹して俺が弓兵を倒して戻ってくるまでなんとか保ってくれ。もしダメそうだったら言え、そして出来れば逃げろ。以上」

水上はそう一方的に喋り続け、すぐにこの樹木の安全地帯から飛び出す。

その勢いよく飛び出した姿は一発の弾丸を彷彿とさせ、俺は一瞬だがこのまま水上が戻ってこないのではと縁起でもない事を考えてしまった。

樹海は謳う 其の五

水上は弓での攻撃の警戒からだろう。目標から左側へ旋回するよ
うに疾走し、木隸へと接近していく。木隸共もそれを認識したらし
く歩く速度を緩め、鉈を構える。相対距離と速度から戦闘開始まで
数秒と掛からないだろう。

水上は速度を維持したまま、急に持っているリュックをまさぐり
始めるとすぐになにやら取り出した。あれは鎖？そう思った次の瞬
間、水上は素早い踏み込んだ動作と共に腕を振る。それは遠目から
見ている俺から水上が何かの魔法を使ったと錯覚しそうになる不思
議な光景だった。全くの間合いの外の
距離に居た木隸の頭がいきなり小さく爆発するように爆ぜた。

「桜沢。水上は何をしたんだ一体」

「分銅鎖だ。あいつの通っている道場、確か黒真流とか言ったっけ
かな。その道場はなぜか今時、戦場武術を売り文句に掲げている酔
狂な道場で格闘技はもちろん、ああいう武器も使い方とかまで教え
ているらしいのよ。あの武器はなんでもしていってという許可が出
た時のみ使う得物ね。見ての通り、殺傷能力が上げつない武器だか
ら」

なるほどか思っているうちにもう一体の木隸の頭も当然の如く
爆ぜ、ドス黒い花を咲かせる。

「おい馬鹿共、ぼうとするな。そっちももうすぐ来るぞ。構えろ！」

急な神馬さんからの指示に思わず体が硬直する。

そうだった、今回は俺達も闘らなければいけないんだよな。女性
の桜沢を闘わせるわけにはいかないので必然的に俺が闘う羽目にな
りそうなのは分かっているが俺には神馬さんのような武器も水上の
ような格闘術もない。さてどうしたものか。

「神馬さん、どうしたらいいですか。この場合。出来れば指示が欲
しいんですけど」

既に敵は視界に入っていて、こちらでも接触までもうそんなに時間がなく心境的にはプレッシャーと恐怖で本当に頭がおかしくなりそうだ。だがそれでもギリギリでなぜかまだ思考する冷静さが残っているのは我ながら不思議だ。

神馬さん指示を聞いているとねすぐ近くで聞き覚えのある空気の排出音が耳元で響く。

「ちっやっぱり効かないか」

隣で桜沢がいつの間にか例の麻酔ダーツ銃を取り出し、木隸に向かって撃ちまくっていた。

特に思う事もなかったがとりあえず「やっぱ、こいつすげえな、いろんな意味で」とは思った。もう少し怖がってくれた方が可愛げがあるというもの……いや、それはそれでこいつらしくないか。

「何よ。樋口。今、ちよっと私の事、馬鹿にしたでしょ」

「さすが。桜沢姐さん、当たらずとも遠からずってとこです」

少し、戯けて見せると遠慮なく脇腹にボディブローが飛んできた。

「まあ冗談はさておき、いや、冗談ついでに言わせてもらおうかな」「何を？」

「お前は俺が護ってみせるとか言ってみたり。どうかな」

「はっ、言ってる」

少し、戸惑った仕草をしながら、鼻で笑う桜沢を後目に、俺はなぜこんな場面でここまで冷静を保っているのか、やっと気付いた。

（こいつがいるからかな……）

そう考えが浮かんだ瞬間、俺の中で熱いとも冷たいともいえないこれまでの人生で一度も経験した事のない感覚が渦巻いた。

木隸は既に攻撃の間合いまで数メートルという距離に来ていた。間もなく、接触、戦闘となるわけか。気を引き締め、落ち着けと自分に言い聞かせる。そして、大きく息を吐くと俺はこちらに向かってくる木隸に向かって走り出した。右手には除霊剤を持ち、気持ちとしては疾風をイメージした素早い動きをしたいところではある

がいかんせん自分の元々のそんな高くないポテンシャルに加え、この糞重い鎖帷子だ、鼻屑目に見てもかなり遅い。それでも俺にはもう突き進むしか選択肢はない。ここでの躊躇や迷いは即『死』に繋がる。いくら怖いと言ってもさすがにそれは勘弁だ。

「側頭部をガードしろ！」

神馬さんの怒声が鼓膜を貫き、咄嗟に左腕を上げると同時に強烈な衝撃が走る。いつの間にか間合いに入っていたらしい。鈍い痛みと共に痺れのような感覚が腕に全体に広がる。しかし、ここでの止まったり、倒れればそれもまた終焉を意味する。

俺は左腕で鉋の刃を滑らせながら、勢いに任せて直進し、ほぼ間合いをゼロの状態にする。相手は後ろへ下がり再び、間合いを取ろうとするがそれを許すわけにはいかない。俺は右手に持っていた除霊剤を木隸の太ももに突き刺す。アンブル内の液体が徐々に減っていつてはいるがその速度に不安を覚えた次の瞬間には木隸は俺に倒れ掛かってきた。

「樋口、それをすぐ盾にしろ！ 矢が来る」

神馬さんの声でなんとか、考える力をニュートラル近くまで戻し、死体をなんとか支えながら自分の位置と死体の方向を変える。

「ちっ、意外と重いな」

死体に何かが当たったような衝撃と音がわずかだが聞こえる。おそらく矢が当たったのだろう。危ねえ。

しかし、一息をつく暇すら神は与えてくれないらしく、もう一体の木隸がなんと俺を無視して木陰に隠れている、桜沢の方へ向かっていくのを視界が捉える。

「ああっもう」

「ちよっと待て！」

耳元から神馬さんの制止の声が響いたがなぜか、今回の指示では俺の行動は止まらない。いや、止められないが正しいか？

俺はすぐにリュックからもう一本、徐霊剤を取り出すとすぐにもう一体の木隸に向かって、突っ走る。すぐに後頭部に何かが掠める

感じと共にその箇所を熱を持つような感覚を覚える。おそらく矢が少し当たったか。だが……

木隸は俺が迫っているのに気付く、こちらへ振り向く。しかし、こちらは鎖帷子、一撃は凌げるならばさっきと一緒のパターンでいけるはずだ。

しかし、その木隸はこちらの予想外の行動を起こした。

あれは刺突の構えか？

「まずい、避ける！ 樋口」

そう指示が飛んできたが手遅れだった。俺は既に敵の間合いに入ってしまったっており、木隸は俺を十分に引き付けねカウンターのような形で鉦による突きを繰り出す。回避行動に出るも間に合わず、その切っ先は俺の左肩を捉える。激痛と共に走ってきた勢いのせいもありその場で引っくり返る。

鉦の先端がそれほど鋭くなかった事が幸いし、帷子を貫通しなかったのは不幸中の幸いといったところか。けどこれは終わったかもな。敵の追撃が来るだろうし、矢も……ああ、厄日だな今日は。

樹海は謳う 其の六

「樋口っ！」

そんな若干、あきらめの混ざった心情をかき消す怒声と共に桜沢が銃の砲身の方を持つという本来の持ち方とは程遠い持ち方で突進してきた。木隸もそちらに反応を示すもわずかながら桜沢の攻撃の方が速く、木隸の右顔面を捉える。銃床がめり込み、飛び散る歯の欠片と共に鈍い打撃音。木隸の体が傾き桜沢も勢い余って、木隸と一緒に倒れこむ。

俺はすぐに状況を理解、ダメージは残るものの、まだ自分が動ける事を確認しながら、立ち上がり、再び、除霊剤を握りしめる。

「おおおおおっ」

俺はなぜか雄たけびを上げつつ、現時点、一番近くに投げ出されている木隸の左手に向かって、疾走する。すぐ近くなのと桜沢の突撃のおかげもあり、難なく木隸の左手に除霊剤を打つ。だが現状においてその行為はあくまでついでであり、俺の行動のベクトルは全く別の方向に向いている。それは桜沢を護ること。このままでは弓矢のいい的だ。

すぐに俺は桜沢庇う意味で桜沢の体に自分の体を被せる。咄嗟の事とは言えやはり怖い。恐怖と妙な使命感に揺られながら。すると耳元から水上の声が聞こえる。

「弓兵、全部片付けました。桜沢さんの方はどうなっていますか」

「大丈夫よ。水上。こっちも今、片付いたところよ。神馬さん、次の指示を」

俺はなんとか状況を理解すると桜沢から離れ、すぐ、隣で大の字で横たわって大きく息をつく。助かった。

「なんとか終わったか」

「あんた、結構、やる時はやるじゃない。少し見直したわよ。」

「そいつはどうも。今はなんかそういう気持ちよりも生きてる実感

っていうのかな。妙な気持ち良さが心情的に不快っていう……言葉では表すのはちょっと難しいな」

「ふーん。なんかよく分からないけど。じゃそろそろ行こうか。一件落着は近いがまだ仕事は残ってるわ。水上と合流して、この忌まわしい一件、終わらせるとしましょう」

そう言いながら、ゆっくりと立ち上がる桜沢を見、俺も続けざま立ち上がる。

そう言われればそうだったな。あの忌まわしい樹木に除霊剤を打ちこむんだったな。面倒臭く感じるがまあ今までの工程から考えたらそれくらい楽なもんか。そんな風に思いながら木の近くにいた水上と合流する。定期的にまだ撃ってくる種がちよつとうざい。

「おう、水上。無事だったか」

「桜沢先輩達も無事で何よりっす」

時間にしてたかだか十分程度の間隔の後の再会だったが、不思議と嬉しかった。

「神馬さん、全員無事合流しました。あとはこの除霊剤を注入するだけなんですけど、木の根元くらい注入すればいいんですか？」

桜沢はとりあえず、神馬さんからの指示を一応、確認する。

「ちよつと待って。お前らの位置からその木に何かなってないか？ 実とか」

いきなり何を言い出すんだ、この人は。

とりあえず、俺達は各々、自分の頭上を見上げる。

改めて見ると本当に不気味な木だな。葉の類は一切なく。木特有の生気っていうかそういうものも全く感じない。枯れていると普通なら考えるその容姿なのにそれを否定する証拠も同時に視界に入ってきた。それは神馬さんの言っていた実だった。ただそれをりんごやみかんのような果実のような実と同じカテゴリーズされるのかとと言うと違うように思えるそんな実だった。なぜか自ら発光している。発光量は日中なのにも関わらず、目で十分、認識出来る。その光はまるで実それ自体を覆う炎のようなオーラと相まってまるせ

いか現実感が湧かない。それが見た瞬間に思い浮かんだ感想だ。数は三つ。色は赤が二つに青が一つ、大きさで言えばりんごくらいだ。がもちろんこんな果実、見た事がない。

「確かにあります。しかし、神馬さん、あれは何ですか。あんな実、あり得るんですか？」

「目の当たりにしといて今更あり得るも何もないだろう」
「それはそうですが……」

あまりに幻想的なその見た目に思わず、そんな発言をしてしまった。それほど現実感を感じさせない実だ。アダムとイヴが食った、知恵の実っていうのも実はこんな色だったのかもな。いや、こんな気持ち悪いもん食べないか。

「水上、お前の分銅鎖でその実、枝ごと採取出来ないか？」

どうやらこの奇妙な実を収穫する気らしい。何、考えてるんだか。「目算っすけど、ちよつと長さが足りないっすね。ただ、投剣なら何本か持って来ているっすけどそれでどうっすか？」

水上はそう言いながらリュックから柄と刃が一体になっているナイフを取り出す。お前は何と闘ってるんだよ。さすが戦闘担当、本当にいろいろ持つてるなあ。

「腕前の方は？」

「七〇八割ってとこっすね。この距離だと」

「じゃあ、それで頼むわ。くれぐれも実には当てなよ」

「了解。では」

「危ないからちよつと離れていてくれ」

俺と桜沢が距離を取ったのを確認するとナイフの刃の部分を持ち、振りかぶる。

その瞬間だった、俺にもよく分からないが自分の足元に霊的な力の奔流が流れているような感覚を覚える。

何が起こったと考えるとほぼ同時に何かが爆ぜるような音、おそろく銃声が樹海に響き渡った。

樹海は謳う 其の七

あまりに急激な状況の変化に理解が追いつかない。これは俺だけで水上や桜沢も同じらしく、桜沢は慌てて、神馬さんに連絡を取り、水上は険しい表情で身構える。

しかし、思考を落ち着かせる暇もなく、次の銃声が辺り一帯に響き渡る。

「神馬さん、何があったんですか？」

桜沢は尚も、神馬さんに連絡し続ける。どうやら先程から返事がないようだ。

何かが落ちるような音がし、全員の視線がその音の発生源を捜す。程なくしてその発生源は見つかる。俺達のいる場所からさらに三十メートル程奥に行った場所に人らしきものが倒れていた。

「神馬さん、あんた、まさか……」

「一応、勘違いされちゃ困るから言っておくがあそこに倒れている人物こそが 今回の件の主犯だ」

「けど、いきなり射殺する事はないんじゃないですか」

警告もせずにいきなり射殺とか普通に考えればあり得ない行動だ。こういう神経しているのか理解に苦しむ。

「いや、私も当初はそう思っていたんだがね、色々と聞きたい事もあったしね。しかし、残念ながらそんな事をさせてくれるレベルの奴じゃなかったよ」

「まさか、さっき感じた足元に感じた感覚は」

「そう、野郎が何らかの術式を使う気配を察知したんでね、しかも結構、強力なヤツを。だから撃つしかなかったわけ。撃ってなければ、お前らは今頃、その樹木の堆肥、良くて木隸にされていただろうよ」

「けど神馬さん。いくらそういう人物とは言っても、実際、殺害しちゃったわけだし、あの遺体とかってどうするの。埋める？」

桜沢が至極、生々しい質問をする。確かにどうするんだよ。あれ。さすがに死体の埋葬は遠慮したいところだ。っていうか樹海で死体埋めるとか、どこのヤクザだよ、俺たちは。

「いや、埋葬とか面倒だし、そのまま放置するよ」

あっさりと放置宣言。それはそれで問題なような気もする。

「神馬さん、仮にですよ。万が一、発見されて場合、俺達やバクないですか？」

「それに関しては問題ないわ」

いきなり、会話に割り込んできたのは森先輩の声だった。

「神馬さんが撃った男、名前は梅園 恭介、とつくに断絶したと思われていた呪術を生業とした一族なんだけど」

また面倒臭そうな名前が出てきたな、しかし。こいつらと一緒に行動するとなぜかこういう系統の人物によくエンカウントする。なんだよ呪術を生業とか怖すぎるだろ。

「で戸籍をちょっと調査してみたところ、驚くべき事が判明したんだよ」

「今回の件を下調べしていたら、引っかかってきた人物でな。どうやらこの周辺の地域で呪術に関する研究をしていたらしい。でちょっと森に調査してもらったわけさ。」

「この人物、なんと戸籍上の年齢がなんと213歳。江戸時代から生きているというとても人物だったんですよ」

しれっと森先輩は言ったが俺は自分の耳を疑う。それを聞いた他の奴らも言葉を失う。もちろんそんな事が現実、あり得るはずがないというのは小学生でも分かる。

「神馬さん、そっちの世界ではあり得る話なんですか。その、そういう霊的な力で長生きする人っていうのは。おとぎ話レベルでいうなら八百比丘尼ぐらいしか思いつかないんですが」

「いや、私もあくまで伝説や文献程度でしか私も知らん。、現実にあるとは私も思ってたよ。だが今、倒れている人物はスコープ越しとは言えどう見てもジジイには見えん。これはかなり興味深

いな」

『興味深い』ときたか。この辺りがやっぱりあの人と俺では価値観に決定的な違うんだよな。まあどっちが正しいとかのたまうつもりはないが。

「神馬さん、とりあえず実は採取しますよ？」

状況の理解を諦めたのか水上は再度、ナイフを投げる構えを取る。「ああ、待て待て。水上、私が今から銃で枝ごと落とすから、お前は落下点に行き、キャッチしろ。絶対、落とすなよ」

さっきまで極力、使用を控えていた狙撃銃を今になって、急に木の実を狩る程度の事に使用する……なるほどなんとなくだが分かってきた。

本日、二度目の銃声が再び樹海一帯に響き渡る。太陽を彷彿とさせる紅い果実は垂直の線を引くように万有引力の法則に従い、落下し、水上はそれを難なくキャッチする。やはり、こいつはこういう事をやらせれば、なんでもそつなくこなすなあと感心するが俺はそれよりも気になっている事を思わず口走る。

「神馬さん、あんた、元々、『これ』が目的だったんじゃないですか？」

「なんの話？」

三発目の銃声。今度は蒼い果実だ。

「今回の一件ですよ。本当は大体、掴んでたんじゃないですか？」でなければここまでの流れ、全てがうまくいき過ぎている。狙撃をギリギリまで行わなかったのは術者の存在を知っており、敢えて水上にああいう不確実な方法での果実の採取を指示したのか。全て神馬さんのシナリオ通りだったと考える限り、あり得ない采配の妙だ。

「そうね。まあ否定はしないよ。今回はあからさま過ぎたしね」

少し、声質に冷気と硬質が混ざる。

「えっじゃあ本当に今回の件は神馬さんの筋書き通りに事が運んでいたって事なんですか」

桜沢は素直に驚いたような声を出す。こいつのこの反応は少し意外だ。てっきり、こいつは知っていると思っていたんだが

「いつもは事前に知らせたりするんだけど、今回は自然な立ち振る舞いが欲しかったんでね、敢えて知らせなかったわけだ」

「俺たちはあんたにとって駒なのか？」

「樋口、あんた口が過ぎるわよ。そして何も分かっていない」

桜沢は俺を諷めるような口調で言い放つ。

「いいよ、いいよ。桜沢。要するにあれだろ？ お前が言いたいの
は私があんたたちを役者として巧く台本通りに動かし踊らせ、舞台
脇でほくそ笑む演出家に見える。そう言いたいんだろ？」

なかなか見透かしたように言ってくる人だな。というか分かって
やっている所もあるからだろうが妙にイラつく言い回しだ。

「そうじゃないと？ 少なくとも俺は今回の件でその疑惑をより強く
しました」

「まあ普通、そんな事、本人に言わないもんなんだがね。その真っ
直ぐな所は嫌いじゃない。けどこういうのはキツチリ言っとかない
とな」

段々、口調が普段の感じに戻りつつある。なんというかあまり相
手にされてないように感じる。なんか俺がだだっ子みたい言われる
のはなんか腹が立つ。

「で、お前に何が出来る」

いきなりに言い放たれる怒気を含んだセリフに思わず気後れし、
心情が一瞬で叱られている時のモードになる。

樹海は謳う 其の八

いきなり、痛い所を突いてくる。

「何もできない。そうだろう？それに私はあんた達を駒のように扱った事も思った事も一度だってないよ。今のあんたに言っても信じちゃくれないだろうがね」

確かに俺には何も無い。今までもを振り返っても、そう、俺には特別な力も知識もない。けどそれと今回の流れは関係ないはずだ。無力だから黙って言うことを聞けなんて横暴だ。

「俺が無力なのとあんたが演出家気取るのなんか関係が？」

「別に。ただ、今回はその方が成功率が高かったと判断したからそうしたまでだ。別にあんた達を巧く踊らせようなんて思っちゃいないさ」

そう発言し終わると同時に本日、四度目の銃声にわずかながら体を硬直させる。水上は相変わらず落ち着いた様子で難なくその落下してくる果実をキャッチする。

「さて、そろそろ撤収するぞ。場所が場所だ。長居は無用だ。お前ら、持つてるアンプルをその木の周辺の地面に刺しとけ、私たちもすぐそっちに向かうから合流後、行きとは別ルートを通して撤収する。以上」

神馬さんは銃声のどさくさで会話を強制的に中断させようとする。桜沢や水上は指示に従い、リュックからありったけのアンプルを次々、木の周りに刺していく。

「神馬さん、まだ話、終わってないですよ」

「樋口、いい加減にしなさいよ。神馬さんはそんな人じゃない！」
妙に弁護するなあ。普通、客観的に見たら、怪しすぎるだろこの人、霊的な知識にしろ、持っている銃器にしろ、何者だよって思う。
「ああ、いいって、桜沢。お前や水上との出会いは劇的だったがこいつとはそうじゃない。しかも出会って一ヶ月ちょいってとこだ。」

補正なしで私を見た場合、普通に考えたら怪しく感じるものさ」

まるで自覚があるような物言いだ。悪びれた様子もその口調から感じられない。感じるのは自信や自負ってどこか。

「樋口、じゃあ聞くがお前はなぜ、ここに立っている？正義のためか？困っている人を救うためか？違うだろ」

「俺は……」

そう改めてその質問されると確かに、俺がここにいる理由は自分でもはっきりと分かっていない部分があるからだ。確かに桜沢が気になった。取っ掛かりはそうだった。そして、日常から非日常への憧れもあった。ただその桜沢に対して俺はどうしたいのか、俺自身がどうありたいのか、どうもその辺が曖昧だ。分からないのか、分かっているのに分からない振りをしているのか。

「お前も何かしらの利があるからこそ、ここに立っている。それは私も同じだし、桜沢や水上も何かしらの目的のためにここに立っている。だから私も私は利になるように多少、動く事もままあり、あんた達を使う事もあるさ。それを含めての活動内容なんですね。それが嫌だってんならここを去るっていうのも私は全然アリだと思うよ」

耳元と正面から同じセリフがハモるように聞こえた。目の前にはいつの間にか両肩に俺と水上が持っていたリュックを背負い、堂々と立つ神馬さんの姿があった。

「それは嫌なら辞めろ。そういう話ですか？」

「まあそうなるかな。去る者は追わない主義だしね。私個人としては少々、残念ではあるが」

さて、感情にまかせてつい、半ギレみたい神馬さんに突っかかってしまったものの、こういう点で納得がいていないのは俺だけらしい。

「樋口、神馬さんはああ言っているけど実際は依頼内容や事象はちゃんとチェックして、依頼内容危険過ぎないかとか選別した上での作戦立案や指示を出してる。あんたが思っているようなフィクサー

気どりのクソ野郎じゃないわよ」

いや、それは今でも疑問だ。選別している割にはミッションの危険度が高すぎる。特に今回なんかは俺からみたら運が良かっただけのように見えるし、なんかこの人からは裏がありそうな感じがする。そう俺が今、認識している視線よりもっと上の超高高度からの演出。まあここでそれを考えたところで結論が出るわけではないが。俺がこの身を危険に晒して、ここに立つ意味はあるのだろうか。ここがもしかしたらターニングポイントかもしれない。常識的に考えれば日常への帰還は願ってもない話だろう。だがそれを拒む自分がいるのもまた事実。俺はどうしたいんだ。

「なに、今すぐ結論を出せてわけじゃないよ。あんたはまだ学生だ。それこそ時間は腐るほどある。じっくり考える事だ。じゃあ行くぞ」

俺たちは残りの除霊剤を木の周辺の地面に打ち、またあのクソ重いリュックを背負わされ、帰路につく。

「樋口、本当に辞めたりしないよな？」

桜沢が珍しく自分から寄ってきて弱気な声色で喋りかけてきた。こおやって常にしおらしくしていると実に魅力的な奴なんだがな。等等と考えながら思わず表情が緩む。

「さあな。とりあえず今すぐについてわけじゃないと思う。なあお前はなんでここにいるんだ？」

「はっ！　なんだそれ？　決まってるだろ。面白いからだ。それ以外に何がある。この刺激的な事象、そして自身が危険にさらされる状況、『生きてる』って感じがするじゃん」

万面の笑みで桜沢は即答した。俺がグチグチ悩んでいるのがなんかバカみたいになってくる。そうだなとりあえずはもうしばらくこいつの近くにいたいからでいいか。うんそれでいい。そして明日、神馬さんには謝ろう。なんか得心がいかないが。このままじゃ気まずいしな。

少しだけ胸の辺りが妙にすっきりした感じがした。それは自分に

対する正直な思考の証なのではなどとまた深く考えてしまいそうになったが面倒臭くなり思考を遮断したただ歩くことに没頭した。

樹海は謳う 其の八（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

仕事の関係上、更新頻度が落ちていきます。本当に申し訳ありませんが

もっと短い話を書きたいと思っているんですけどなんか長くなってしまうなあなどと思いつつ、今回はアクションシーンを書くという意識があつたので実際、やってみたのですがどうだったでしょうか。自分としては結構面倒だったなあ。

まあこういう要素もないと話作り上やりにくいのでやらないわけにはいかないわけでもうちょっと上手く描写出来るように意識したいところです。

個人的にはそっちに走りすぎないようにとは思ってます。個人的に中二設定が大好きなのでそっち系にいきたい自分もいたりそこっちはこっちで面倒臭かったり。

まあその辺もうまいことやっとうとは思っているのでこれからもよろしくお願ひします。なに書いてるんだかなあ……

誘う刀 其の一（前書き）

久々の更新。サボっていました。すみません。まあぼちぼちとまたやっけていくのでよろしく。

誘う刀 其の一

夏休みももう目前となった校内はどことなく浮ついた雰囲気が漂う。そんな事をこうやって語っている夏休みにこれといった予定のない俺ですらそうなのだから友人やパートナーのいる方々にとつては尚更だろう。

「その後、どうなんだい？何か進展とかあったのか？」

放課後の教室でどうでもいい事を喋りながら帰る準備をしていた時に突然そんな質問してきた。発言者は牧野 修、俺の数少ない友人の一人だ。

「いきなり、何の話だ？」

「とぼけんなよ。あの桜沢との関係だよ。ちよつとは何かあったか」面倒くさいなあ。ここで適当な返事で煙に巻けるような奴でもないし、まあある程度までならいいか。別にやましい事をしてるわけでもないしな。

「別に？毎日、喋ったり、部活の奴らと飯食ったりする程度だよ。

まだ段階でいうと外堀を埋めているってとこか」

「君はは中学生か。全くまどろっこしいな。もつと積極的にいかなきゃあの手の女はお前の好意にすら気づいちゃくれないぜ？」

確かに牧野が言う事にも一理ある。が俺自身が桜沢に対する感情が微妙なところもあるので一步を踏み出しづらい部分がある。外見としては可愛いと思うのだが好きかという点で言う就多分、好きだ。そして『愛している』かというところにはまだ何か霞がかった部分があつてはつきりしないところがある。それは多分、桜沢の問題ではなく俺自身の問題であり、まだそういった精神的な部分でガキなのだろう。だからもう少し時間が……ふん、我ながら巧い言い訳だな。

「いいんだよ。こう見えて俺はあの場所を気に入ってるんだよ。しばらく、そんな感じで十分だ」

「温いなあ。なんなら僕がその部活に入って、君をアシストしてあげようか」

「余計なお世話と言いたいところだが俺は一向に構わないぞ。ただし、お前が考えているよりも十倍、デンジャラスだからなそれだけは覚えておけよ。遺言状とかも常に書いていた方がいいかもな。あと、度々、物凄く、生を実感出来るっていう素晴らしい特典付きだ」なぜか、イラついた感じでちょっと投げやりに言ってしまう。

「ははっ冗談、冗談。この前、起こった旧校舎破壊事件といい、ヤバそうなのはなんとなく分かるさ。いい噂も聞かないし、第一、旧校舎に居を構えているって時点で勘弁だ。君子危うきに近寄らず。昔の人はいいことを言う」

そう言われればそうなんだよな。毎日、部室に行っているからあんまりそういう風に考えた事なかったけど、教師ですら近づく事すら嫌がる場所だもん。実際、ろくなことないし。

「けどさ。俺は今のお前の態度で確信したよ」

「何を」

「君はやっぱ桜沢さんが好きなんだよ。人としてでなく女性としてね」

「ああっ!?!」

「まっ頑張ってるな」

牧野は俺の反応を面白そうに眺めつつ、背を向け手を軽くかざしながら教室の外へと向かう。

俺はそれを見送ると軽く息を吐き、椅子の背もたれに全体重を預けた。

他人にああいう風に決めつけられるられるのは癪だが指摘されて初めて認識出来る事もある。所謂、第三者の視点という奴だ。少なくとも牧野には俺がそう見えるのだろう。ああっ面倒くさいな。

そんな事を考えながら、俺は旧校舎の廊下を歩き、部室を目指す。この学校にいる者ならば、誰もが恐れる、旧校舎の廊下も毎日、行き来していると特になんの感慨も湧かない。桜沢、曰く、ちゃんと

そういう風な処置を施しているそうだ。

「ういっす」

いつもの掛け声と共に部室に入る。部室を一望し、東先輩がいつも通りノートパソコンを使い、何か作業をしている。それ以外がいつもと少し違うのにすぐ気付く。まず東先輩の近くにいつもいるはずの桜沢がない点だがこれについてはあいつはよく神馬さんに付いていていなくなる事があったのでそれほど気にする事もないのだが、いつも奥の台所からしている水上の中華料理の匂いが少し、いつもと違うような気がするのだが何か新作でも作っているのだろうか。それにしても結構、凄い匂いをさせてるな。っていうか焦げ臭い。

「森先輩、今日桜沢は来てないんですか？」

俺は先輩の向かいに座りながら質問してみる。

先輩は手を止め、俺を一瞥するとブラインドのような前髪越しにある眼鏡の位置を修正する。

「台所にいるわ。なんか今日の料理は潤が作るらしいわよ」

おっとこれは初めての展開だ。っていうかあいつが料理を作れるとは微塵も思えん。まあイメージ的な俺の直感ではあるが。大雑把だし、適当だし。

「水上と一緒に？」

「水上君は今日は来ないわよ。なんか久々にちよっと道場の方に顔を出してくるとか言ってたわ」

「えっじゃあ今、台所で料理しているのってあいつ一人なんですか？」

「そうなるわね」

なんか、早くも今までとは違う形の惨劇の予感がする。

「先輩、桜沢の料理の腕ってどうなんですか？意外と家庭的だったりますか？」

「腕前でいうと、ビストロ大泉といい勝負するんじゃない？」

最悪じゃねえか。大泉 洋と互角ってもうそれ、人の食べれるボ

ーダーライン、ギリギリじゃねえか。ああっいつもと違う意味で帰りてえ。

「先輩、付いてあげてくださいよ。もう既に匂いでこれ、かなりヤバイですよ」

焦げ臭さが段々、瘴気みたいになってきているのに気付く。

「あの子、無駄にフランベとかするの好きだからね。火事にならない事を祈るわ。一応、ネットで調べて、レシピは見せたから最低限、食べれる物は出来るとは思うけど」

マジで帰ろうかなと思ったのを察したのか、立ち上がろうと足に力を込めようとした瞬間、桜沢が台所から出てくる。

「あっ樋口。喜べ、今日はなんと私が腕によりを掛けた料理が食べれるんだから。お前は今日という日を一生、忘れられなくなるよ」

それは確かに当たっている。違う意味でな。おそらくトラウマになる程って意味に俺は聞こえる。

「その前にお前、味見とかした？」

「ふふん、馬鹿だな。こういうのはさ、こう感動を共有したいじゃない。だから敢えて、味見をせず香りと女の勘を頼りに作り上げたこの逸品を皆で口に入れた瞬間の歓喜の渦、考えただけでとても素晴らしい瞬間だと思わない？」

誘う刀 其の二

「馬鹿はお前だ。せめて味見はしろよ。あと換気扇をつけろ。頭が痛くなりそうだよ。いろんな意味で」

「そう言ってられるのも今のうちよ。食べた瞬間、あなたが涙を流して喜ぶ瞬間が目に見えるわ」

桜沢は自信満々の表情で台所に再び入る。どっからこの自信は来るんだよ。それにしても凄い臭いだな。刺激臭っぽいせいか。段々、不快になってきたのでとりあえず部室の戸を開け、廊下の窓を開けね外気を入れる。

ああ普通カブリエルサファイヤの空気って素晴らしい。囚人がシャバの空気が美味いっていうシーンがあるけどこういう気分なのかもしれない。

部室に戻ると既に桜沢が既にスタンバっている。ちゃぶ台の真ん中にはなぜかフランス料理とかに出てくるでかいドーム状の蓋みたいなものが偉そうに鎮座している。

ここまで来たらもう諦めるしかないな。俺はそう覚悟を決め、ちゃぶ台の前に座る。まあポジティブに考えれば、今までこいつの料理を食べたことはないわけで、もしかしたら意外と美味いかもしれないしな。と無理矢理、自分に言い聞かせる。

「で、何を作ったんだ」

「そうね、名付けて『天使の涙』カブリエルサファイヤ」

「創作料理なのか!？ 森先輩のレシピはどうした」

「やっぱりさ。なんかそれってつまらないじゃない? レシピ通りなんてなんか最初から用意されたレールの上を走るみたいでさ。だから少し、オリジナル要素を加えてみたわけ。だから正確に言うなら

桜

沢 潤特製『天使の涙炒飯』カブリエルサファイヤチャーハン。どう?」

「炒飯かよ」

大層な中二全開の名前付けといて、最終的にいつもの炒飯とか、

拍子抜けというか安心したというか、不安なのは変わらないが。炒飯ってそんなに不味くは多分作れないと思う。

「そう言うな。とりあえずはまずはその美しい姿をご覧にいれよう。料理ってのは見た目、香り、味の三重奏だからね。あまりの美しさに食べる躊躇されちゃうと困るけどね」

いや、その理論でいくと香りの時点でかなりのクソつたれマエストロが混ざっているような気がするがそんな思惑もお構いなしに桜沢は嬉しそうにその蓋を取る。

そこには、一面の青色が広がっていた。まるで沖縄の海を彷彿とさせるその色はその物体が『炒飯』でなければ、素直に美しいと言えたかもしれない。だがその物体がこれから自分の口に入れなければいけないと考えれば、俺はそれを視界に入れた瞬間、戦慄を禁じ得なかった。

そこにあつたのは蒼い炒飯だ。それも半端な染まり具合ではなく。米を南国の海で芯から染めたようなそんな印象を受けた。正直な感想は一言。気持ち悪っ。これを食えと……いやいや、む御冗談を。森先輩の反応を見ると先輩もさすがに顔が引きつっている。ドン引きだ。

「ふふっ驚きのあまり、声も出ないところかしら。ふふん、だがこんなのは劇で言えば序章に過ぎないわ。本番はここから。さあ食べて、食べて」

まるで今から俺らが美味しいと涙を流し、『見直したよ、桜沢』って言うって欲しいってという雰囲気を全身から出しながら、小皿に炒飯をよそっている。

俺はその姿を見て、ふとひとつの疑問が思い浮かぶ。俺はこの笑顔で褒められるのを期待している桜沢に正直な感想を言うべきなのだろうか。

目の前に置かれた以上は当然食べなければいけないわけだがいかにせんこの見た目だ。食欲はみるみる減退していく。ダイエツト食品としてはいいかもしれない。

「さあ食べて、食べて♪」

嬉しそうな桜沢を後目に俺は森先輩と目を合わせ、お互い、覚悟を決める。蓮華でその謎の青い炒飯をすくうと心の中で気合を入れ、一気に口へ運ぶ。

食った瞬間に口内から鼻孔へ強烈なチーズの風味が貫く。

（なんだこれは……）

味は完全にチーズが支配しており他にもおそらく何か入れているのだろうがその全てがほとんど消失してしまっている。そしてなぜかご飯そのものがかなり水分を含んでいて、おおよそ、それは炒飯とは呼べる代物ではなく。どっちかというと感じ的にはリゾットに近いだろうかリゾットに失礼だが。というかりアクションに困る味だ。食べれなくもないが決して美味しくない。

「微妙だな」「微妙ね」

俺と森先輩発した料理の感想、第一声がハモるように室内に響く。俺は料理を租借しながら、残っている、自分の分のその炒飯（自称）を見て、さらにゲンナリする。

「それ、どういう意味？まあまあってこと？」

「いや、お前、ポジティブに捉え過ぎだから。ぶっちゃけあんまり美味しくないってこと」

「マジで！　？　っていうかお前、意外とはっきり言うな」

そうなんだよな。普通、好きな女子が作った料理ならある程度のものなら『あつ俺は結構好きかも』とか言って全部食べるものだなんとなく思っていたのだがなぜか普通にそのまま感想を言ってしまった。この辺りがこいつに対する感情の謎の部分だなと改めて感じる。

そう言いながら桜沢は自分の分の炒飯を食べ始め、ゆっくりと味わいながらわずかに表情を歪める。

「これは確かに微妙だな。色々、入れたのにチーズの味しかないし、ベチャベチャしてるし。おかしいなあ何回もフランベしたのに」「いや、フランベってそういう目的の調理法じゃないから、その時

点でアウトだよ。まあ次は水上にでも付いて貰って作ったら？」

俺はそう言いながらとにかくその炒飯をただひたすら口へ運ぶ。
このまま

食わずに捨てるのはなんか抵抗があったのでとりあえずよそわれた分は食べようと試みてはみたが、これは凄いな、食べれば食べる程不味くなっていく。舌の上に苦みを覚え始め、軽い車酔いみたいな感覚を覚える。どんな料理だよ、全く。

「おおっ！　なんだかんだ言いながら食べてるね、樋口。意外とアリ？」

「ねーよ。限りなくアウトに近いアウトだよ」

「それってただのアウトじゃん」

面倒くせえ。そんな事を心の中で呟きながら森先輩の方へ視線を向けると炒飯には手をつけず、なぜかこちらを見てニヤニヤ笑っている。

「なんですか」

「いや、別に。ただ今の君は見ていておもしろいよ。料理は不味いが」

「要まで。そこまで不味くはないでしょう」

自分の分をなんとかクリアし、お茶を飲みながら口内を洗浄する。やれやれと一息つき、部屋全体を視界で巡らせると部屋の片隅に刀が置いてあるのが目に入った。

誘う刀 其の三

部室の違和感からこの急展開だったため、気付かなかったがあれは何だ。どう見ても刀だがなぜ、こんな所に？ 普通に考えればならんかの曰く付きのモノと考えるのが妥当か。だが何も施さずに部屋に転がっているのがよく分からない。そういうヤバイモノなら札のひとつでも貼って然るべきだと思うのだが。

「なあ、桜沢。あの刀はなんだ」

俺は隣で自分の作った炒飯を無視し、茶を啜る桜沢に声を掛ける。
「ん？ ああ、あれ？ 一応依頼品だよ。知り合いの骨董商からの依頼でね。その骨董商が言うにはその業界では有名な妖刀らしいわ。持っていても、不幸になる。捨てても、不幸になる。そしてそんな刀だ、誰一人として受け取って貰えない」

「なんか呪いの武具みたいだな。あの装備したら外せないって言う」
「それに近い側面はあるわ。要するに所有者が死ぬまでその者の物としてあり続ける。正に妖刀ってわけ。まあどこまでが事実でどこからがたまたまなのかは分からないけどね」

「見た感じでは俺には何も見えないな」

「私も一緒よ。何の変哲もない刀にしか見えないわ」

珍しく意見が一致する。何もないならそれに越したことはないのだが桜沢のやや、つまらなそうな表情から意見は一致しているが思考回路は全く逆のベクトルなのだなと思った。

そんな事を考えているとふと妙な事に気づく。刀の柄の部分に目のような物がある。さっきまでなかったような……装飾か？

（おい、お前）

急にここにいる誰でもない者の声が聞こえ、驚愕のあまり、体が硬直する。

桜沢と森先輩は何やら別の話をしているらしく、こちらの変化には気づいていない。恐怖のあまり、声を掛けようとした次の瞬間、

またその声が聞こえる。

（おい、少し落ち着け）

いや、これは『聞こえる』というよりはもっと違う、そう、聴覚を通さず直接、脳に語りかけられているようなそんな感覚。

（聞こえているなら、返事をしてくれないか。反応から察する。聞こえていると見受けるが？）

（だったらなんだっていうかお前誰だ）

とりあえず、冷静を装い、思った事を念じてみる。

（私は冥月。見ての通り刀だ。君の名も聞いておこうか？）

（樋口 クロエ。で何か）

（お前、私の相棒にならんか）

（いや、いきなりなんだよ）

（そうであつたな。順を追って説明しようか。私は所謂、霊刀というやつでな。こうやって意思も持っている。付喪神は知っているか）

（物が何年か経つと物に魂が宿るとかいふ、あれか）

（そうだ。簡単に言えば俺は意思を持ち、霊体を斬る事の出来る刀というわけだ）

（で、その霊刀さんがこんな俺になぜそんな話を？）

既に胡散臭いとは思うがとりあえずもう少し聞いてみようとなんとなく思いこの会話を続ける。

（君が私を扱う資質のある人間だからだよ。現に私の声が聞こえているだろ？ しかも君にだけだ。）

確かに。桜沢や森先輩が全く反応していない。

（まあ考えておくよ）

（随分とアツサリした反応だな。あまり興味がないか）

（いや、正直ないわけじゃないが、俺はまだあんたを信用していないでね。後でその手の専門家が来るんでね。その人に鑑定してもらって、話はそれからだろ）

（慎重な事だ。いや、単に臆病なのか）

（いや、あんたどういう経緯でうちにいると思ってるんだよ。普通

に考えたら警戒するに決まっているだろうが。それとも何か？ あ
んた、調べられるとヤバイ要素でもあるのかよ)

なんか普通にこうやって脳内で会話しているがよく考えたらこれ
すげえよな。俺もなんでこう平然としてるんだか。

(ふむ。そこまで阿呆でもなかったか。学生なのでもしかしたらと
思ったがなかなかどうして)

(もう少し営業トークってヤツを学んだ方がいいんじゃない？ あれ
じゃ、その辺ガキも引かからない。後、本性だすのも早過ぎるだ
ろ。もう少し、粘れよ)

(なに、ほんの余興だ。気にしないでくれ。『こういう』誘い方を
した場合人はどういう反応するかなっていうね。もう少し面白い反
応を期待したのだが……最近の若者ってのは皆、こうなのか)
(どうかな)

なんか、よく分からないがとりあえず現状を桜沢にすぐ話すべき
だと本能的に察知し、桜沢に声を掛けようとする。が少し遅かった。
(君の反応はおそらく正しい。ただ、結果は変わらんがね)

急に金縛りのような状態になり声も出せなくなる。そして得体の
知れない『なにか』が俺の思考を侵食していく感覚。そしてそこか
ら溢れ出るはドス黒い感情。それは俺の意思ではない俺の意思。な
らば、今の俺がやろうとしている事は俺の……

(妖刀っていうのは普通、邪気を発し、手にした者を狂わせる)

『普通の妖刀』ってなんだよ。って突っ込みたかったがそんな余
裕はどうやらなさそうだ。このドス黒い感情は間違いなく『殺意』
しかも対象は……桜沢か。

(だが私ほどのレベルになれば触れずともしかも『対象』を限定し
て狂気に誘う事が出来る)

くそっ、ダメだ。まるで心の奥底から無理矢理、引きずり出され
たその殺意は俺に目の前の刀で桜沢を斬れと命じてくる。ただ斬る
だけじゃだめだ。翩るように弄ぶように。殺意と共に強烈な嗜虐心。
これは一体。

俺はそんな事を考えながらも立ち上がり、ただ一点を見つめる。その先にあるのは妖刀『冥月』。ゆっくりと歩を進め、一歩また一歩、刀へ近づいていく。それに比例するようにますます強くなっていく殺意。最早、俺に抗う術はなく殺戮劇の開幕を知らせるブザーは今、まさに鳴ろうとしている。そして俺は今、目の前にある刀に手を伸ばし……

誘う刀 其の四

しかし、俺の手のひらに走った感触は予想していた金属の冷たいそれではなく。全くそれとは逆の感触。やわらかく、そしてその弾力のある『それ』は俺の人生で覚えのない感覚が脳内に走り、先程まで刀しか見えていなかった視野狭窄のような状態も解除され、思考も正気に戻される。落ち着いて目の前を見るとそこには俺の手をつかみ、自らの胸に俺の手を押しつけている森先輩が顔を赤らめてそこに立っていた。

俺は状況を飲み込めず、混乱する。

一体、何が起こったんだ。

「おい、樋口」

いきなり横から桜沢の声が聞こえ、驚きと同時に声の方向へ向く。

「けじめだ。齒あ食いしばれ」

そこには拳を振り上げる桜沢が視界に入る。

（グーかよ）

殴られる刹那、俺はなんとなくそう思う同時に右頬に衝撃が走り、のけぞりながら、倒れる。もちろん痛いし、なんか泣きそうだ。なぜこんな目に遭わなければいけない。

「ふう、まさか相手を選ぶ妖刀とはね。予想外だったわ。樋口、大丈夫？」

「てめえで殴つていてよく言うよ。ったく」

「だって、あんた要の胸揉んだじゃない。女子の胸を揉んどいて、ただで済まそうなんて、要が許しても私が許さないわ」

「元凶はお前の持ってきた刀だろうが」

「それは確かに悪かったとは思うけどそれとあんたが要の胸を揉むのは別問題でしょ」

「なんで俺が揉みたくて揉んだみたいな話になってんだよ」

「じゃああんたは要のあのわがままボディを揉みたくないっていう

の？それこそ失礼じゃない」

「もういい。黙れバカ」

「はい、ストップ、ストップ。二人共落ち着いて」

俺達の間には森先輩の体が割って入り、一旦、会話を打ち切る。

「私の事はとりあえずいいから。問題は刀の方でしょ。潤」

「はいはい」

落ち着いた瞳で桜沢を見据え、語りかけ、場のテンションをクールダウンさせる。さすがだ。

桜沢はポケットからいつもの札を数枚取り出すと次々と刀に貼っていく。

三人共、一旦さっきまで自分の座っていた位置へ戻り、茶を淹れなおし、一服すると俺は今回の事の顛末を話し、この刀がヤバイ刀だということを改めて再認識し、刀をどう処置するかの問題となった。

「うん、まあどっちにしる妖刀って確定しちゃった以上は神馬さん預かりだろうけどな。一応、簡易式の封印札を貼ったからとりあえずは大丈夫よ」

「っていうか最初からそうしとけよな。危ねえな」

「そう言うなって。仮にお前があのまま刀を取ったとしても『放課後の血の惨劇』とはならなかったさ。刀身が抜けないように細工してあったしな」

「ったく」

「けど今回の一件でひとつ分かった事があるぞ」

「？」

「若人のエロの力は本能の殺戮欲すら凌駕する。どうだ大学の論文にもなりそうな結論だろ？」

俺と森先輩顔を見合わせる。森先輩はあきれた表情をしていたがおそらく俺もしているだろう。

とりあえず、帰りたくなった。

誘う刀 其の四（後書き）

とりあえず、再開後に軽め短編を。またこんなオチとか言わないでなんとなく書きたかったんです。桜沢の料理の腕やら胸を揉むやらなんか一気にラノベの定型みたいなのを挟んじやったなあと読み返しながら思ったり。その辺も含めてなにとぞご勘弁を。もし、ここまで読んでくださった読者さんがいればただ、ただ感謝としか言いようがない。ありがとうございます。多分まだ続くのでよろしく願います。

蒼き神の再誕 其の一

夏の暑さで目を覚まし、ダラダラと惰眠をむさぼる日々。夏休みには入ったが別にそれはさしたる変化になるわけでもなく、ただ時間だけが過ぎていく。休みなのは確かに嬉しいが趣味の読書もそんな長時間は読まないし、遊ぶ友人も正直、そんなに多くない事もあり、俺は五日ほどで既に夏休みに飽き始めていた。部活の方も依頼があれば召集がかかるらしい。そう聞かされた時は夏休みの間、そんな連絡が一切、来ないことを切に願った。予想では意外と頻繁に召集されるんじゃないかなと思っていた。願いと逆は逆に物事は運ぶ人生とはそういうものだ、最近得た教訓のひとつだ。

しかし、そんな連絡は全くなく、なんの音沙汰もないまま一週間が過ぎたある日、俺は一抹の寂しさと持てあました暇に負け（何か、起きねえかな）と一瞬、思った直後だった。俺の携帯電話がけたたましい音と共に着信を知らせたのは。

車窓から海が見え、美しくそして夏を感じさせる景色が広がっている。こういう状況でなければ、歓声のひとつも出ただろうがともそんな気分にはなれない。はずなのだが前の席では桜沢が一人、テンションを上げてはしゃいでいる。

「おお、凄い。海よ、海。要、いよいよ来たって感じねえ」

「ええ、そうね。潤。ただ、一応、依頼で来てるんだからそれだけは忘れないでね」

森先輩はそう言い終わると桜沢の方向に向いていた視線を膝の上にあるノートパソコンの画面の方へ戻す。

「分かっているわよ。相変わらずだな要はまあ安心してよ。その件を含めてのテンションが今の私ってわけだから」

こいつのそういう所も相変わらずだな。っていうか結構な時間を社内で揺られていたにも関わらず、この元気さはどこから出てくるんだよ。俺も車酔いする体質じゃないはずだがさすがにちよっと胸

の辺りが気持ち悪い。プラス厄介事を目の前にして気分は正にスト
ップ安。最悪だ。

「今回の件はあくまで確認作業が主だから、そんなに警戒しなくて
もいいと思うけど」

そう軽い感じでムードを和らげようと運転席にいる神馬さんが声
を掛けるがそれはい、そうですかヤッホーとなる程馬鹿ではな
い。

今回の依頼内容は先程、神馬さんが言っていた確認作業。所謂、
いわゆるつきの場所がありそこが本当に危険な場所かどうか、霊視的
観点から確認するという内容だ。なんでもこの地域にある海中、し
かも酸素ボンベが必要なレベルの深度に隠れ社のようなモノがあり、
そこへ俺と桜沢がスキューバダイビングするというのがミッション
内容らしい（そのためここ数日、学校のプールでスキューバの真似
事をさせられた）

想像しただけで胃が痛くなりそうな内容だ。水中でもし、そこに
『本物』がいたらどうする気だ。水中だぞ？逃げ場ないんだぞ。

そんな俺の不安をよそに車は目的の場所へ向けて疾走する

「樋口、そう深刻そうな顔するな。お前は何事も悪く考えすぎだ。
もっとプラス思考でいかなきゃ、そのままだとお前、成人前に禿げ
るぞ」

「いや、誰のせいであっていうか、今までの結果とかから顧みてそう
考えない方がおかしいですよ」

「今回は除霊は依頼内容には含まれていない、ヤバそうだったら報
告書に『や』『ば』『い』の三文字を書いてやって、依頼人に渡し
てやればいい。なにもなくても同様だ。あとは近場の海水浴場で夏
休みを満喫してもらえばいい。私や要の豊満で傲慢な水着姿が拝め
る。お前たちにとったらむしろプラスの材料の方が多いだろ？」

いや、そういう問題じゃなくて、マイナスの方が圧倒的に勝って
とてもそういう気分にはなら……

「神馬さん！ なぜ、今の話題から私を外したんですか」

突っ込むとそこかよ。

「いや、そのお前はそんなんだ、頑張れ」

「どういう意味ですか」

「いや、そういう需要もあると思うよ。なあ、樋口」

「いや、そんな事、振られても俺はどう返せばいいんですか」

「っていうかなぜ俺に振るんだよ。」

「もう、樋口君。分かってるくせに」

バックミラーにはおもしろそうにニヤニヤしている神馬さんの顔が映っている。

うぜえ。別に桜沢に対してそういう感情は……なくもないが……

「そうよ。樋口、お前はどうかなの。こんな私ってどうなの」

「わけわかんねー質問するなよ。別に俺はどうでもいいよ、そんな事」

「どうでもよくないわよ。ちゃんと答えなさいよ。貧しい私ってどうなの」

「あっ俺はどっちかって言う手平に納まるぐらいがいいっすかね」

隣でずっと黙っていた水上が真顔でいきなり答え、俺と桜沢は急に喋った水上の方向に顔を向けたまま、数秒固まる。

たまにこいつは突拍子のない発言するなあ。

「うん。っていうか水上を見習いなさい。男ならハッキリ言いなさいよ。で、樋口はどっち貧乳派、巨乳派？」

「それ、どう答えても俺は変態みたいになるだろうが」

「いいね、いいね。青春だね。そういうわけだから面倒事はさっさと片付けてお楽しみタイムへの突入するべく、お仕事頑張りますかっていうか、がんばれ」

俺たちのやりとりがおもしろかったのか、それとも余裕なのか、笑顔を見せつつワゴン車は停車する。どうやら目的地の海岸へと到着したらしい。

車酔いのせいかな、不安のせいかなどどちらが原因かは分からないが妙

に吐き気を覚えた。

蒼き神の再誕 其の二

港に着き、俺たちはとりあえず車から降り、辺りの風景を見回す。夏の日差しは厳しいが潮風がそれなりにある。そのせいか暑さそのものはそれほどでもない。

港のわりには船や人影がほとんど見られず、俺らが乗るであろう漁船が一隻とその操縦者であろう人物がこちらへ近づいてくる。

「この方が今回、調査地点までの案内人兼漁船の船長の蔵森 久人さんだ」

「どうも、みなさんこんにちは。今日はよろしく。で、姐さん、どうします。長距離の移動だったわけですし、少し休憩でも？ と言っても近くには喫茶店ぐらいしかありませんが」

この蔵森 久人という男は年齢は見た感じでは二十代後半から三十といったところか。浅黒い肌や筋肉質な腕などからいかにも漁師っぽい人だなとは思ったが地元の漁師がこういう調査に協力してくれるのはちょっと意外だと思った。漁師のイメージとしてこういうオカルト的なものに信仰が深いとか思っていたのだが若いからだろうか。

「いえ、結構です。すぐにかかってもらえますか」

「オーライ。じゃついて来て」

正直、少し休憩したいところだったのだが、まあ面倒事はさっさと片付けたいって気持ちもあるため別にいいが。

心地よい潮風と共に沖合に浮かぶ漁船。見える陸の大きさから考えるとそこまで沖には来ていないようだ。

俺は潜水の準備を桜沢としながら不安を募らせる。対して桜沢はというと鼻歌交じりに計器類をチェックしている。こいつは変わらないな。

「なんで、そんな楽しそうなんだよ。水中だぞ。最悪、逃げ場もないっていうのになぜそんなに楽しそうなんだよっていうのは聞くだ

け無駄か？」

ちよつと皮肉っぽく言ってみる。

「いや、私スキューバダイビングって初めてでさ。凄く楽しみにしていたの。樋口はそうじゃないの？」

「ここが沖縄とか南の島だったらな。こんな日本海のと真ん中で潜水して何が楽しいんだよ。しかもなんか『出る』可能性があるんだろ。最悪、溺死する可能性だって。溺死だぞ。絶対したくない死に方ベスト五に入る死因だ」

「あんたは考えすぎなのよ。今まで大丈夫だったでしょう？ 神馬さんもその辺は重々、承知しているはずよ。その上での今回のミッシヨンなんだからそんな危ない事にはならないと思うけど」

毎度、毎度の事ながら、神馬さんの事を信頼し過ぎなような気がするがなぜこいつらはそこまで信じているのだろうか。俺的にはどうも何かを隠しているような気がしてならない。

そんな風に考えながら、俺は船室を出るそこには海に向かって何かを撒く神馬さんの姿があった。

「何をしているんですか？」

「ん？ 樋口か。見ての通り、下準備だ。もしかしたらって事もあるからな、水中用簡易結界とちよつとした自動迎撃霊具をこの辺に撒いてるところだ」

神馬さんの手は釣りの球場の浮きとビー玉のようなモノを手に持っていた。

「いろいろ、あるんですね。準備してもらうのはいいんですけどそれってやっぱりそういうモノが出てくる可能性があるからやってるって事ですか」

「お前はまたそうやって悪い方にすぐ考えるなあ。何もしなかったらしなかったで文句いうクセに。心境は分かんなくてもないが少しは信じなさいよ」

神馬さんはやれやれといった感じで呆れた表情を見せ、作業を再開する。

そう言われると少々、状況に過敏に反応し過ぎかな。自己嫌悪で少し気まずい気分になる。

準備が整い、いよいよ潜る直前となる。さっきまで晴れていた空が徐々に曇天の様相を呈してきて、さら俺の不安を煽る。

「よし、準備は出来たな。今からミッションをスタートする。今回の対象物は事前に知らせた隠し神社こと『蒼竜神社』。その外観の確認と周囲の霊的現象の有無の確認。命令は基本的にこちらから出すわ。何か質問は？ないなら始めるぞ」

潜る準備をしていると目の前に水上がいるのに気付く。一応はウエットスーツを着てはいるが今回はこいつは潜らない。

「いつもとは逆だな。こういう斥候役はお前が多かったんだけどな」
「まあな。何もなければ今回の依頼、俺はただいるだけの無用の存在になっちまう」

今回の水上の役目は所謂、保険というやつだ。万が一俺達に何かあった場合状況に応じて助けに行くという絶対起こって欲しくない事態に陥った時初めて水上に役割が発生する。つまり何も起こらなければ彼は暇というわけだが桜沢と違って別に揉め事や戦闘を進んで行うタイプではないと認識しているのだがやや、不満そうな表情の水上を見ると自分の認識にやや疑問を持つ。

「何？ お前も実は何か、厄介事とかがあった方が嬉しいとか実は思ってたりする？」

「まさか、俺は桜沢先輩ほど厄災を好むわけじゃないし、闘うのもそんな好きじゃないしな。むしろそういう事はない方がいいと思ってる。俺が前に出ない事は基本いい事だからな。けど俺がここにいる理由は……」

「おい、いつまで喋ってるんだ。さっさとしろ。そういう話は後で旅館ででもしろ」

水上の少し、寂しそうな雰囲気になったが神馬さんの一喝により、いよいよ本当に潜らなければいけないらしい。我ながら往生際の悪いことだ。このまま水上と会話してもよかったのだがそう

もいかないらしい。

俺は覚悟を決め、隣にいる桜沢と一瞬、視線を合わせるとお互いうなづく。それと同時に桜沢がまず水中へ、俺もそれに引っ張られるような形で海中へ飛び込む。

水の冷たさに少し驚きつつも自分を落ち着かせ、すぐに桜沢を視界に捉える。さあ、ミッシヨンスターだ。

蒼き神の再誕 其の三

「おい、お前ら聞こえてるか？」

初めてのスキューバダイビングに少々ね面食らっていたところに耳に装着しているインカムから神馬さんの声が聞こえる。装備的にこちらから返事出来ないのだがっていうかその事は神馬さんも知っているだろうに。

「ああっそっちから返事出来ないんだったな。じゃあいいか。お前からそのままとりあえず前、方角で言うとな西方向へ進んで。すぐでかい岩みたいなのが見えてくると思うから」

指示内容を聞くと俺と桜沢は視線を合わせお互いにうなづく。『ついてきて』のジェスチャーをした後、桜沢は体の向く方向を変え、指示の方角へ進み始める。

俺も少し慌てつつそれについていく。

しかし、学校のプールで何度か練習したとはいえ、やはり本物の海だと微妙に感覚が違うような気がする。さすがに南の海のような様々な海洋生物が見られる事などは最初から期待していなかったがしかし、本来の海とはここまで生物がいけないものなのだろうか、魚の姿などが全く見えず、それなのに海水そのものは妙に澄んでいて視界はすこぶる良好。まるで生物感がなく、でかい水槽の中で泳がされているそんな妙な感覚を覚えた。

そうこう考えているうちに目的の場所に到着する。まるで岩がそこに生えているようにそれは存在した。高さは五メートル、山なりの形状をした、その岩は外観上は自然物のようにも見えるが何も存在しなかった海底にそれだけがポツンとたたずむ様は何かの意図があるのではとも考えられた。

「よし、到着したな。その岩のどっかに祠みたいになっている所があると思うからそれを捜して。くれぐれも見つけても指示があるま

で触るなよ」

いや、言われなくてもそんな得体の知れないモノに誰が触るか。

「特に桜沢。絶対触るなよ」

ああっこいつは触るわ。

「ああつ後、少しでも違和感を感じたら、知らせて。カメラからこちらもチェックしているとは言ってもカメラ越しではどうしても感知し辛いからな」

まあそうならないように祈るよ、マジで。

ほどなくして祠を発見、同時に社らしきものも見つける。話だけ聞いているとどれだけ大層な神社が沈んでいるのだろうと思っていたが失礼な話になるがそれはかなり粗末なものだった。一応、社の体は成しているがボロボロの上にとても小さく、その辺の道端にある名もなき社にすら劣る代物だった。長く海中にあったことや場所的な事も考慮にいれれば、仕方がない事かもしれない。ただ、この辺り一

帯の自然を司っていた神と聞かされていたのだが少々、拍子抜けだ。

確認のため、桜沢のカメラに向かって、『これ？』のジェスチャーを行う。

「うん、それぞれ。やっぱりかなり痛んでるわね。二人共、何か違和感とかは？」

俺と桜沢返事の代わりに首を振って返事をする。確かに妙だとも思える。いつもならばこういう場所に来た場合、周辺の霊子が濃いついもあり呼吸の際、違和感を感じたりするのだが水中にいるせいかな今回はそういう感じが全くしない。海の状況に違和感を感じるが霊的感覚としての違和感は感じられない。それが現状だ。もしかして俺達が気付いていないだけなのか。そんな嫌な思考が頭を過ぎった。

「もう少し接近してくれないか。社には『何』が祀られているか気になる」

気が進まなかったが仕方なく言われるまま、社に手が届くぐらい

の所まで距離を詰める。朧げながらも祀られている物体が何であるか見えてきた。それは水晶だった。球体である事や海草やこけのわずかな隙間から見える表面のつや等からなんとか水晶だと認識出来た。これもまた失礼ながら御神体としては少々、ありがたみに欠けるといのが率直な感想だ。まさか、今回『これ』を持って帰るとか言わないだろうな。考えただけでも罰当たりな話だがあの人なら本当に言いかねないから恐ろしい。

「ふむ、なるほど」

神馬さんの珍しく神妙そうな呟きが聞こえてくる。いつ、とんでもない命令が来るのかと考えると場所も場所なだけに不安で仕方がない。あと、桜沢が隣にいるのだが余計な事をしないかとこっちこっちで心配が尽きない。

「桜沢、樋口。やはり何も感じないか」

俺も桜沢も先程と同様に首を振り、質問に対して否定で返事をする。

「よし、分かった。お前ら戻ってこい。明日の朝もう一度来るがおそらく今回は『はずれ』っぽいな。視覚的にも知覚的にもここまで感知出来ないならこの場所はおそらく『シロ』だ」

珍しいというか初めての事なので少し驚いている。つまり無駄足というわけだがここまでの装備を揃えて、何もありません……あり得るのか？我ながらなぜ、そんな事を考えるてしまうのか不思議だった。普通に喜ばしい事だろうが。しかし、なんなんだこの腑に落ちない感覚は。俺は何か厄介事を期待していたと？そんな馬鹿な。思わずそんな思考を振り払うように首を左右に振る。桜沢が先行して帰還の途についているのが視界に映り、慌ててそれについていく。

海から上がると神馬さんは笑顔を浮かべながら、劳いの言葉と共に。

「こんな事もあるさ。明日、念のためにもう一度潜るがそれで何も発見出来なければ楽しい楽しい、自由時間としようじゃないか」

そう言いつつ水上に後片づけを指示し、蔵森さんには港へ引き返すように言うとそのまま何やら考え込み始め、そこからは何を話しかけても適当に返事されるだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7847p/>

憑かれて疲れて

2012年1月4日02時46分発行